鴨田遺跡

―― 「グリーンヒルズ・ヴィレッジ」宅地造成工事に伴う緊急発掘調査 ――

1992年　3月

茅野市教育委員会

鴨田遺跡

――「グリーンヒルズ・ヴィレッジ」宅地造成工事に伴う緊急発掘調査――

1992年　3月

茅野市教育委員会

例　　言

1．本書は茅野市豊平東嶽新水掛遺跡、鴨田遺跡の「グリーンヒルズ・ヴィレッジ」宅地造成工事に伴う発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、茅野市土地開発公社の委託事業として茅野市教育委員会が実施した。

3．発掘調査は、平成３年４月８日から平成３年12月17日にかけて行なわれた。

4．発掘現場における記録および遺物整理は、下記の調査員、調査補助員、作業員が行なった。

5．出土品、諸記録は茅野市文化財調査室が保管している。

6．本書の原稿執筆は、百瀬一郎、功刀司が行なった。文責は文末に記した。

発掘関係者名簿

文化財調査室

室　　長　長田　篤

係　　長　鵜飼幸雄

事　務　局　両角一夫、清水園恵（臨時）

調　査　員　守屋昌文、小林深志、功刀司、小池岳史、伊東みゆき（嘱託）、百瀬一郎（臨時）

調査補助員　赤堀彰子、牛山市弥、牛山徳博、占部美恵、杉本裕子、武居八千代、堀内　潭

発掘・整理作業参加者　矢野聡美

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯 …… 1
第Ⅱ章　調査の方法 …… 1
第Ⅲ章　新水掛遺跡の調査 …… 1
第Ⅳ章　環　境 …… 2
第１節　自然環境 …… 2
第２節　遺跡の層序 …… 2
第３節　歴史環境 …… 4
第Ⅴ章　遺構と遺物 …… 16
第１節　縄文時代の遺構と遺物 …… 16
(1)　住居址 …… 16
1．第１号住居址 …… 16
2．第２号住居址 …… 16
3．第３・４・７・８号住居址 …… 21
4．第５号住居址 …… 22
5．第６号住居址 …… 22
6．第９号住居址 …… 23
7．第10号住居址 …… 23
8．第11号住居址・第２号配石 …… 24
9．第12号住居址 …… 33
10．第13号住居址 …… 45
(2)　第１号竪穴状遺構 …… 45
(3)　第１号方形柱穴列 …… 46
(4)　第１号竪穴 …… 46
(5)　第１号焼土址 …… 53
(6)　配　石 …… 53
1．第１号配石 …… 53
2．第２号配石 …… 55
(7)　第１号屋外埋甕 …… 55
(8)　土　坑 …… 55
第２節　平安時代の遺構と遺物 …… 94
1．第14号住居址 …… 94
第Ⅵ章　まとめ …… 97

鴨田遺跡住居址出土石器一覧表 ……100
鴨田遺跡土坑一覧表 ……101

挿図目次

1 第1図 鴨田遺跡・新水掛遺跡位置図（1/25,000）……5
2 第2図 新水掛遺跡発掘区域（1/2,500）……6
3 第3図 鴨田遺跡周辺の地形と発掘区域（1/2,500）……7・8
4 第4図 鴨田遺跡第II次調査区・北西地区遺構分布図（1/400）……9・10
5 第5図 鴨田遺跡西地区遺構分布図（1/400）……11・12
6 第6図 鴨田遺跡東地区遺構分布図（1/400）……13・14
7 第7図 遺跡の層序（1/40）……15
8 第8図 第1号住居址（1/60・1/30）……17
9 第9図 第1号住居址出土遺物(1)（1/4）……18
10 第10図 第1号住居址出土遺物(2)（1/4）……19
11 第11図 第2号住居址（1/60・1/30・1/4）……20
12 第12図 第2号住居址出土遺物（1/3）……21
13 第13図 第3・4・7・8号住居址（1/60）……25・26
14 第14図 第3・4・7・8号住居址炉址（1/30・1/3）……27
15 第15図 第3・4・7・8号住居址出土遺物（1/4）……28
16 第16図 第5号住居址（1/60・1/30・1/4）……29
17 第17図 第6号住居址（1/60・1/4）……30
18 第18図 第9号住居址（1/60）……31・32
19 第19図 第9号住居址炉址（1/30）……33
20 第20図 第9号住居址出土遺物(1)（1/4）……34
21 第21図 第9号住居址出土遺物(2)（1/4）……35
22 第22図 第10号住居址（1/60・1/30）……36
23 第23図 第10号住居址出土遺物（1/4・1/3）……37
24 第24図 第11号住居址確認面礫出土状況・第2号配石（1/80）……38
25 第25図 第11号住居址（1/60・1/30）……39
26 第26図 第11号住居址出土遺物（1/4）……40
27 第27図 第12号住居址・柱穴内遺物出土状況（1/60）……41
28 第28図 第12号住居址炉址・集石土坑・出土遺物（1/30・1/3・1/4）……42
29 第29図 第12号土坑柱穴内出土遺物（1/3・1/4）……43

30　第30図　第13号住居址（1/60・1/30・1/3）……44
31　第31図　第１号竪穴状遺構（1/60）……45
32　第32図　第１号方形柱穴列（1/60）……47
33　第33図　第１号竪穴（1/60）……48
34　第34図　第１号竪穴遺物出土状況（1/40）……49
35　第35図　第１号方形柱穴列・第１号竪穴出土遺物(1)（1/3・1/4）……50
36　第36図　第１号竪穴出土遺物(2)（1/3）……51
37　第37図　第１号竪穴出土遺物(3)（1/3）……52
38　第38図　第１号竪穴出土遺物(4)（1/3）……53
39　第39図　第１号焼土址・第１号配石・第１号屋外埋甕（1/40・1/3・1/4）……54
40　第40図　西地区土坑(1)（1/40）……58
41　第41図　西地区土坑(2)（1/40・1/4）……59
42　第42図　西地区土坑(3)（1/40）……60
43　第43図　西地区土坑(4)（1/40・1/4・1/3）……61
44　第44図　西地区土坑(5)（1/40）……62
45　第45図　西地区土坑(6)（1/40）……63
46　第46図　西地区土坑(7)（1/40）……64
47　第47図　西地区土坑(8)（1/40）……65
48　第48図　東地区土坑(1)（1/40・1/3）……66
49　第49図　東地区土坑(2)（1/40・1/3）……67
50　第50図　東地区土坑(3)（1/40・1/3・1/4）……68
51　第51図　東地区土坑(4)（1/40・1/3）……69
52　第52図　東地区土坑(5)（1/40・1/4）……70
53　第53図　東地区土坑(6)（1/40・1/3）……71
54　第54図　東地区土坑(7)（1/40・1/3）……72
55　第55図　北西地区土坑(1)（1/40・1/3）……73
56　第56図　北西地区土坑(2)（1/40・1/3）……74
57　第57図　北西地区土坑(3)（1/40・1/4・1/3）……75
58　第58図　北西地区土坑(4)（1/40・1/20）……76
59　第59図　第134号土坑出土遺物（1/4）……77
60　第60図　北西地区土坑(5)（1/40・1/4・1/3）……78
61　第61図　北西地区土坑(6)（1/40・1/3）……79
62　第62図　北西地区土坑(7)（1/40・1/3・1/4）……80
63　第63図　北西地区土坑(8)（1/40・1/3）……81

64　第64図　北西地区土坑(9)（1/40・1/3・1/4）……82
65　第65図　北西地区土坑(10)（1/40・1/3）……83
66　第66図　北西地区土坑(11)（1/40・1/4・1/3）……84
67　第67図　北西地区土坑(12)（1/40・1/3・1/4）……85
68　第68図　北西地区土坑(13)（1/40）……86
69　第69図　北西地区土坑(14)（1/40）……87
70　第70図　II次調査区土坑(1)（1/40・1/3）……88
71　第71図　II次調査区土坑(2)（1/40・1/3）……89
72　第72図　II次調査区土坑(3)（1/40・1/3）……90
73　第73図　II次調査区土坑(4)（1/40・1/3）……91
74　第74図　II次調査区土坑(5)（1/40・1/3）……92
75　第75図　II次調査区土坑(6)（1/40・1/3）……93
76　第76図　第14号住居址（1/60）……95
77　第77図　第14号住居址出土遺物（1/4）……96

図版目次

図版1　第II次調査区　東側全景（北東側から）　第10号住居址（南側から）
第11号住居址（南東側から）　第12号住居址（南東側から）
第13号住居址（南側から）
図版2　北西地区全景（北西側から）　北西地区全景（南側から）
西地区全景（西側から）　西地区全景（南東側から）
図版3　東地区全景（北東側から）　東地区全景（北西側から）
東地区発掘調査作業風景　東嶽4737開発委員会による発掘調査視察
発掘調査作業風景
図版4　第1号住居址出土土器　第2号住居址出土土器　第3号住居址出土土器
図版5　第4号住居址出土土器　第4・7号住居址出土土器
第8号住居址出土土器　第5号住居址出土土器
第6号住居址出土土器
図版6　第9号住居址出土土器　第10号住居址出土土器と石器
図版7　第11号住居址出土土器　第12号住居址出土土器
図版8　第14号住居址（南側から）　第14号住居址出土土器
図版9　第163号土坑出土土器　第144号土坑出土土器　第169号土坑出土土器
第179号土坑出土土器　第1号屋外埋甕出土土器　第134号土坑出土土器

第１号竪穴出土土器　第150号土坑出土土器
図版10　第79号土坑出土土器　第12号土坑出土土器　第29号土坑出土土器
第92号土坑出土土器　第９号住居址出土石器
図版11　新水掛遺跡調査前現況(1)～(3)　新水掛遺跡重機作業風景(1)～(3)

第Ⅰ章　調査の経緯

平成２年度に茅野市土地開発公社により、住宅団地「グリーンヒルズヴィレッジ」の宅地造成工事が計画された。住宅団地用地である茅野市豊平東嶽には新水掛遺跡、鴨田遺跡が所在するため、平成２年４月26日に長野県教育委員会文化課、茅野市土地開発公社、茅野市教育委員会により鴨田遺跡に関する保護協議が実施された。鴨田遺跡については、遺跡の範囲確定のため平成２年度中に試掘調査を実施し再協議を行なうこととし、新水掛遺跡については造成工事に先立ち発掘調査を行なって記録保存を行なうこととなった。

この協議結果を受けて、茅野市教育委員会では平成２年11月６日から平成２年12月４日にかけて鴨田遺跡の試掘調査を行なった。試掘調査結果を基に再協議を行なった結果、平成３年度に鴨田遺跡の発掘調査を実施し、記録保存を行なう事とした。

鴨田遺跡の発掘調査は平成３年４月８日から８月18日までの第Ⅰ次調査と、10月28日から12月17日までの第Ⅱ次調査との２回に分けておこなわれた。新水掛遺跡の調査は平成３年８月15日から10月26日にかけて行なった。このうち新水掛遺跡については、遺構、遺物の検出は認められなかった（第１図）。　（功刀）

第Ⅱ章　調査の方法

第Ⅰ次調査では、平成２年度の試掘調査の結果をもとに、西地区、東地区、北西地区の３地区を設定し、調査を行なった。20m四方の大グリットの中に、２m四方の小グリットを配置し、大グリット、小グリットとも、南北軸をアラビア数字で、東西軸をアルファベットで表示した（第４図、第５図、第６図）。第Ⅱ次調査では、２m四方のグリットを設定し、南北軸をアラビア数字で、東西軸をアルファベットで表示した（第３図）。

表土剝ぎは、重機により行なったが、北西地区、第Ⅱ次調査区では遺構外の遺物はグリット単位で取上げた。遺構の確認面は漸移層上面に設定したが、西地区、東地区の漸移層の堆積が薄い部分では、ハードローム上面を確認面とした部分がある。　（功刀）

第Ⅲ章　新水掛遺跡の調査

新水掛遺跡については調査区にトレンチを入れ、遺構の有無を確認した（第２図、図版11）。調査区の大部分が、道際の傾斜面であったことから重機による調査では、トレンチを設定すること

が困難であり、調査区域全体の面積からするとわずかな範囲の調査に終った。

Aトレンチでは遺構、遺物の出土はなく、CトレンチからIトレンチでは漸移層およびハードローム層は原地形とほぼ同じ傾斜をみせ、H・Iトレンチでは、厚さ約100cmの暗褐色土層の下に、長径約30cmから50cmの礫からなる礫層が検出された。この礫層を深さ約160cmまで重機により掘り下げたが礫層が続くため、より以上の調査は不可能であると判断し、調査を終了した。いずれのトレンチからも遺構、遺物は検出されなかった。（功刀）

第IV章　環　　境

第1節　自然環境

八ケ岳の西麓は火山の噴出による堆積物の上に御岳、乗鞍火山噴出物の風成堆積物がかさなりき台地は長峯状を成している。鴨田遺跡の立地も同様の標高1030～1070mの台地上で、北には国の特別史跡『尖石遺跡』、新水掛遺跡の尾根が並立し、南に金堀場遺跡の台地が張り出している（第1図、第3図）。

鴨田遺跡の台地は、北を柳川支流の鳴岩川と角名川支流の唐沢を取入口としている鳴岩三ケ村堰が流れ、南は西麓を北東から南西に横切る大河原堰からわずかな落水と谷の各所から湧き出している豊富な湧水が潤している。鳴岩三ケ村堰は取水口となっている鳴岩川が水素イオン濃度4.5の強酸性を示し飲料として不適なほか、魚も塩之目下流でなければ生息していない。一方、湧水の多くは谷底に作られた棚田に利用され一部は上水道の水源として活用されている。この湧水に野鴨が群集したことから小字名も鴨田となっている。台地上は1947年から行なわれた強制開墾までは赤松の山林で、今回のII次調査該当地区にはまだ赤松林が残っていた。開墾後はまず桑畑が作られ、その後は品質の高い大根、花卉が栽培された。

鴨田遺跡の尾根先端で合流した水は上場沢渓谷を下り柳川の本流にそそぎ込む。この間河川により形成された河岸段丘を利用した棚田が続いている。（百瀬）

第2節　遺跡の地形と層序

鴨田遺跡の層序は、台地平坦面の浅い谷状地形に土層が厚く堆積した部分があったため、周辺の遺跡である尖石遺跡、上見遺跡よりも多くの土層が観察された。層序は上位から1．耕土層、2b．黒色土層、2a．黒褐色土層、3a．暗褐色土層、3b．暗黄褐色土層、4a．黄褐色土層（漸移層）、4b．明黄褐色土（ハードローム）、5．灰黄褐色土の順で堆積していた（第7

図)。遺物は1．耕土層から3a．暗褐色土層に多く含まれ、4a．黄褐色土層からもわずかながら出土している。1．耕土層、2b．黒色土層には石灰肥料の粒子を含んでいるため、遺物包含層は、2a．黒褐色土層層、3a．暗褐色土層、3b．暗黄褐色土層である。西地区の南東隅では、2b．黒色土層、2a．黒褐色土層が逆転していた(第7図H33j7)。ここで観察された黒色土層が東地区、西地区東壁で観察された黒色土と同じものか否かは判定できなかった。この地点は、西地区の中でも最も低く、谷に向って落ち込んでいく地点であることから（第6図)、2a．堆積以前に腐食を多く含む土が堆積した時期があったと思われる。各層の土層観察の結果は次の通りである。

1．	暗褐色土	耕土層。粒子は細かく、締っている。粘性は弱い。石灰肥料を少量含む。
2b．	黒色土	粒子は細かく、締っている。粘性は弱い。1．暗褐色土層との境界面付近に、稀に石灰肥料の粒子を含む。
2a．	黒褐色土	粒子は細かく、締っている。粘性は弱い。
3a．	暗褐色土	粒子は細かく、締っている。粘性は弱い。
3b．	暗黄褐色土	粒子は細かく、締っている。粘性は弱い。1cm以下のロームブロックを少量含む。
4a．	黄褐色土	漸移層。粒子は細かく、締っている。粘性は弱い。
4b．	明黄褐色土	ハードローム。粒子は細かく、締っている。粘性は弱い。
5．	灰黄褐色土	粒子は粗く、締っている。粘性は強い。3cm以下の礫を多く含む。

鴨田遺跡は台地平坦面に広がっている。一見平坦にみえる台地上面にも、若干の微地形が観察できる。地表面でみると、台地中央に2条の浅い谷が走っており、南側の谷は東地区内を走っている（第3図)。確認面での比高差は約1mである（第6図)。この谷地形は北西に走り、西地区と北西地区の中間地点で北側の谷地形と合流する。合流した後は、防火用配水池付近を通り、台地北側の谷と南側の谷が合流する地点へ向っている(第3図)。土層観察では、尾根状の部分では2b．黒色土層と3a．暗褐色土層が欠ける傾向があり(第7図F42g10、H37d2)、谷状地形の中央付近では2b．黒色土層、3a．暗褐色土層を含む各層が厚く堆積していた（第7図H42g10)。西地区と第II次調査区との間から新たな谷地形が生じており、第II次調査区と北西地区の間は2条の谷で分けられていた。3b．暗黄褐色土、4a．黄褐色土層の境界面から2b．黒色土層上面まで浅い谷状地形が確認できることから、縄文時代から平安時代においても浅い谷状地形であったと考えられる。

台地南斜面には、抉られたような奥行の浅い谷が見られる(第3図、第6図)。東地区南東隅の谷は未発達であるが、西地区南西隅の谷は比較的奥行がある。この谷と南斜面下の水田との間は狭い平坦面となっており、僅かに水が湧き出す湿地となっていた。この谷は調査前にはハンノキ

の樹林となっていたが、谷の調査を行なっていないため、谷の形成時期および形成過程は不明である。

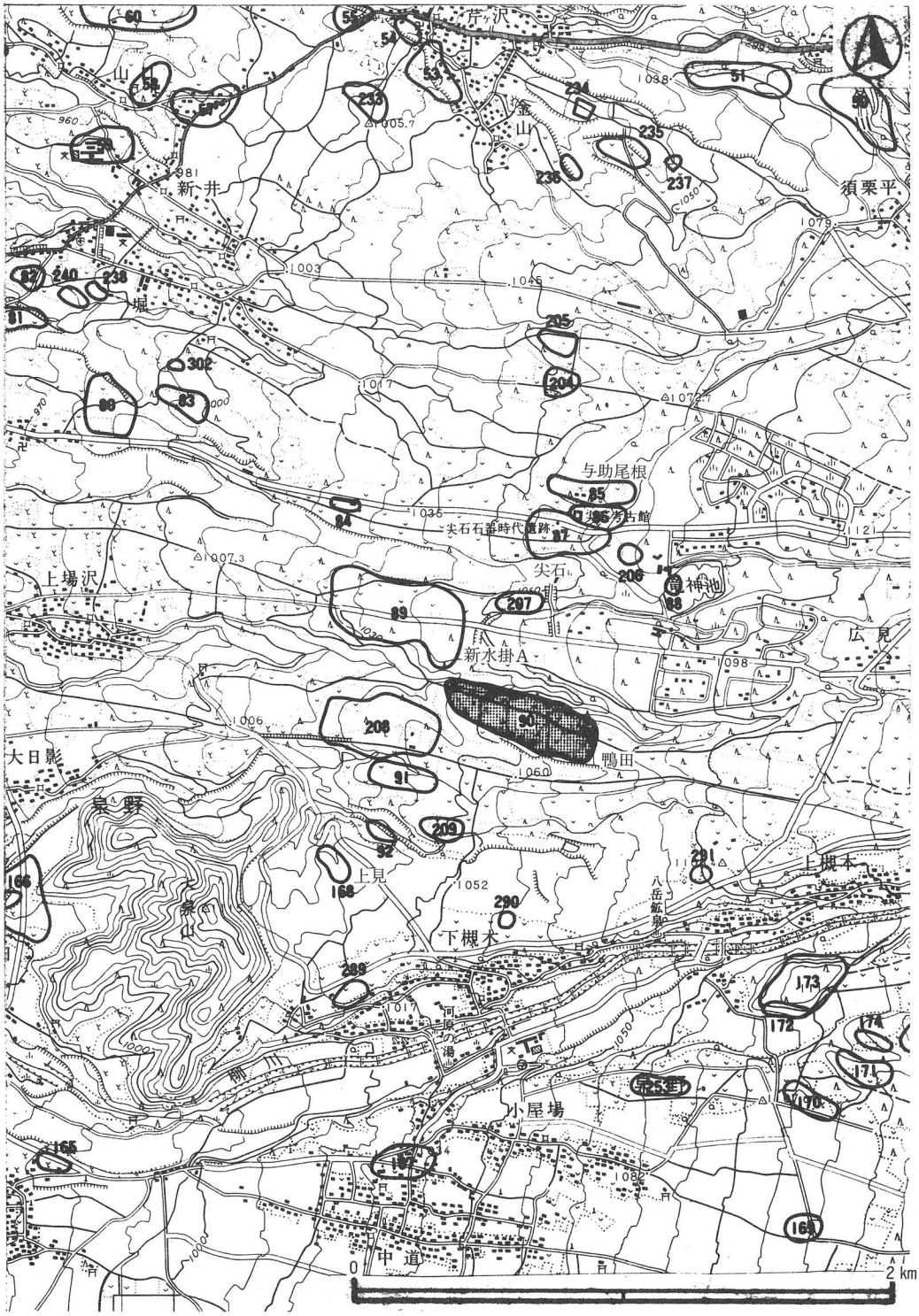
鴨田遺跡の集落址は、第II次調査区のある尾根状地形に立地し、谷を2つはさんだ尾根上にある北西地区には方形柱穴列や土坑群が分布している。台地中央の平坦面には土坑群以外の遺構は検出されていない。谷状地形中央部に浅い土坑があった場合は重機で削平してしまったことも考えられるが、3b．暗黄褐色土層から2a．黒褐色土層までに縄文時代の生活面があり、第28号土坑のような土坑（第43図）があった場合は検出されるはずである。第28号土坑のような深くしっかりした土坑は、谷中央部には作られなかったと考えてよいと思われる。（功刀）

第3節　歴史環境

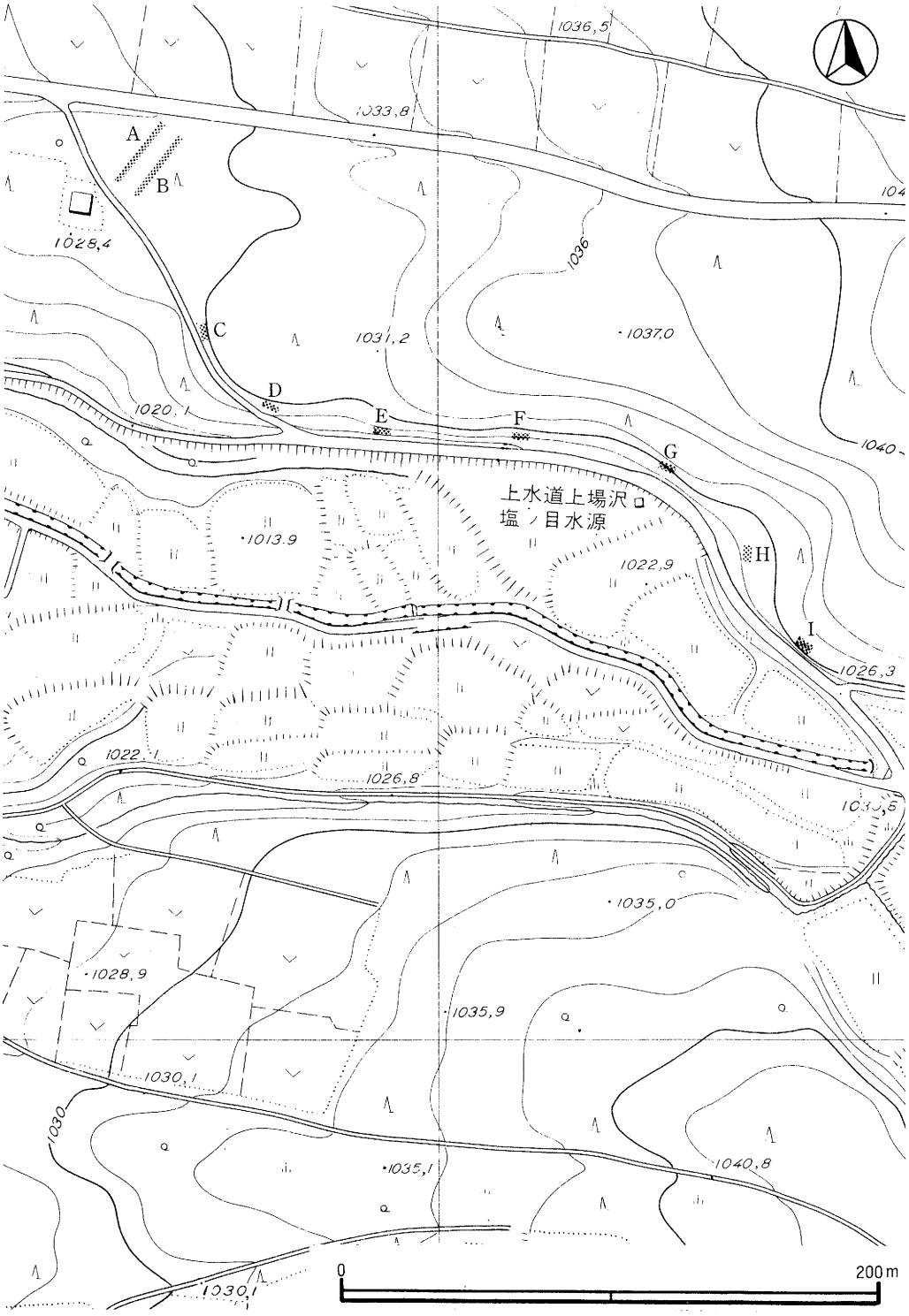
新水掛遺跡が紹介されたのは、昭和12年にさかのぼる。調査者は茅野市内の他の遺跡と同様、宮坂英弌氏で、土偶2点の出土が知られている（宮坂　1937）。新水掛遺跡はその後、道路拡幅工事に伴い発掘調査が行なわれ、土坑、埋甕が検出された（茅野市教育委員会　1981）。

鴨田遺跡も、宮坂英弌氏により昭和41年に紹介された（宮坂　1966）。宮坂氏は、鴨田という地名の由来となっている湧水地を囲む台地を鴨田遺跡として把握している。このうち北側の台地とされているのは、新水掛遺跡がある台地である。豊平村誌に記されている敷石遺構はこの台地から検出されたものであろう。鴨田遺跡からは道路改修の際、炉址、遺物の出土が報じられている。炉址が検出された台地は「東の台地に登る地点」とされ、今回の調査において北西地区と称した発掘区がある台地であると考えられる。この記述から、北西地区の西側にも遺跡が広がっているものと考えられる。宮坂氏は鴨田遺跡の時期について縄文時代中期初頭から後期に及ぶとしたが、今回の調査でも前期末・中期初頭から後期前半の遺構、遺物が確認された。

鴨田遺跡の周辺には尖石遺跡（第1図　茅野市遺跡分布図　No.87）、新水掛A遺跡（No.89）、金堀場遺跡（No.208）、稗田頭A遺跡（No.91）など規模の大きな集落遺跡が密集している。この他稗田頭B遺跡（No.209）、上見遺跡（No.168）、新水掛B遺跡（No.207）など小規模であると考えられている遺跡が存在する。これらの遺跡の内で、発掘調査により遺跡内の構成がほぼ判明しているのは、尖石遺跡、与助尾根遺跡、上見遺跡である。勅使河原彰氏は『茅野市史』において、鴨田遺跡と金堀場遺跡における居住期間が相互補完的な関係を示すと指摘されている（勅使河原1985）。今回の調査では、鴨田遺跡の竪穴住居址の時間的分布に限った場合、中期初頭、中期中葉に断絶がある可能性が考えられた。上見遺跡においては、中期初頭の土坑群が検出され、居住遺構と考えられる遺構は検出されていないが、中期初頭の鴨田遺跡においても土坑群のみが検出され、竪穴住居址等の明確な居住遺構は検出されなかった。（功刀）



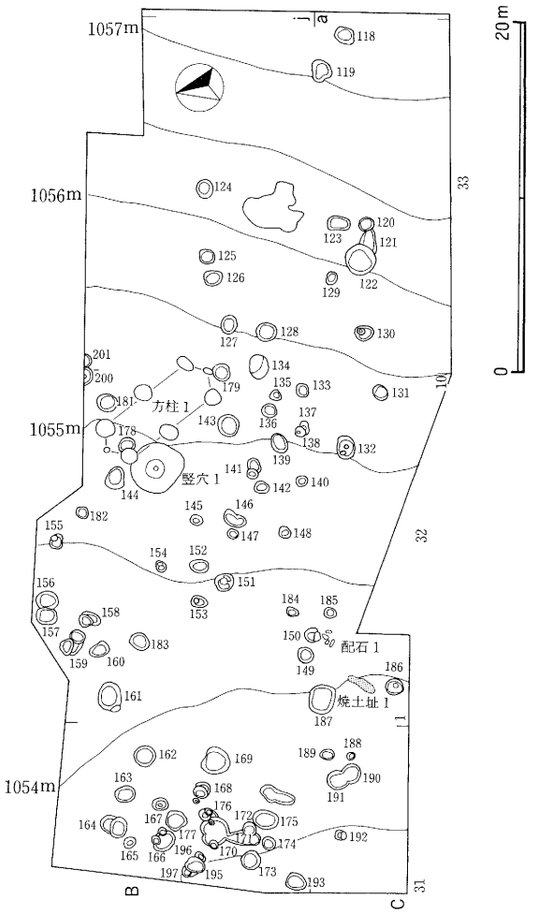
第１図　鴨田遺跡・新水掛遺跡位置図（S＝1/25,000）



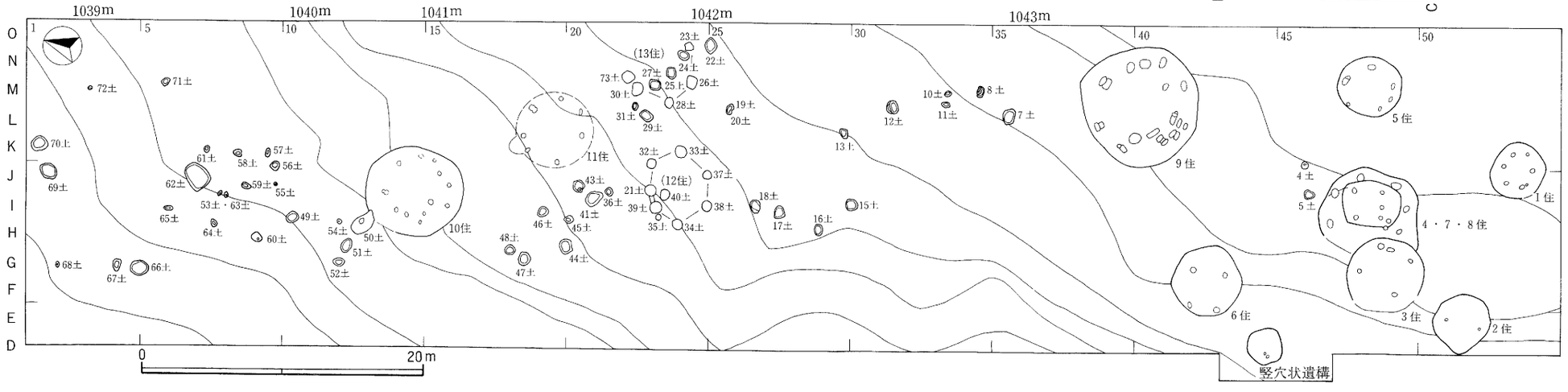
第2図　新水掛遺跡発掘区域（S＝1/2,500）

第３図　鴨田遺跡周辺の地形と発掘区域（Ｓ＝1/2,500）

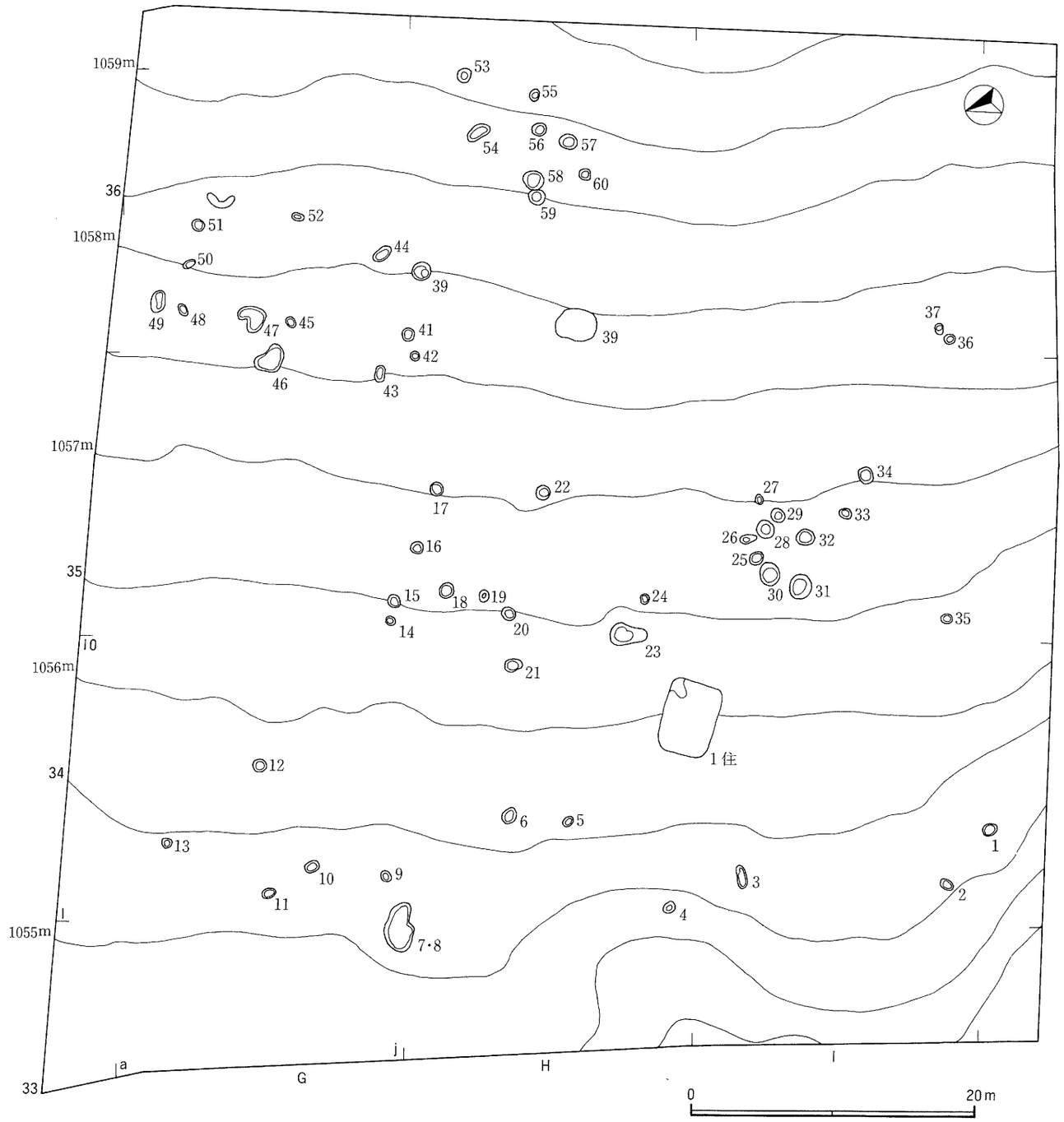
北西地区遺構分布図



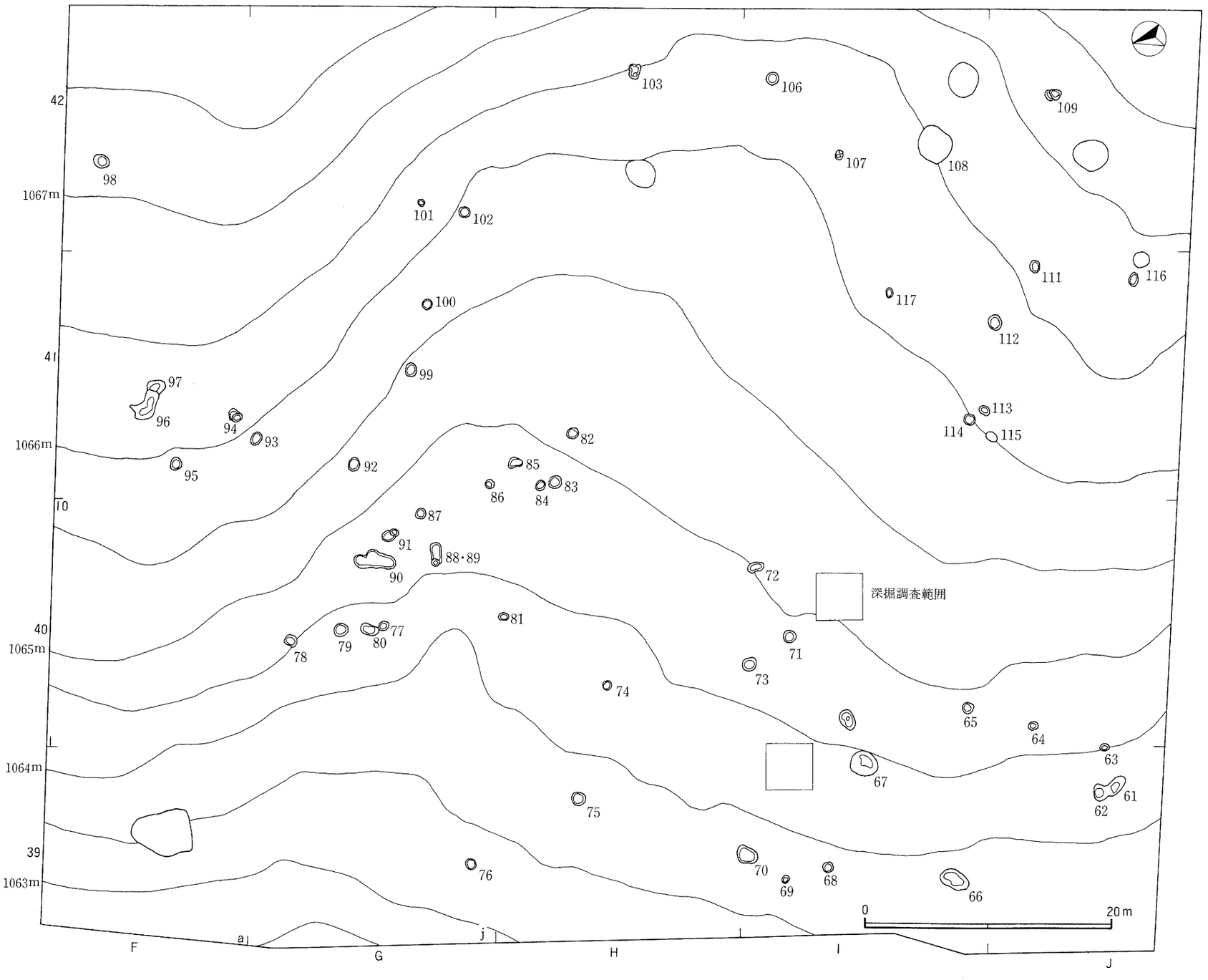
第II次調査区遺構分布図



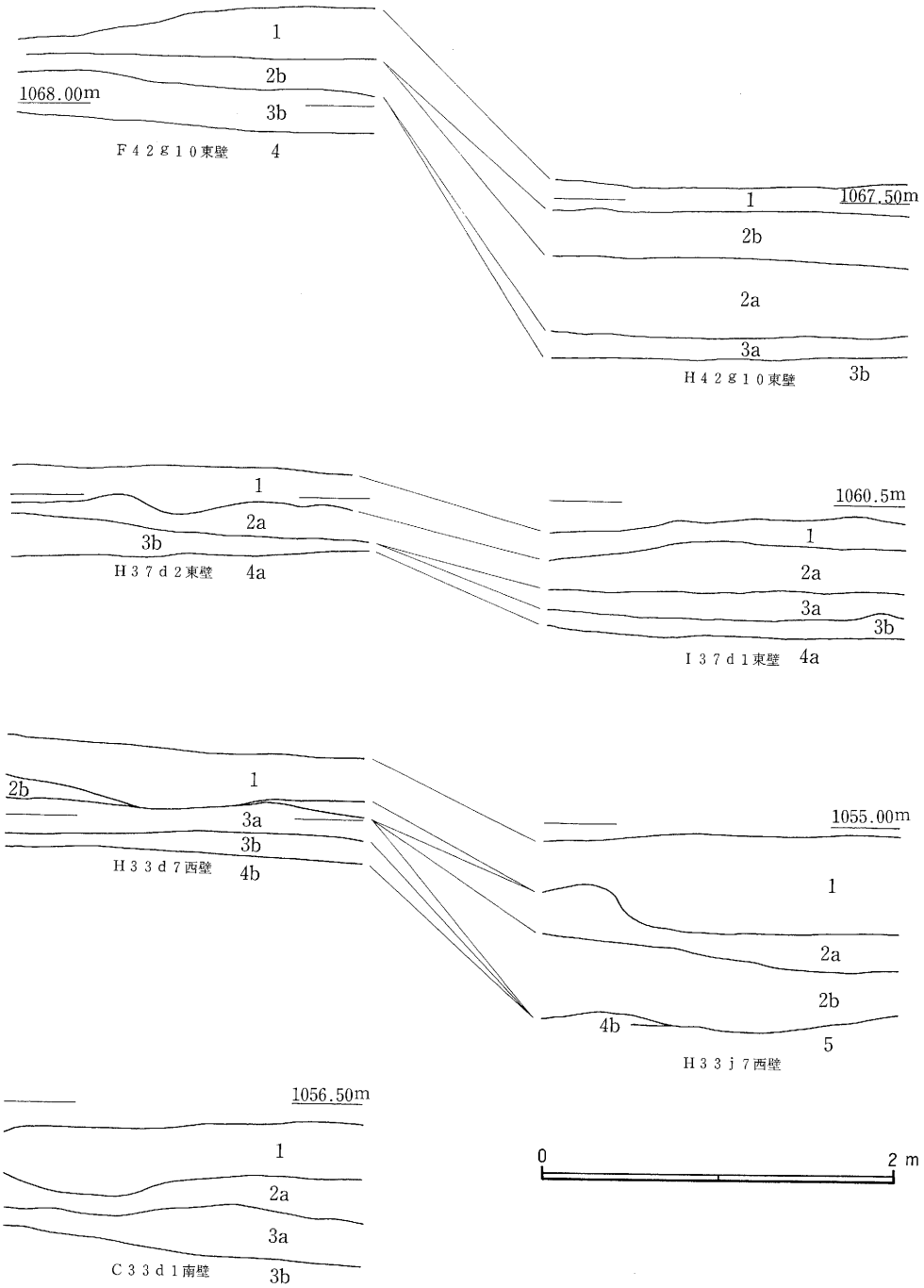
第 4 図　鴨田遺跡北西地区・第II次調査区遺構分布図（S＝1/400）



第５図　鴨田遺跡西地区遺構分布図（Ｓ＝1/400）



第6図　鴨田遺跡東地区遺構分布図（S＝1/400）



第7図　遺跡の層序（S＝1/40）

第Ⅴ章　遺構と遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

(1)　住居址

１．第１号住居址（第８・９・10図、図版４）

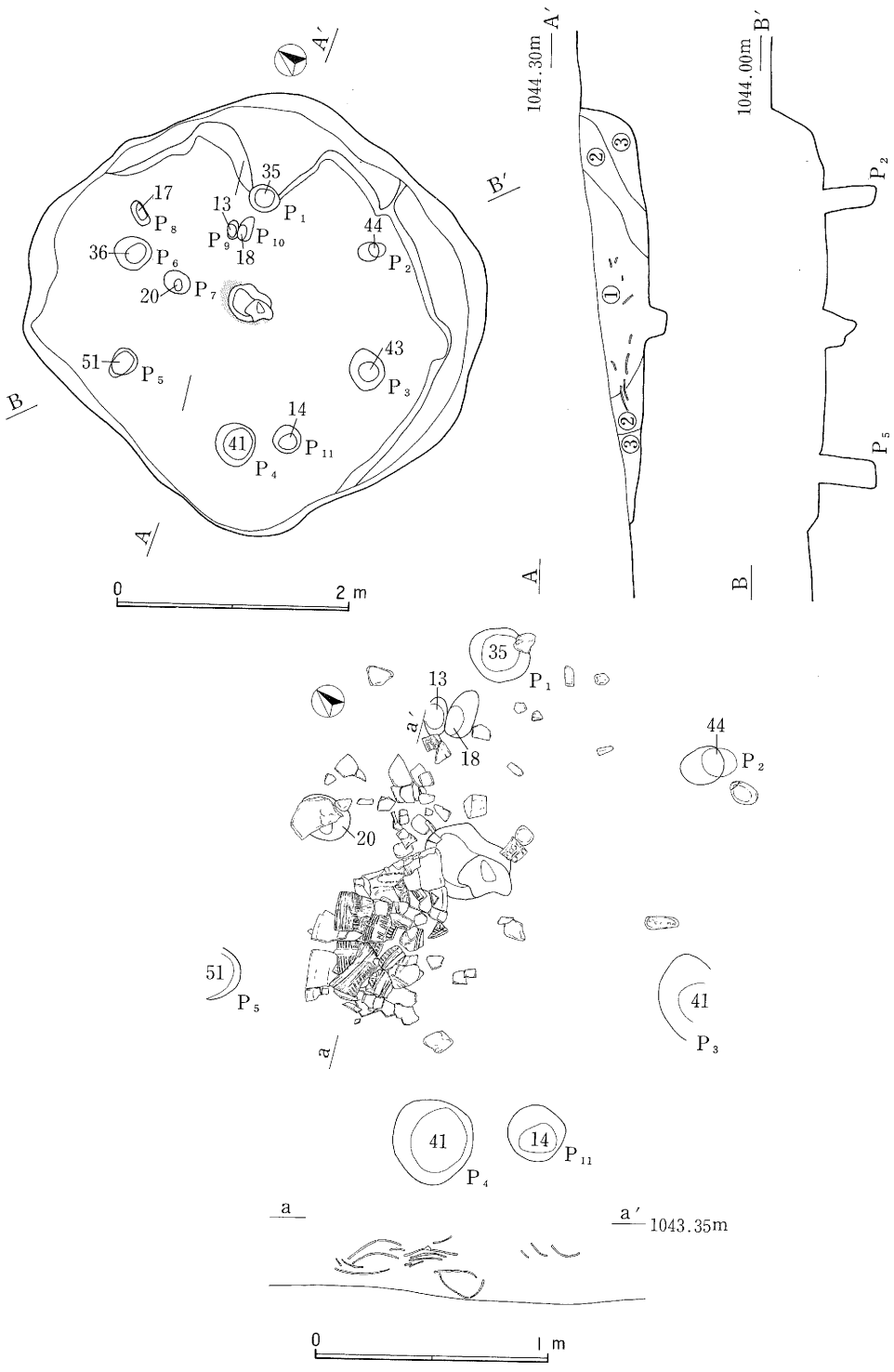
平面形は円形を呈し、主柱穴はP_1からP_6の６本である。P_2とP_5の対になった柱穴は住居址中央に向って傾斜している。壁面は内湾して立ち上がるが、西側の壁面は遺存状態が悪く、立ち上がりの状態は観察できなかった。床面は硬く締っていた。炉址は住居址中央の焼土から位置が確認できたが、浅い掘りこみの他、施設らしきものは検出されなかった。

炉址の上面に縄文時代中期前半の土器３個体が横倒しの状態で出土した（第８・９・10図、図版４）。床面直上から検出されているが、土層断面からみると、①層に属すると考えられる。①層は暗褐色土層、②層は暗黄褐色土層、③層は黄褐色土層である。出土土器から縄文時代中期狢沢式期に属す住居址であると考えられる。（功刀）

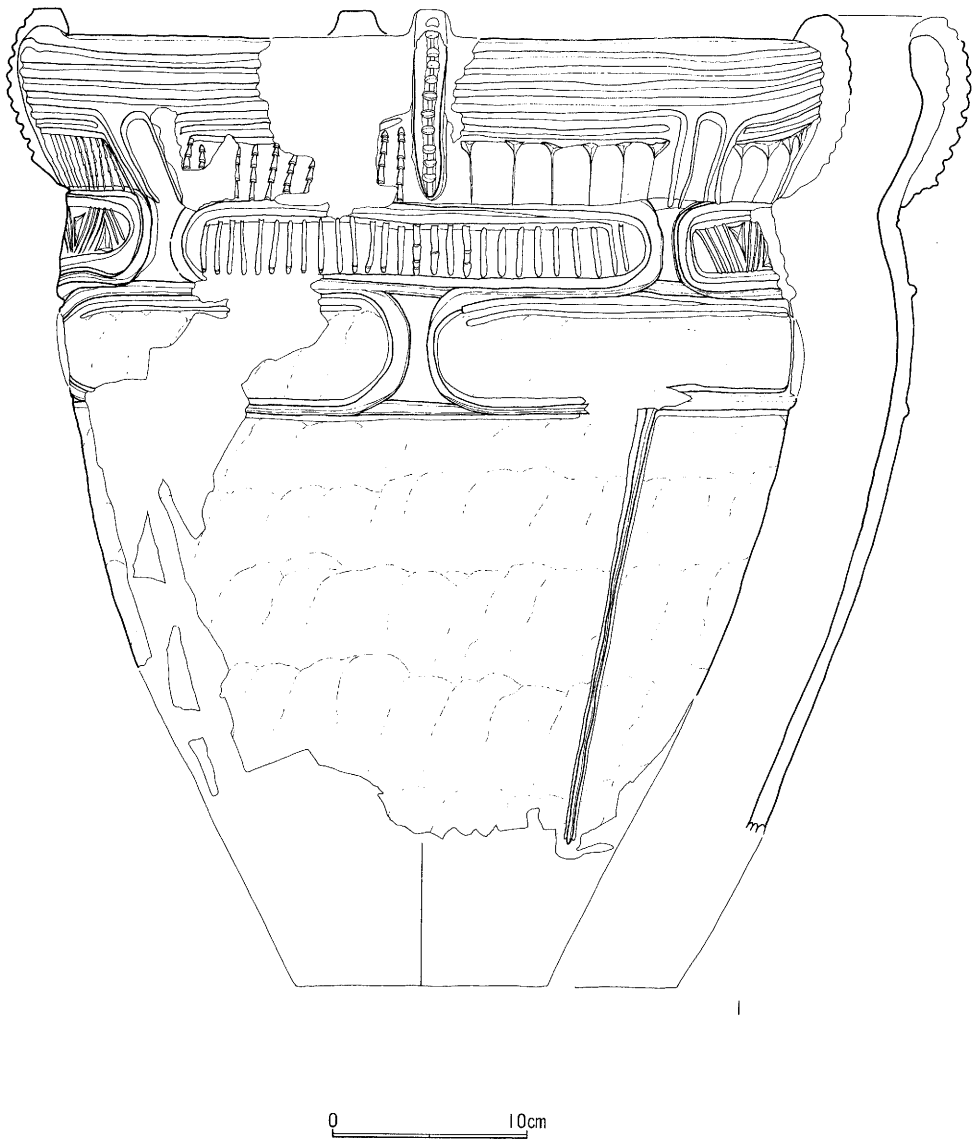
２．第２号住居址（第11・12図、図版４）

第２次調査区南西隅で住居址の西側１m程で台地の崖となる。平面形は長軸4.05×3.44mの不整円形で西側壁ははっきり検出できなかった。残存する壁際は著しい皿状になっている。床面は締っており軽石を多く含む。床面の小孔はP_1、P_2、P_6、P_8が柱穴に関わるものと思われる。P_3、P_4、P_7は補助的な柱穴か平均の深さ18cmの不整形となっている。P_5は径50cmのほぼ円形、深さ28cmで他の小孔より大きく柱穴とは思われない。炉は中央北寄りに厚さ８cmの焼土が認められ、その下に集石遺構が埋められていた。集石遺構は焼土層下の焼けた凹みの地山南側を切って礫との間に３～４cmの黒褐色土層が入っている。集石は遺構の壁面に底のほうに向って押しつけて作られたようになっており底面は壁面構築後に敷いている。内側にあった礫は壁面から落ち込んだものと思われる。壁面南側の礫下からは凹石が出土した。礫は安山岩系の河原石で割石は少ない。遺構内の南西側壁の焼土も目立つが、全体的に礫の焼けはほとんど認められなかった。集石中からは第11図１（図版４）と第12図１の土器片が出土している。特に第12図１の土器片は内側を上にして礫下の底面に食込んだ状態で、両方とも施文部にロームがびっしり付着していた。

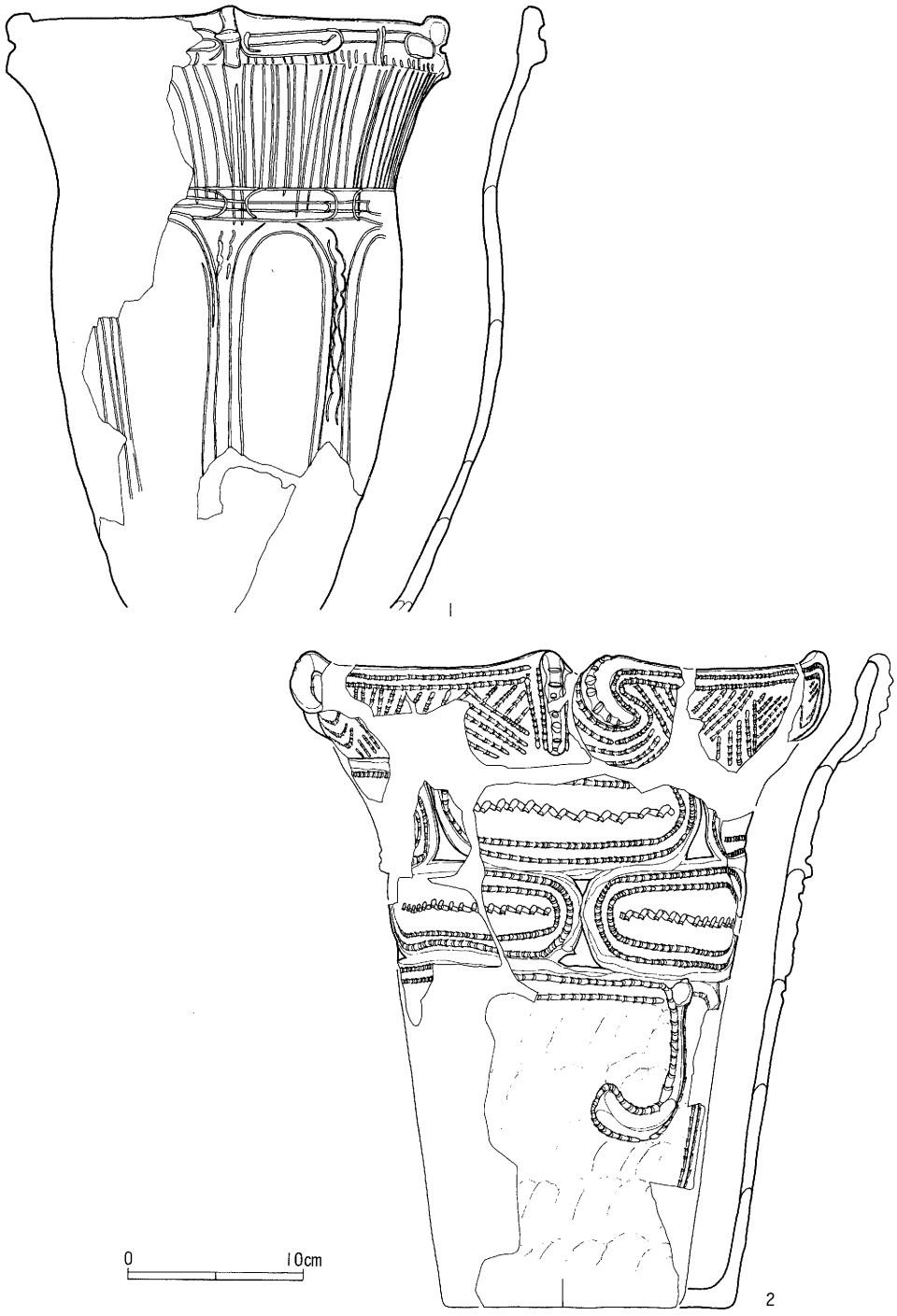
覆土内北側P_1上から南東にかけて礫を噛んだ軽石塊（95cm×55cm）があり、周囲には焼けた礫片が散らばっていた。①層は暗褐色土層、②層は暗黄褐色土層、③層は黄褐色土層、④層は暗褐色土で焼土ブロック、炭化物を多く含む土層、⑤層は攪乱による漸移層、⑥層は抜根の攪乱による黄褐色ハードローム、⑦層は地山、灰黄褐色ローム。締っているが、粒子が粗く、３cm以下の軽石状礫を多く含む。縄文中期後半の住居址。（百瀬）



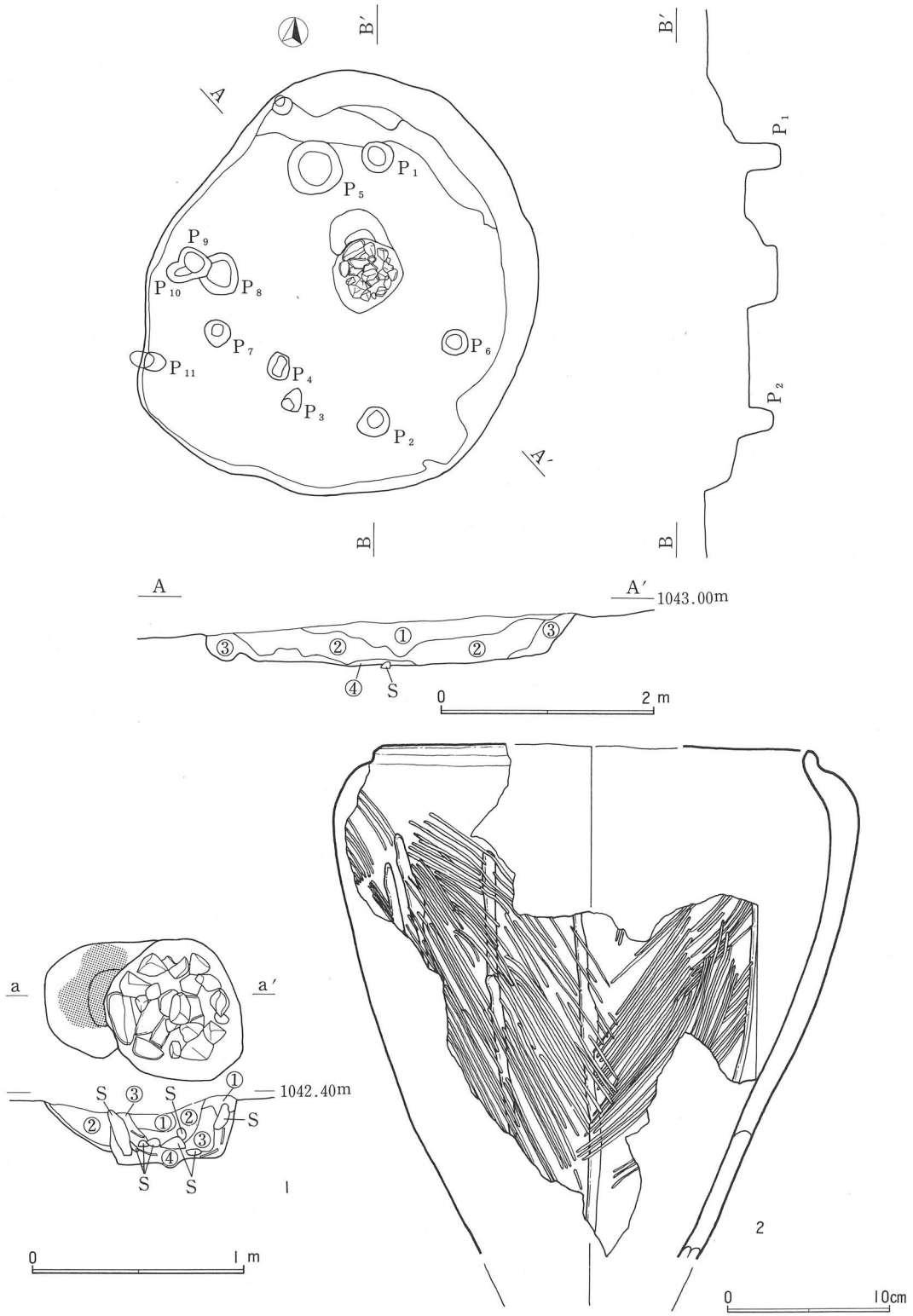
第８図　第１号住居址（S＝1/60、S＝1/30）



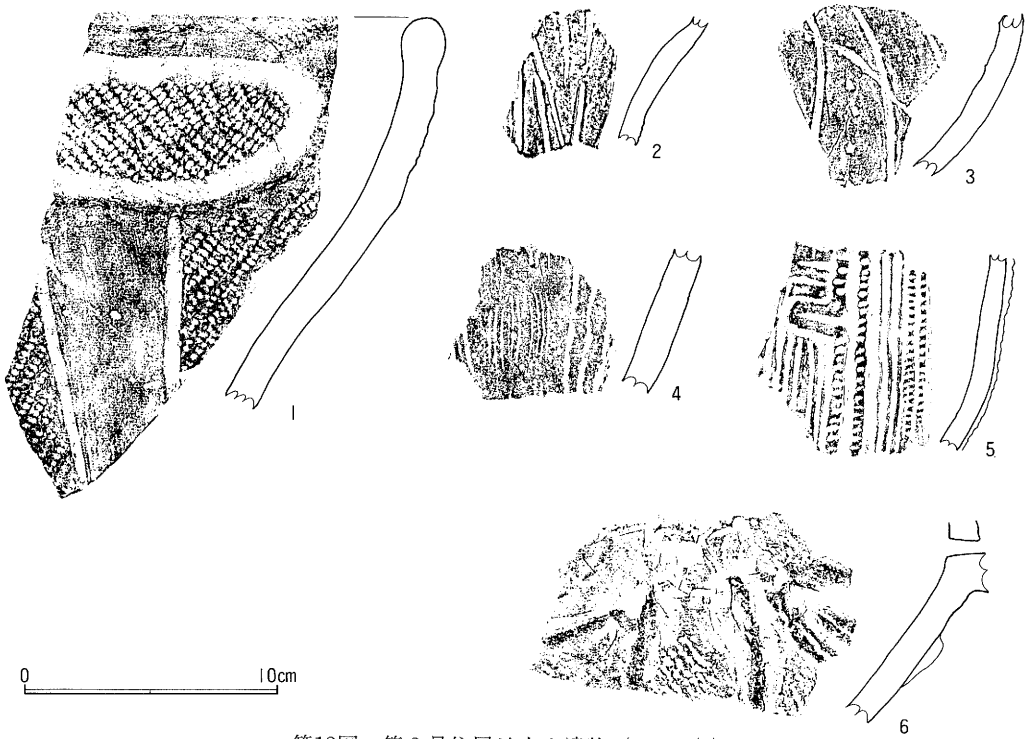
第９図　第１号住居址出土遺物(1)（Ｓ＝1/4）



第10図　第１号住居址出土遺物（S＝1/4）



第11図　第２号住居址（1/60）（１、S＝1/30）（２、S＝1/4）



第12図　第２号住居址出土遺物（Ｓ＝1/3）

３．第３・４・７・８号住居址（第13・14・15図、図版４、図版５）

４基の住居址が重複していた。平面形は、第３号住居址が隅丸５角形、第４号住居址が隅丸８角形を呈する。第７号住居址は周溝の形状から平面形を推定するとほぼ円形であると思われる。第８号住居址は楕円形を呈する。第３号住居址の主柱穴はP_2・P_3・P_5・P_6・P_{10}の５本、第８号住居址の主柱穴はP_{10}・P_{11}・P_{12}・P_{37}の４本である。

当初谷と誤認したため、住居址覆土を掘りすぎ、３号住居址と４・７号住居址の切り合い関係を覆土の断面観察によって確かめることは出来なかった。第４・７号住居址の床面が第８号住居址の上に構築されていたことから、８号住居址がもっとも古く、次いで第４・７号住居址が構築されたことが分った。

炉址は４基検出された(第14図)。第８号住居址の炉址は、炉址南半は石組であるが、北半には土器の口縁部が設置されていた。土器は狢沢式土器である（第15図４、図版５）。第４・７号住居址の炉址は、第８号住居址炉址の北西から２基並んで検出された。いずれも土層断面の観察から第８号住居址の覆土の上に設置されたものであることが確認できた。東側の炉址は若干の石組の痕跡と埋設土器（第15図３、図版５）が検出され、西側の炉址からは焼土が検出されたのみである。第４・７号住居址との位置関係から西側の炉址が第７号住居址、東側が第４号住居址の炉址であると考えられる。また炉址の位置がほぼ同一位置に設けられること、床面が同じ高さであること、平面形が類似することから、第４号住居址は第７号住居址を拡張した住居であるとも考え

られる。第４号住居址の炉址からは曽利Ⅰ式土器が出土した(第15図３、図版５)。第３号住居址の炉址は偏平な石を用いた石組炉で、内部から曽利Ⅰ式土器が出土している（第15図１、図版４)。炉址出土土器から、第８号住居址は狢沢式期に、第４号住居址と第３号住居址は曽利Ⅰ式期に属し、第７号住居址については、性格な年代は不明であるが、狢沢式期以後、曽利Ⅰ式期以前にたてられた住居であると考えられる。第８号住居址の上面、第４・７号住居址の床面にあたる高さから焼土が検出されたが、第４号、第７号住居址のいずれに属する遺構であるか判断出来なかった。

住居址内の施設としては、第８号住居址のP_{14}・P_{17}などの袋状土坑がある。いずれも住居址の入口と思われる位置に配置されていた。第３号住居址P_8は平面形状が方形で直立した立ち上がりを示す。P_8の周囲には、柱穴よりも小さいP_6、P_7、P_9や、周溝内のP_{13}からP_{14}などの小ピットがあり、住居の出入口に当るかと思われる。なお第３号住居址の炉址南側から土器１個体が出土した(第13図２、図版４)。床上３cmから11cmの範囲から出土しており住居址に伴う遺物であると思われる。また第３号住居址P_5に接する場所の床面上から磨製石斧が出土している（第14図１)。

第４号住居址の周溝内には、P_{22}とP_{24}、P_{25}とP_{26}、P_{27}からP_{29}、P_{30}とP_{31}などほぼ２本一組と考えられる小さなピットが検出された。第３号住居址の範囲内にもこのピットが存在したと考えられ、住居址の壁際に等間隔に配置されていたものと思われる。P_{12}からは大形粗製石匙が、P_{16}からは横刃型石器が出土した。（功刀）

４．第５号住居址（第16図、図版５）

平面形は円形を呈する。主柱穴はP_1からP_5の５本主柱穴である。P_2、P_5の土層観察では柱痕と考えられる①層が確認できた。住居址覆土は３層に分れ、①層が暗褐色土層、②層が暗黄褐色土層、③層が黄褐色土層である。

炉址は偏平な石による石組炉である。炉址の石には黒色の不明物質が帯状に付着していた。炉址からは曽利Ⅰ式土器が横倒しになって出土した（第16図１、図版５)。

P_6は平面形状が方形で、断面形状は直立した立ち上がりを示す点で柱穴と異なり、柱穴とは違った役割を果した施設であると考えている。断面観察ではピット中央に掘り込みを思わせる暗褐色土層が認められた。周溝は住居址西側で不明瞭となっていたが、ほぼ住居址を全周しており、幅の割に深さは15cmから26cmあり、比較的しっかりとしたものである。周溝内からは磨石１、打製石斧１が出土した。（功刀）

５．第６号住居址（第17図）

平面形は隅丸方形に近い円形を呈する。主柱穴の配置から考えると、住居址の拡張が行なわれたと考えられる。当初の主柱穴はP_1、P_3、P_5、P_6の４本主柱穴であり、住居址が東側に拡張さ

れた後の主柱穴配置はP_1、P_7、P_4、P_6の４本主柱穴である。平面形と柱穴配置には若干のずれがみられる。床は漸移層中に設けられており軟弱であった。漸移層を確認面としたため、壁は浅くなっている。①層は暗褐色土層、②層は暗黄褐色土層である。

住居址のほぼ中央に礫を伴った焼土が検出された。P_2は断面形が袋状を呈し、柱穴とは形態が異なる。

P_3より出土した土器（第17図、図版５）から曽利Ⅰ・Ⅱ式に属す住居址である。　（功刀）

６．第９号住居址（第18・19・20・21図、図版１・６）

平面形は隅丸８角形を呈し、鴨田遺跡の集落の中では大型の住居址である。主柱穴は放射状に切り合っており、拡張された住居址であると考えられる。住居址の東側にあるP_{23}の周辺は抜根の際破壊された。拡張の回数は主柱穴の配置を整理していないため、確実なことは分らないが、住居址中央の小ピットであるP_{41}、P_{42}がほぼ同じ場所に並ぶこと、周溝が２組あること、炉址が２基検出されたことから、最低１回は拡張されたものと思われる（第18図）。

住居址の覆土からは多量の焼土が検出された。焼土は住居址壁際に集中していた。セクション図Ｃ－Ｃ′にみるように、焼土層（②）は、床面（⑤）との間に黄褐色土層（③）と暗褐色土層（④）をはさんでおり、第９号住居址が廃棄されてからある程度時間をおいた時期に堆積したものと思われる。焼土層（Ｃ－Ｃ′の②）は暗黄褐色土層と焼土が混在した層であり、覆土③上面で火が焚かれていた痕跡は確認できなかった。住居址中央部の焼土（セクション図Ａ－Ａ′⑨）は、暗褐色土層（セクション図Ａ－Ａ′　Ｂ－Ｂ′①、Ｃ－Ｃ′①）内から検出された。

床面は大部分が硬く締っているが、一部軟弱で掘り方の上に貼られたものである（Ａ－Ａ′③）。掘り方は、凹凸が激しい。

炉址は偏平な石を用いた石組炉で、黒色の不明物質が帯状に付着していた（第19図）。石組炉のほぼ中央に土器が埋設されていた（第20図１、図版６）。石組炉址の北東の床面下から焼土を伴った浅い掘りこみが検出された（第18図）。掘り方に火を受けた痕跡がある。床面下から検出されたことから、拡張前に使用されていた炉の痕跡であると思われる。

遺物は、P_{23}の周囲の攪乱から大形の深鉢である曽利Ⅰ式土器（第21図、図版６）と浅鉢（第20図２、図版６）が出土している他、鴨田遺跡の他の住居址に比べ、石器が多く出土した（図版10、表１）。P_3上面からは軽石製品１、P_7からは打製石斧１が、P_8からは横刃型石器１、P_{15}からは黒曜石製石核１、ピエス・エスキーユ２が出土した。　（功刀）

７．第10号住居址（第22・23図、図版１・６）

平面形は円形を呈する。第９号住居址についで大きな住居址である。住居址覆土は、８層に分けられる（第22図）。①層は攪乱層である黒褐色土層、②層は黒色土層、③層が暗褐色土層、④層は③層よりも黒味がかった暗褐色土層、⑤層は暗黄褐色土層、⑥層は15cm以下のロームブロック

を多く含む暗褐色土層、⑦層の黄褐色土層は2㎜以下の焼土粒子を稀に含む。⑧層の黄褐色土層は、床面で固くしまっているが、5㎜以下の炭化物を多量に含んでいる。

主柱穴は2組認められた。P_2、P_6、P_8、P_{19}、P_{10}、P_{12}、P_{24}の7本主柱穴と、P_3、P_4、P_7、P_9、P_{11}、P_{13}、P_{14}の7本主柱穴である。主柱穴が2組あることから拡張された住居址であると考えられる。

炉址および周溝はそれぞれ1基づつしか認められなかった。炉址西側は、抜根により破壊してしまった。炉址は住居址中央やや北寄りに位置し、偏平な石による石組炉である。炉址の掘り形の中央には浅い掘り込みが認められたが、埋設土器は検出されなかった。周溝は住居址の北西部分を除いた範囲から検出されたが、深さは約20cmから9cmである。周溝内には、P_{22}以外にピットは認められなかった。住居址内では炉址の反対側にあたる南側からは、平面形状が方形に近いピットが検出された。坑底には段差がみられるが、ピット覆土の断面観察を行なわなかったため、複数のピットの重複であるか否かは不明である。

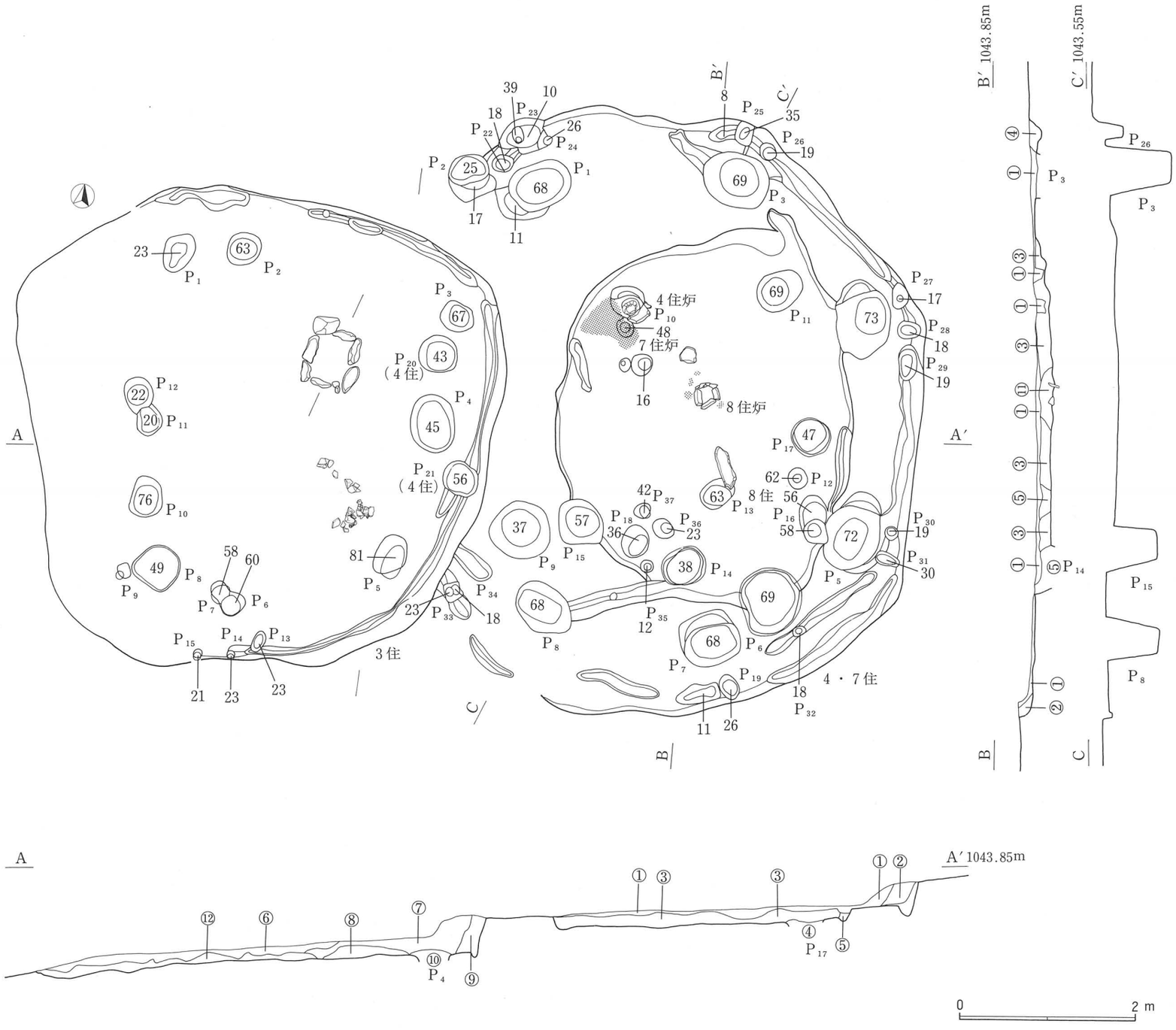
出土遺物には、炉址南西から出土した土器2個体(第23図1・2、図版6)、P_8上面から出土した土器がある(第23図3)。この他、住居址確認面から小型土器が(第23図5)、床面上約20cmの覆土内から小型の磨製石斧、石製品、土製品(第23図4)が出土した(図版6)。　(功刀)

8．第11号住居址(第24・25・26図、図版1・7)

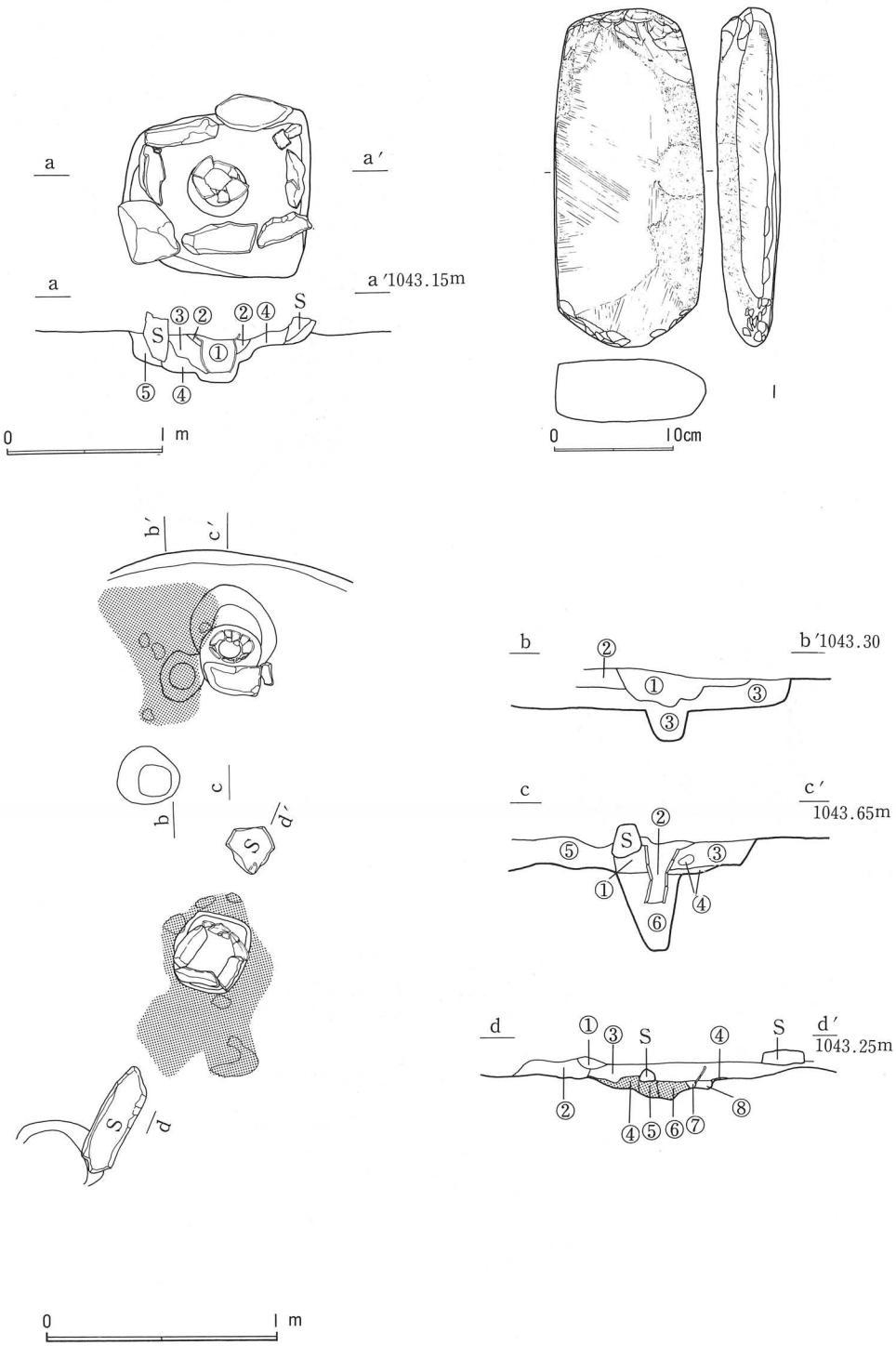
第II次調査区中央北西よりの南西向き緩斜面に、ほぼ同時期の12、13号住居址が南西と南東方向に隣接する敷石住居址で北西方向の大部分が抜根時に攪乱を受けている。未攪乱の敷石は5.40m×3.48mで攪乱時の浮き上がった礫の一部が敷石上に移動していた。壁はセクション内北側の立ち上がりで一部が確認できただけで、柱穴は7本が一周しP_3、P_4、P_5、P_6、P_7は平均の深さ98cmに掘り込まれている。攪乱部の下からはP_1、P_8が現れ、2本ともほぼ同じレベルで段がつき、他の柱穴間に比べ間隔が狭い。柄鏡形住居址の柄の部分がこの方向になろう。覆土内の土層は4層に分層された。①層が黒色土、②層が暗褐色土、③層が攪乱による黄褐色土、④層が暗黄褐色土である。

炉は中央北西よりに埋甕(第26図2、図版7)があり、中に暗褐色土が詰っていた。焼土は少なかったが埋甕の直上に径の異なる土器の頸部(第26図1、図版7)が重なっており一部の土器は上端を内側に折り込まれたような状態で出土、この土器の表側は明橙赤色に変色している。

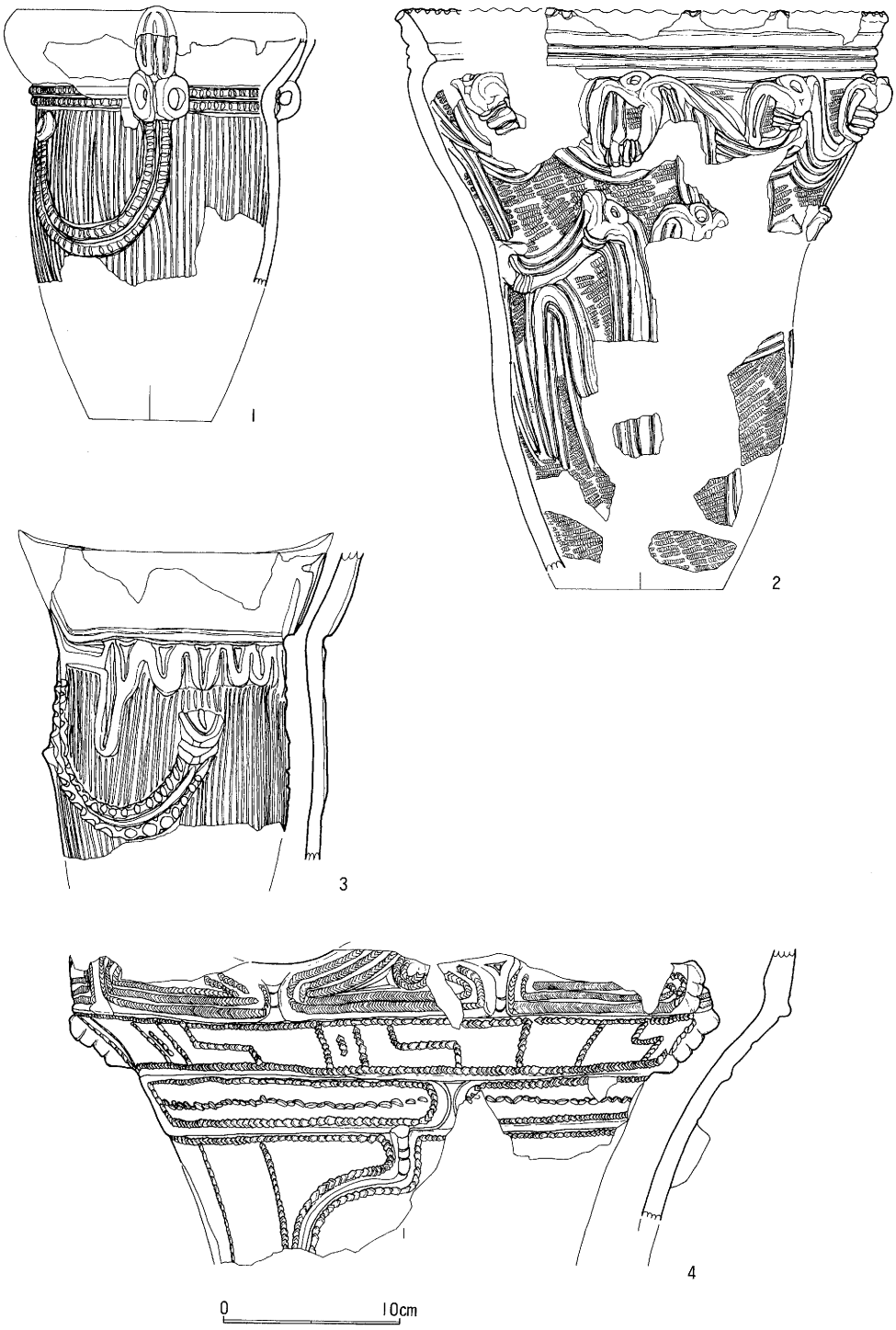
遺物は埋甕のほかP_4、P_5のほぼ中間敷石上から第26図3、4が出土している。施文手法は同じだが胎土が全く異なり3図は粗く4図は精緻になっている。石器類はP_5の敷石上から凹石、P_4北西の敷石上から折れた乳棒状磨製石斧の刃部側が、P_2、P_3の北西の敷石上から石棒が出土している。縄文時代後期堀之内I式期の住居址。　(百瀬)



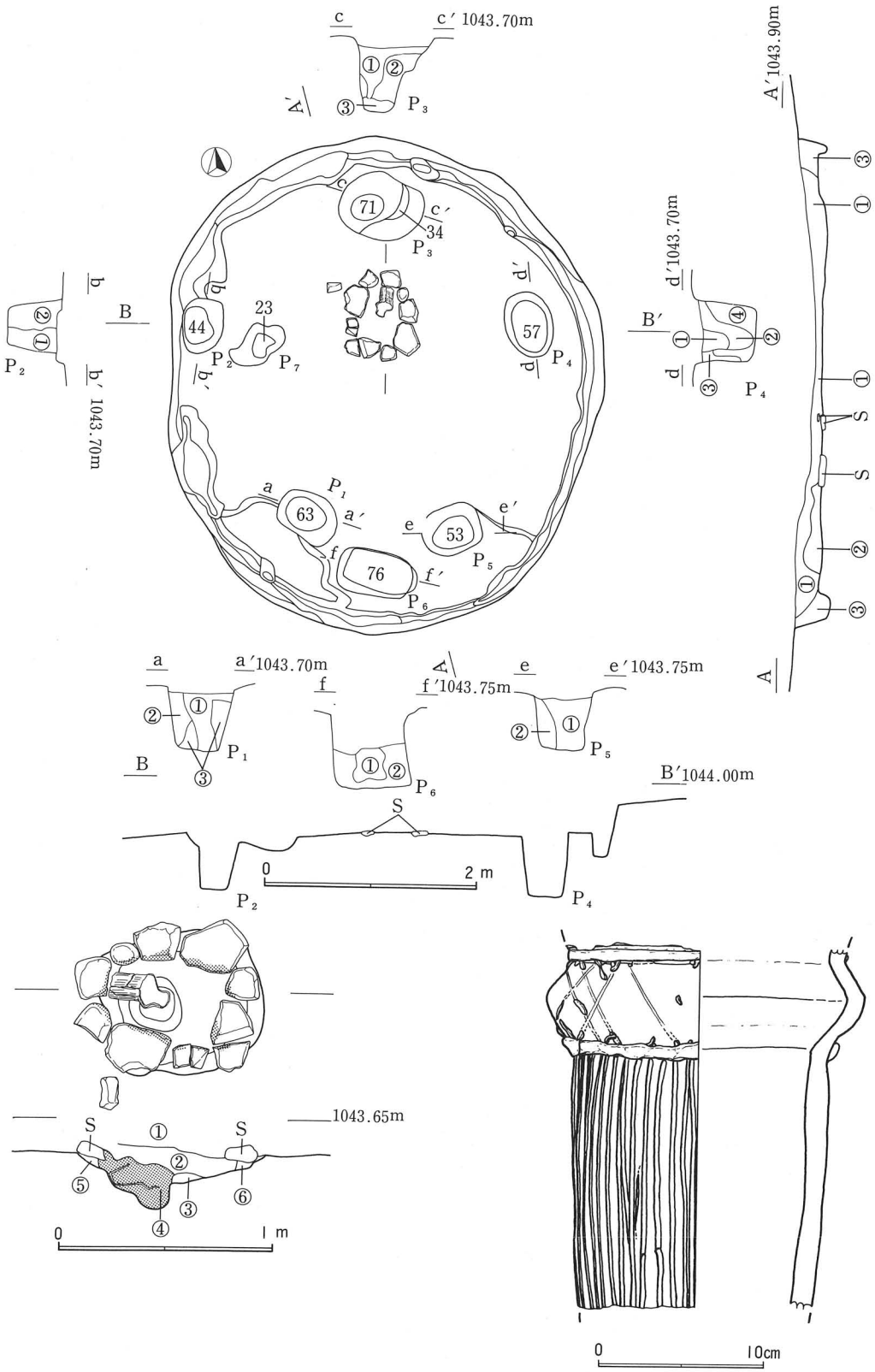
第13図　第３・４・７・８号住居址（Ｓ＝1/60）



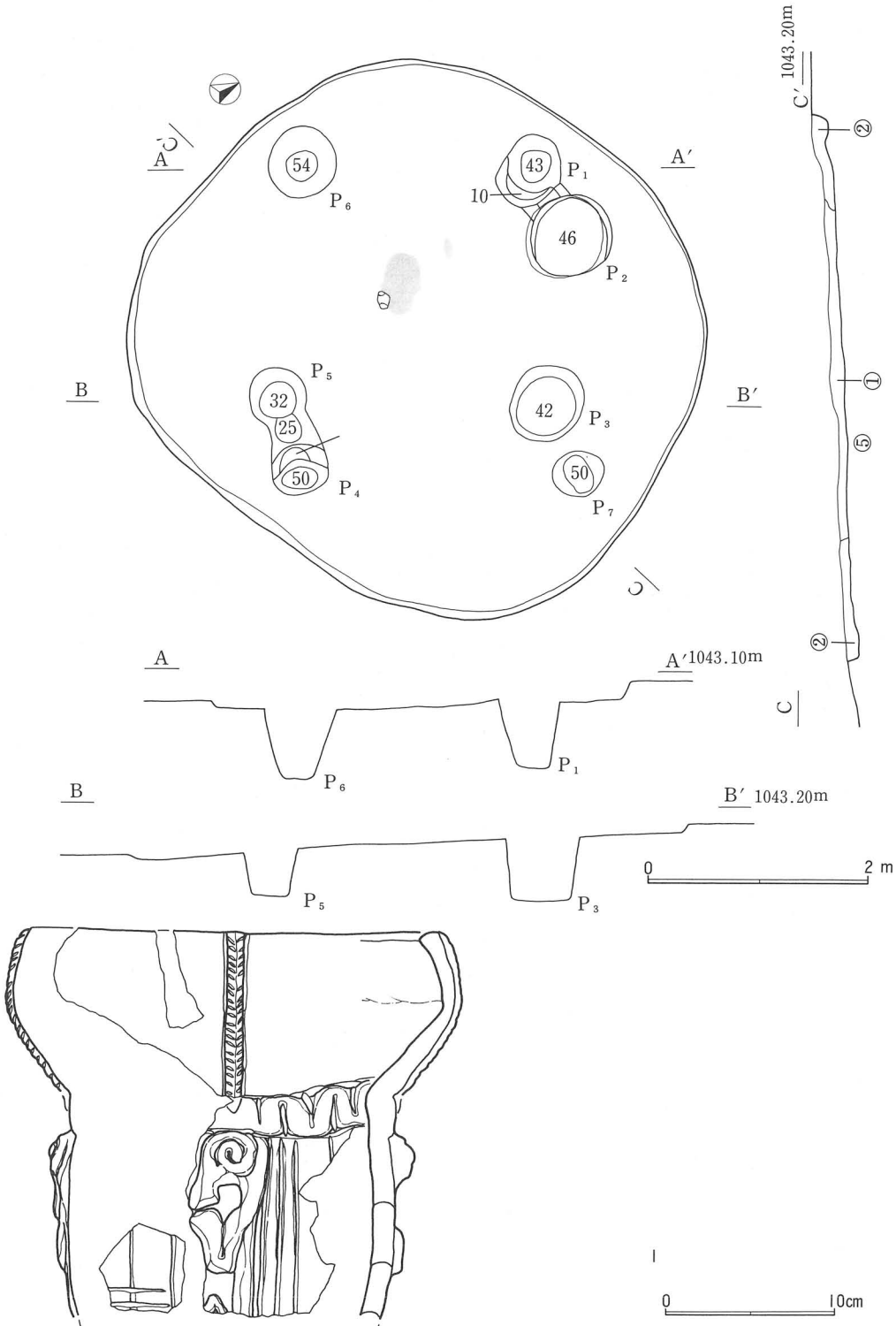
第14図　第３・４・７・８号住居址炉址（S＝1/30）（１、S＝1/3）



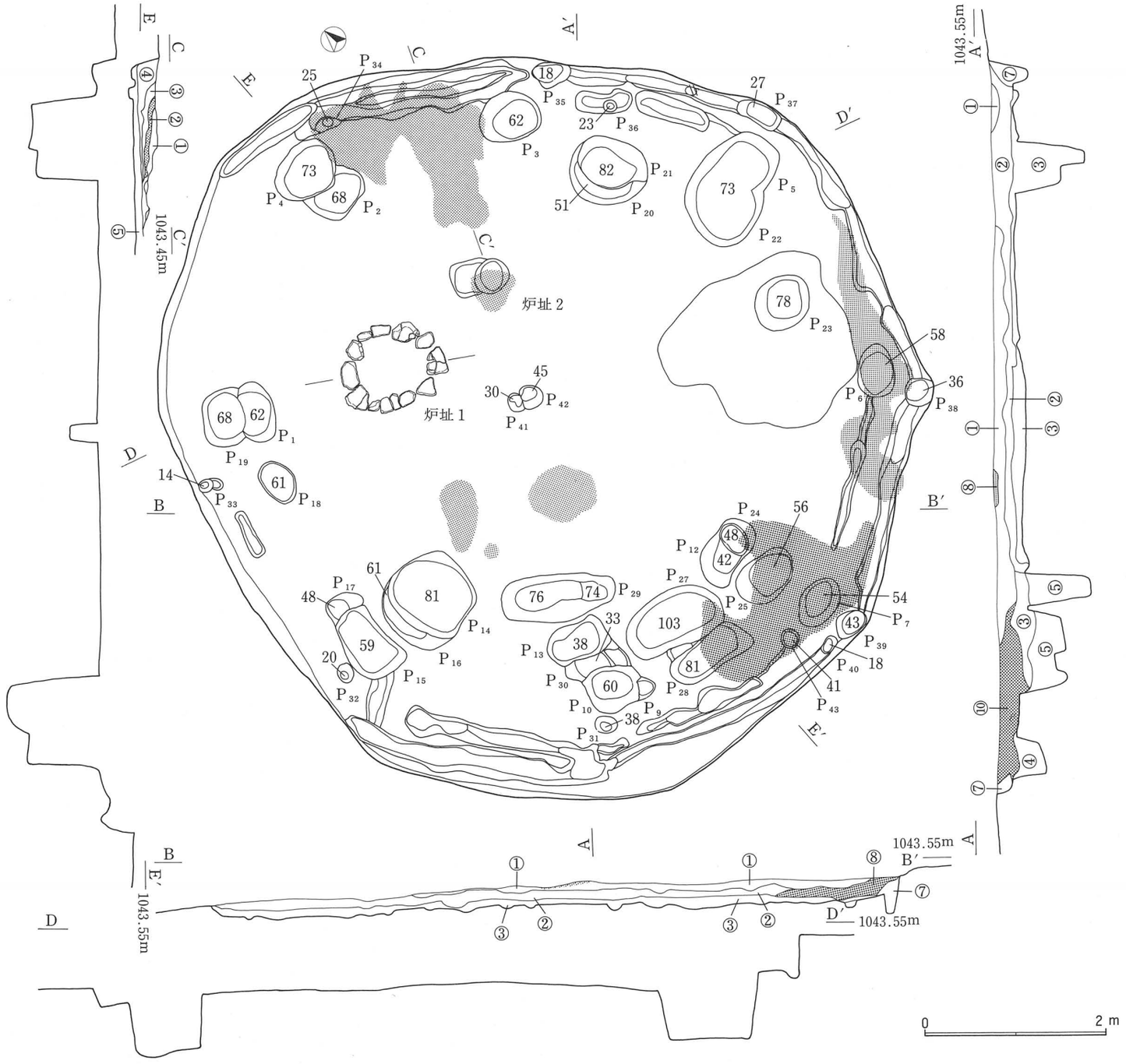
第15図　第３・４・７・８号住居址出土遺物（Ｓ＝1/4）



第16図　第５号住居址（S＝1/60）（１、S＝1/30）（２、S＝1/4）



第17図　第６号住居址（S＝1/60）（１、S＝1/4）



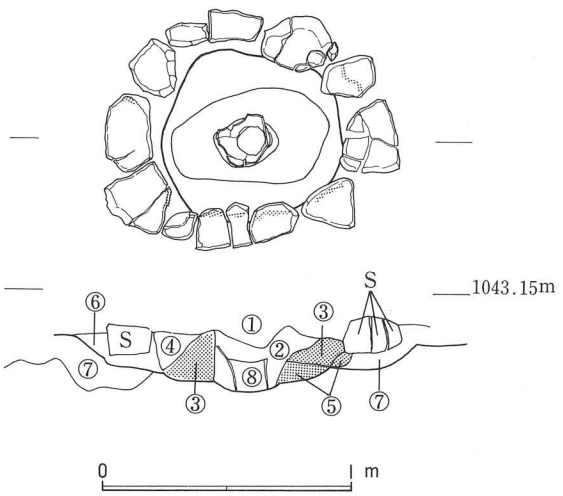
第18図　第９号住居址（Ｓ＝1/60）

9．第12号住居址（第27・28・29図、図版７）

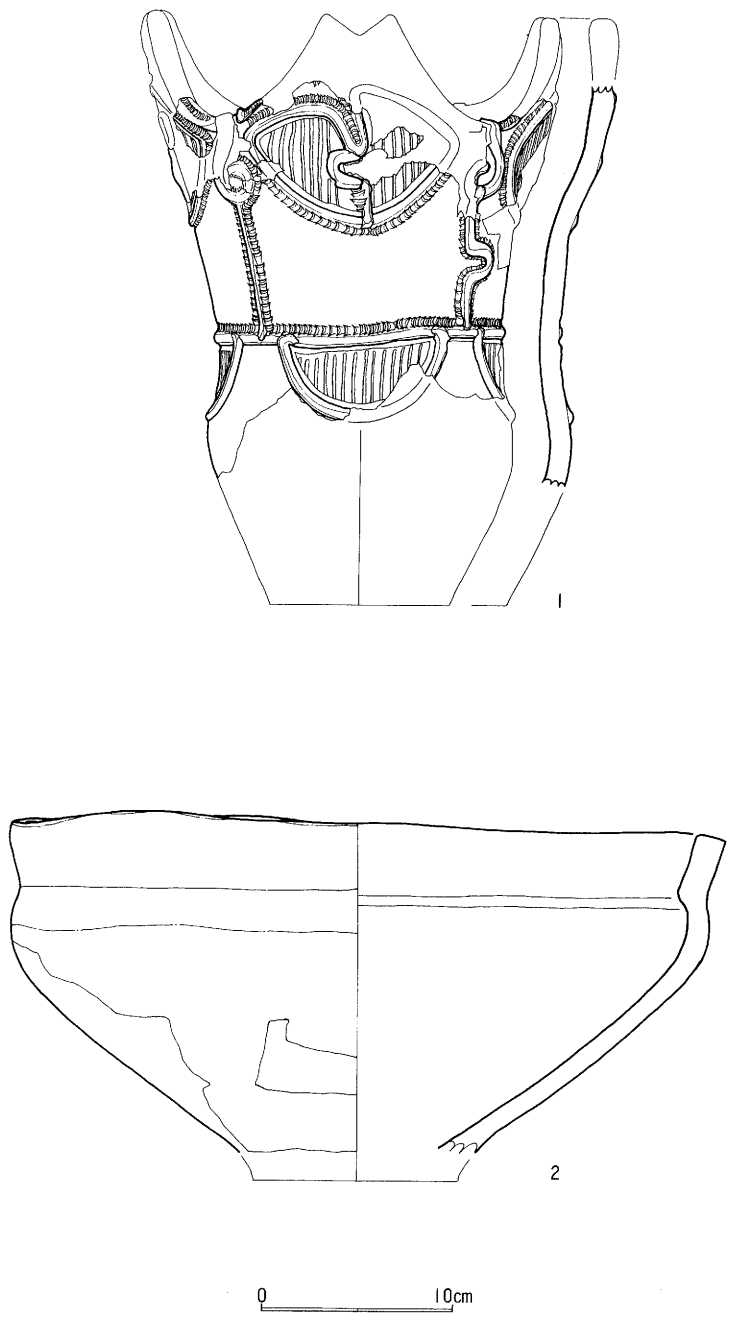
第11号住居址同様、床面は漸移層中に設けられていたと推定される。柱穴と考えられるのは、P_1からP_7で、７本の主柱穴を持つ点、P_1とP_2がきわめて接近している点が第11号住居址と似ている。柱穴の規模は平面径、底面径が、第11号住居址に比べはるかに大きい。P_5の①層内からは焼土が検出された。柱穴内の土層は、ロームブロックの多寡により大きく二分された。ロームブロックが少ない層はP_1、P_3、P_4、P_5の①層である。いずれも上面から下方に向って垂直に伸びる形状から、柱痕と推定される土層である。柱穴内の他の土層はロームブロックを多く含む。またP_3の②層、③層は水平方向の互層を成し、①層と②層、③層の成因の違いを示すものと考えらえる。P_3、P_5、P_6の確認面からは礫が多く出土している。柱穴下部からも礫が出土しているが、量は少ない。P_4、P_5からは遺物が多量に出土した（第27図、第29図、第１表、図版７）。出土した土器は堀之内式土器である。

住居址中央からは炉址が検出され、堀之内式土器が埋設されていた（第28図１・２、図版７）。炉址の北、P_1とP_2に接する位置に集石土坑がある。集石土坑からは磨製石斧、凹石、堀之内式土器が出土している（第28図３～７）。

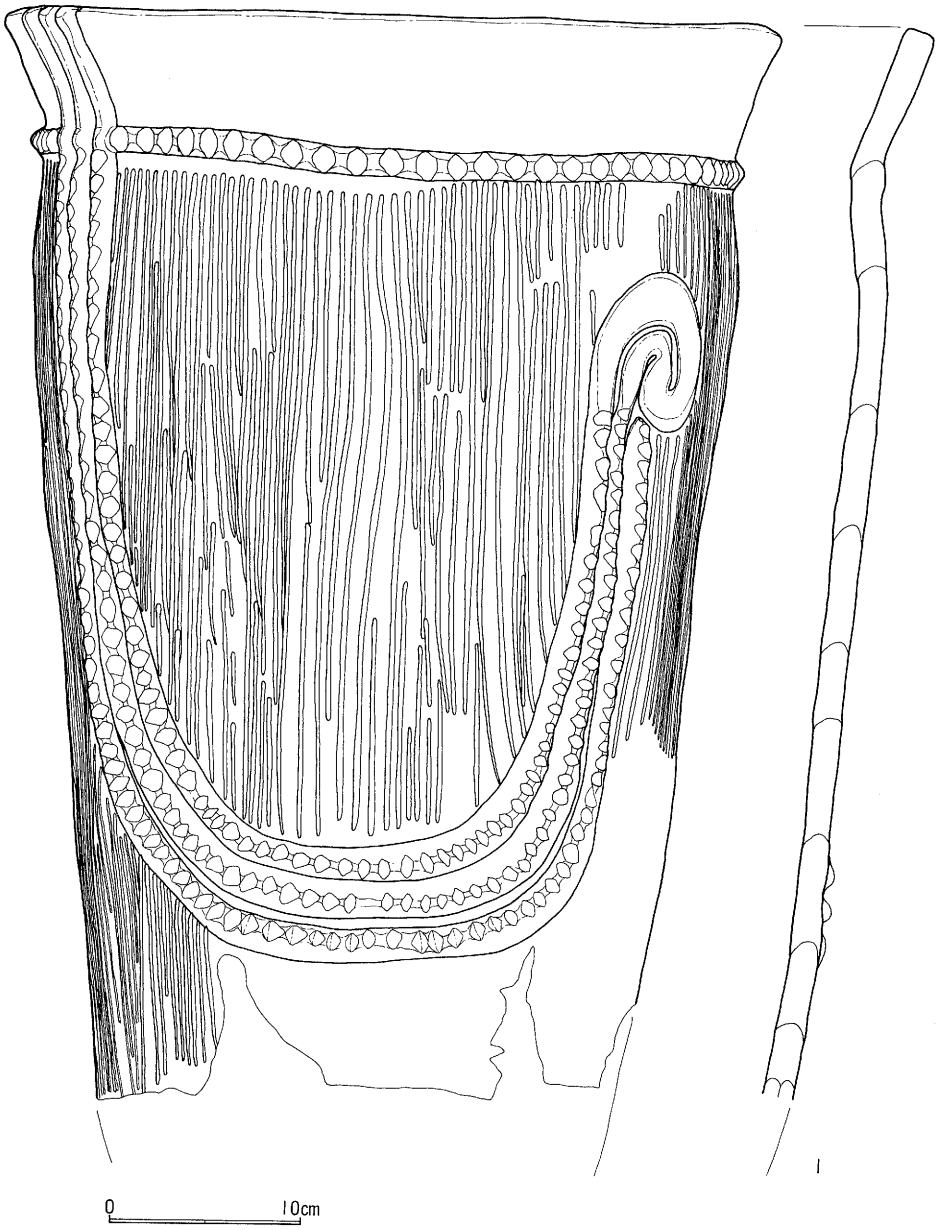
床面が確認されなかったため、炉址と集石土坑が柱穴群と同一の遺構であるか確認されなかったが、柱穴群との位置関係から同一の遺構であると考えてよいと思われる。（功刀）



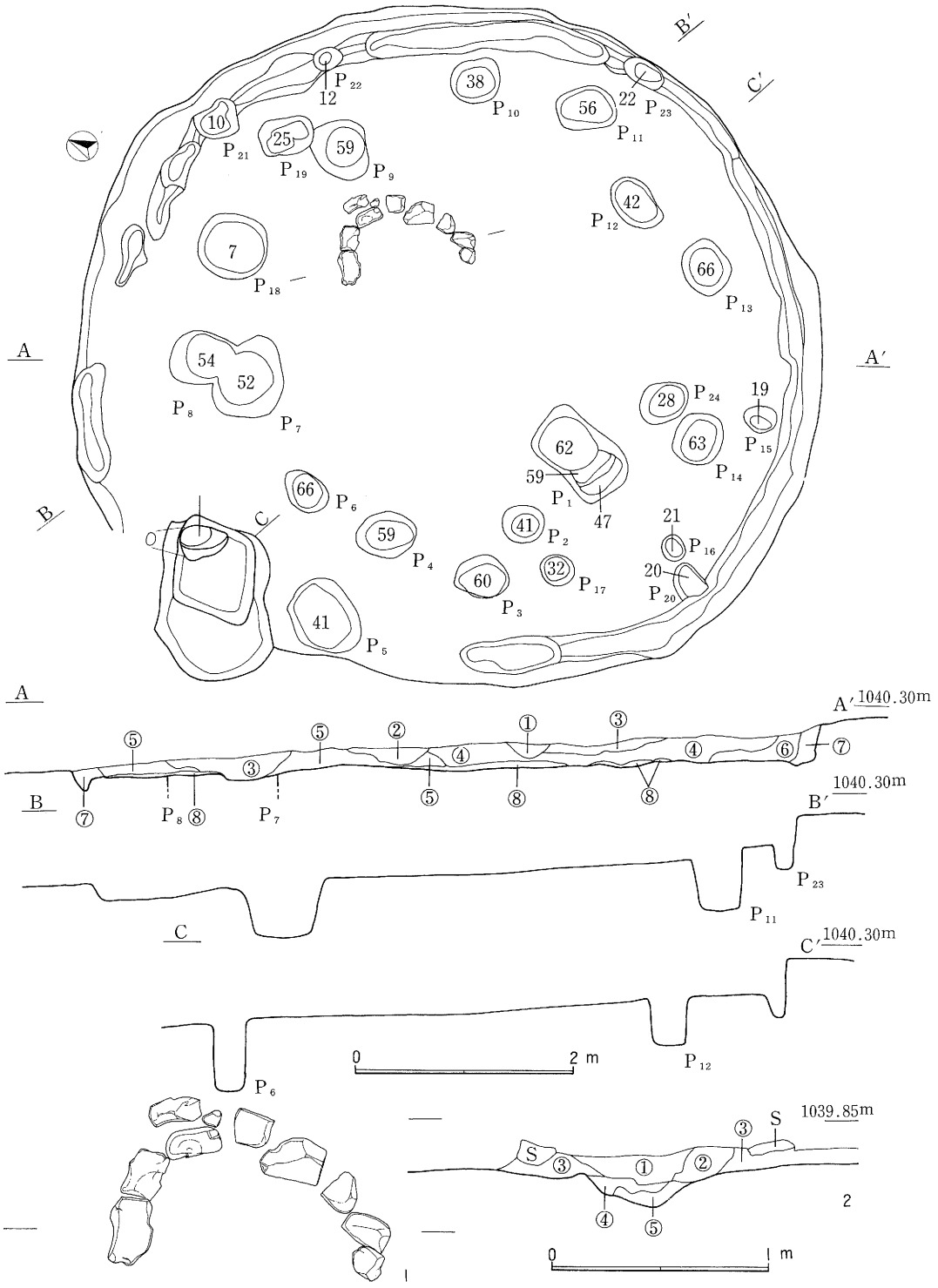
第19図　第９号住居址炉址（S＝1/30）



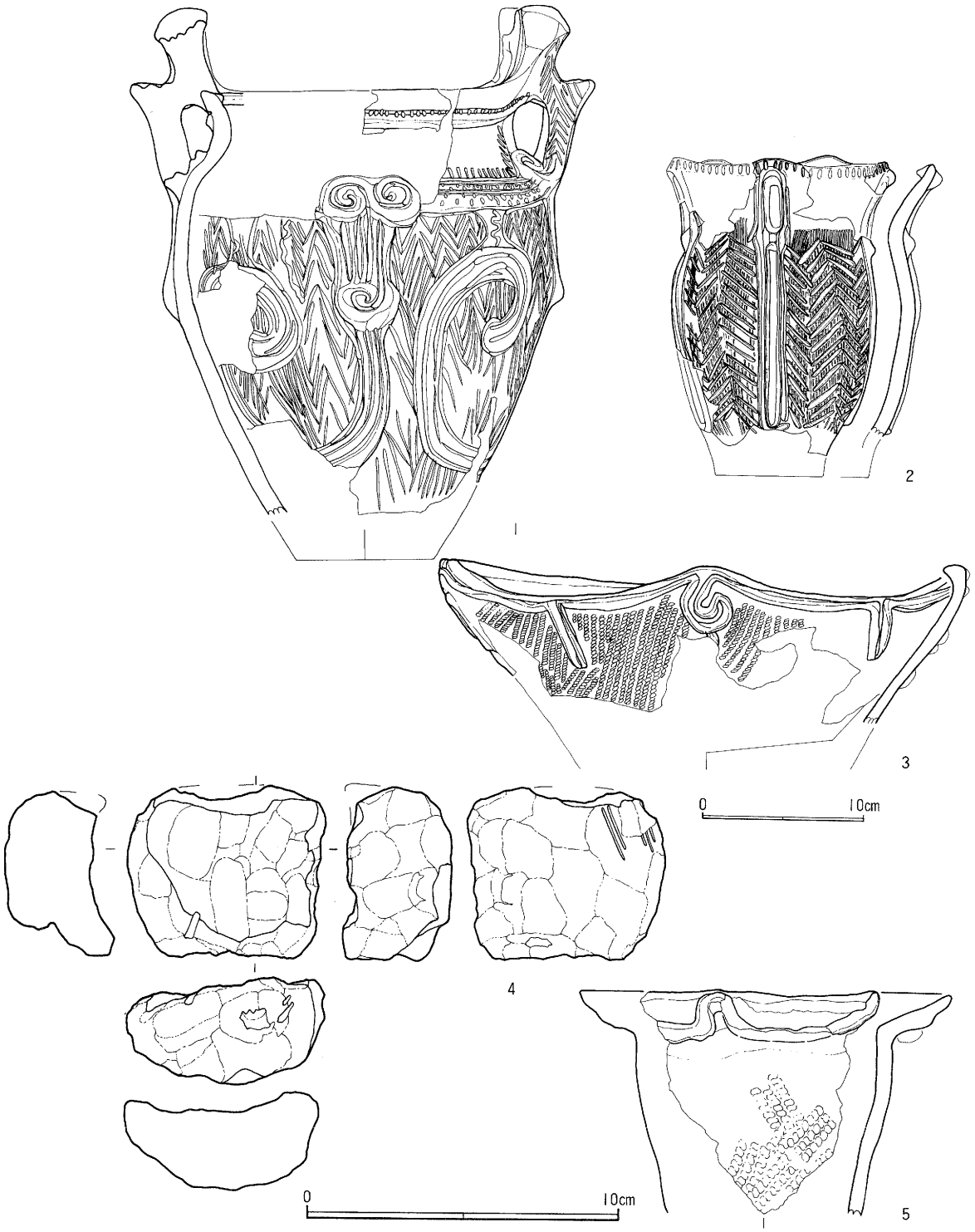
第20図　第９号住居址出土遺物(1)（Ｓ＝1/4）



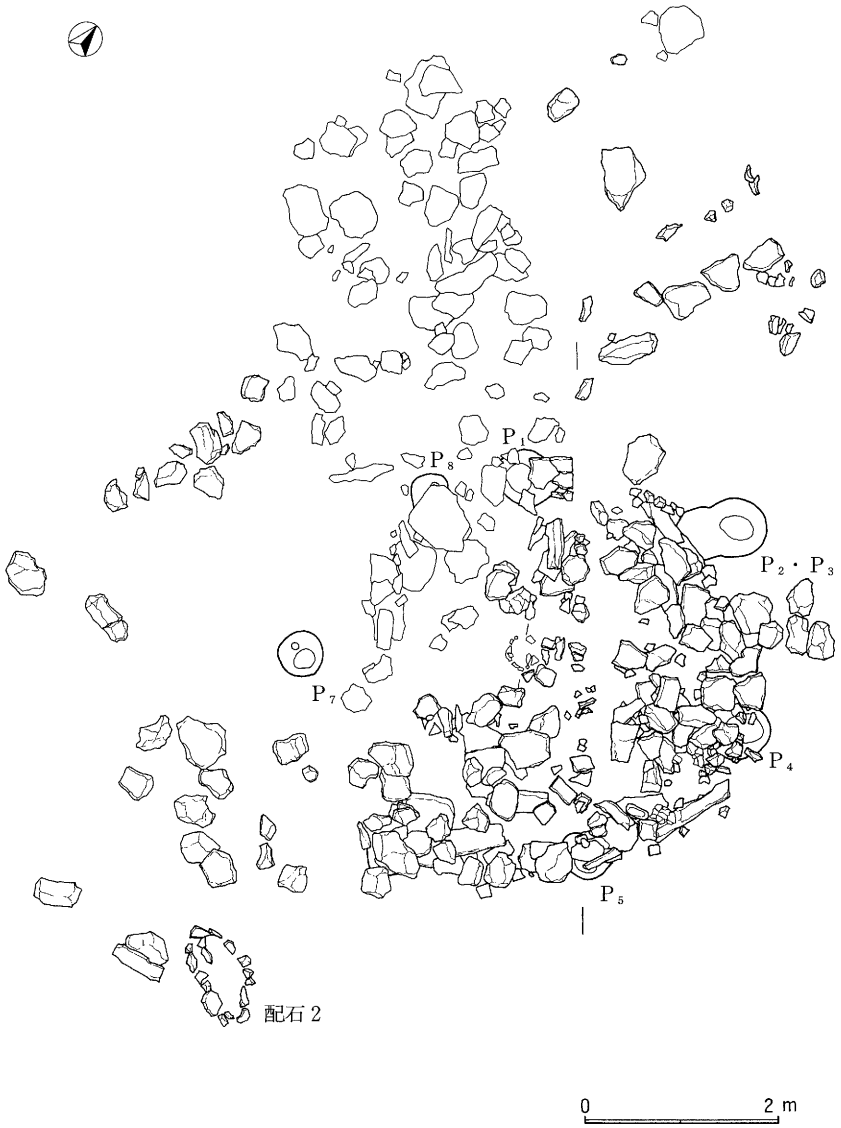
第21図　第９号住居址出土遺物(2)（S＝1/4）



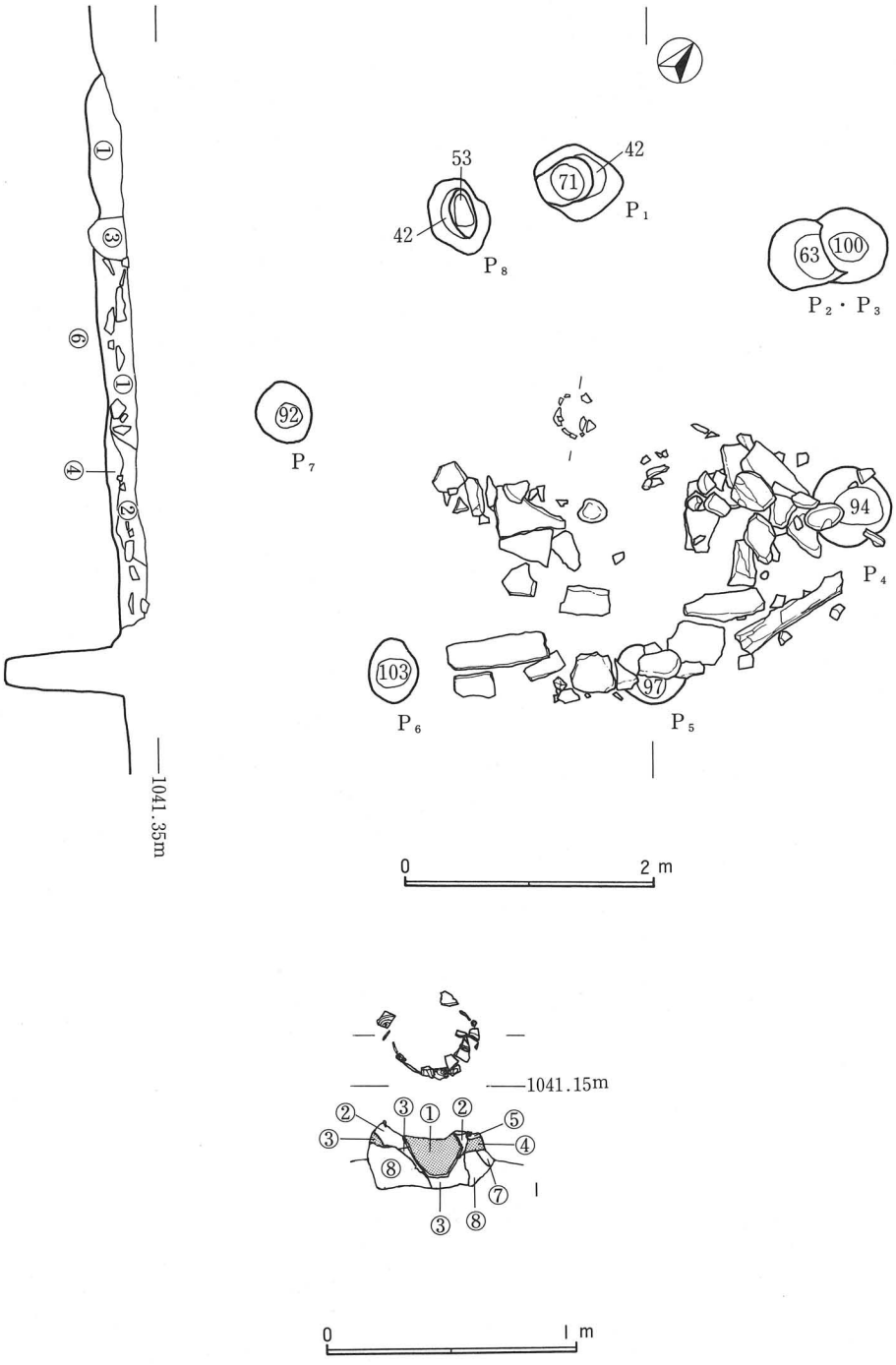
第22図　第10号住居址（S＝1/60）（1・2、S＝1/30）



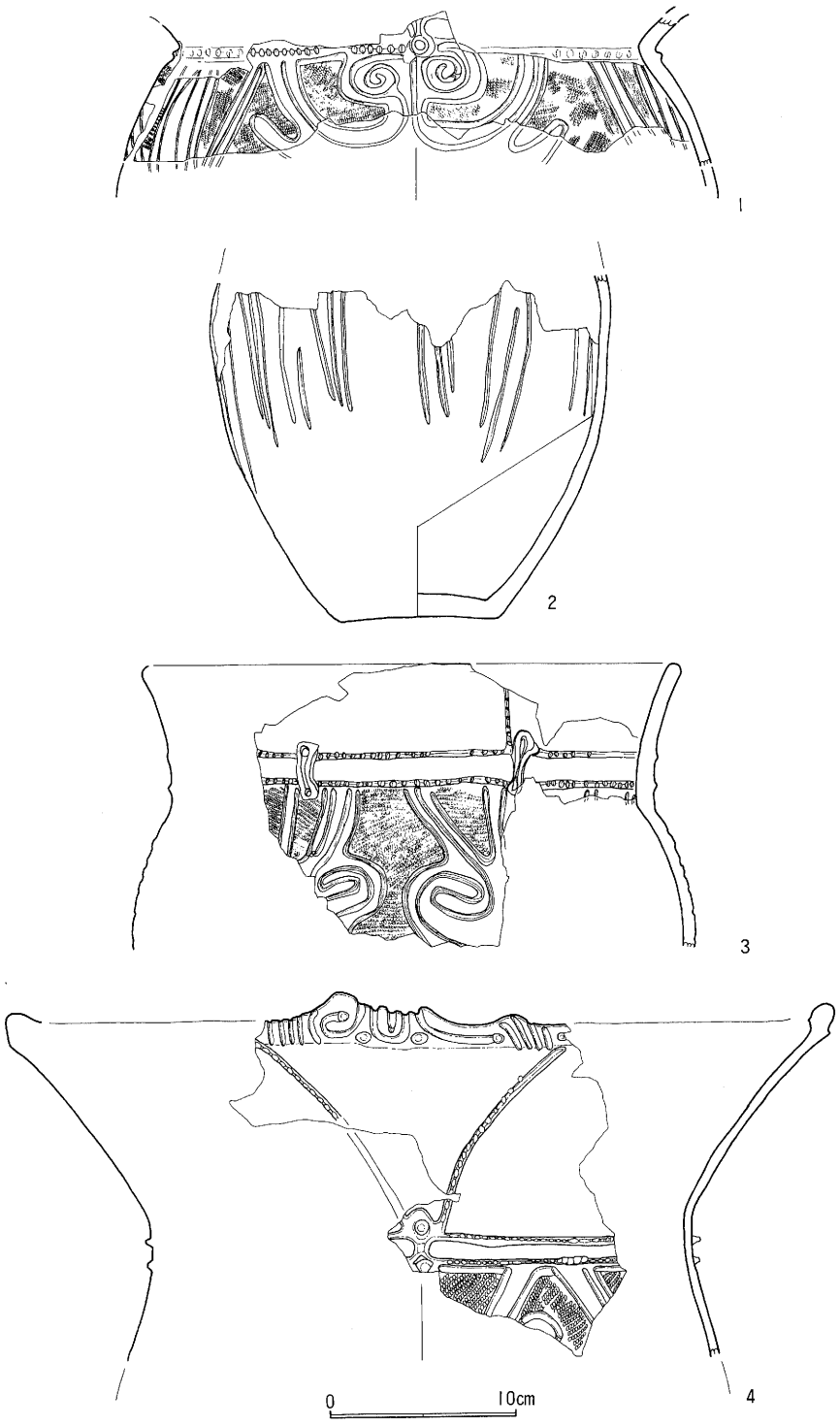
第23図　第10号住居址出土遺物（1～3、S＝1/4　4・5、S＝1/2）



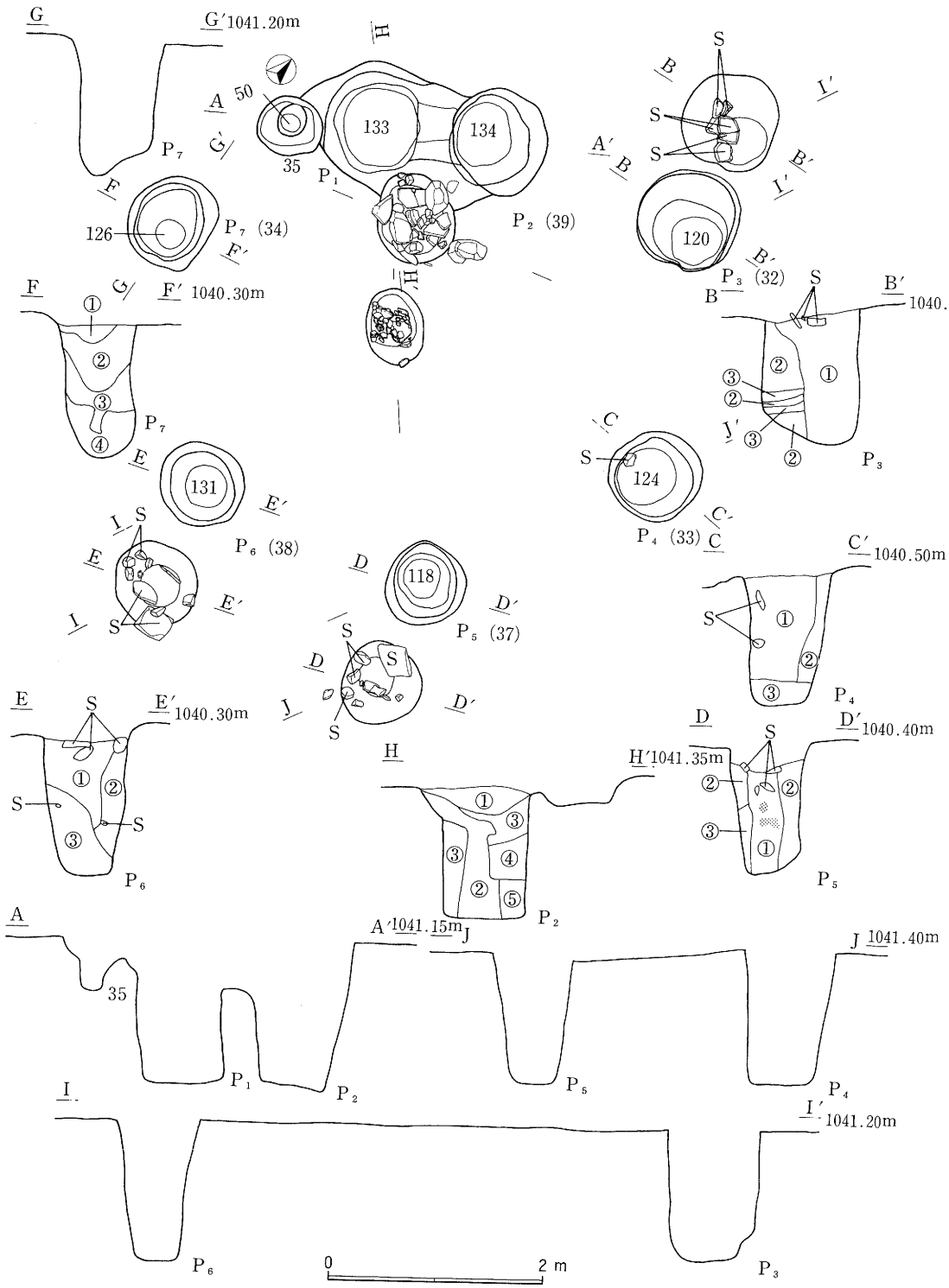
第24図　第11号住居址確認面礫出土状況（S＝1/80）



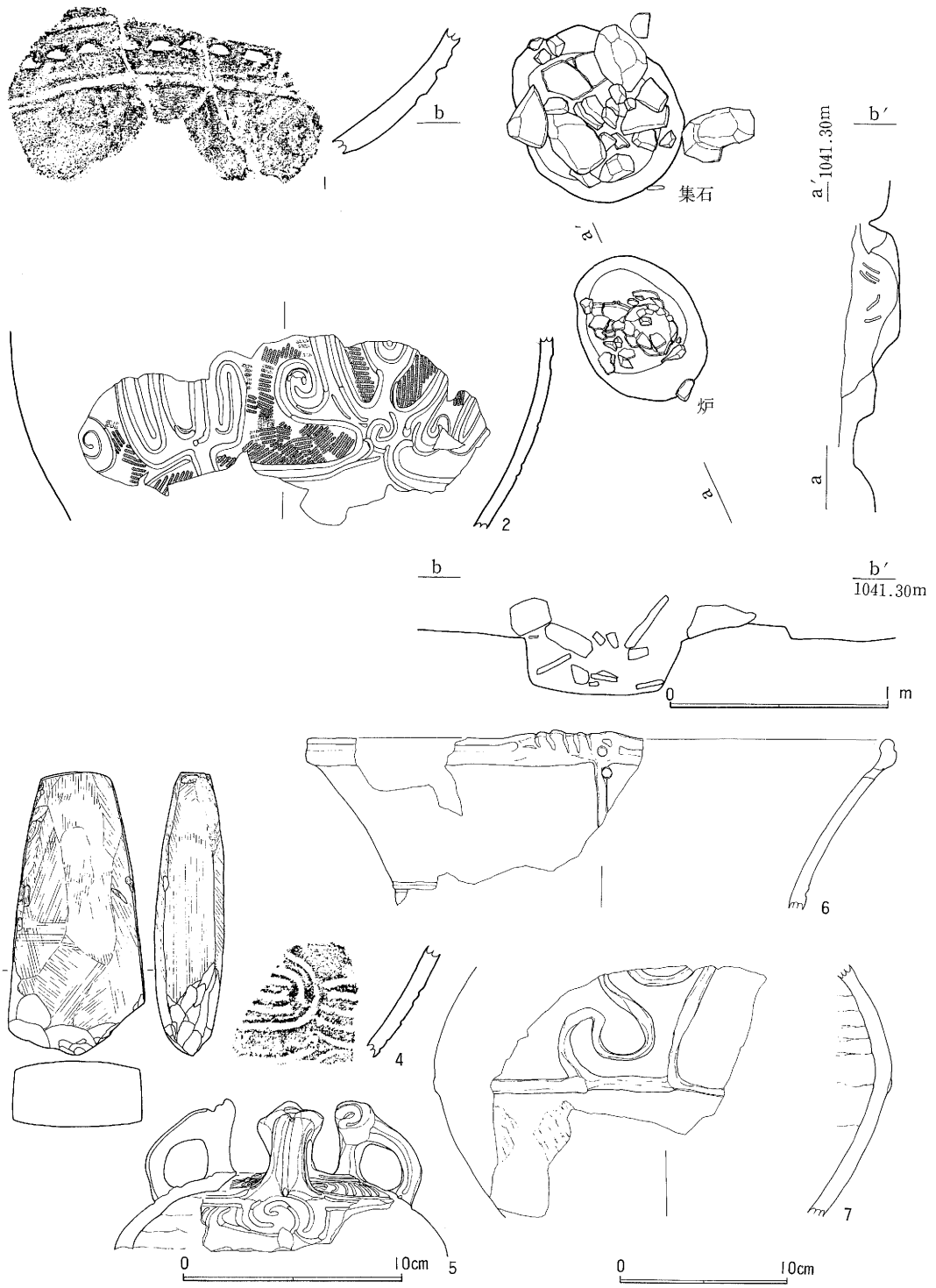
第25図　第11号住居址（S＝1/60）（1、S＝1/30）



第26図　第11号住居址出土遺物（S＝1/4）

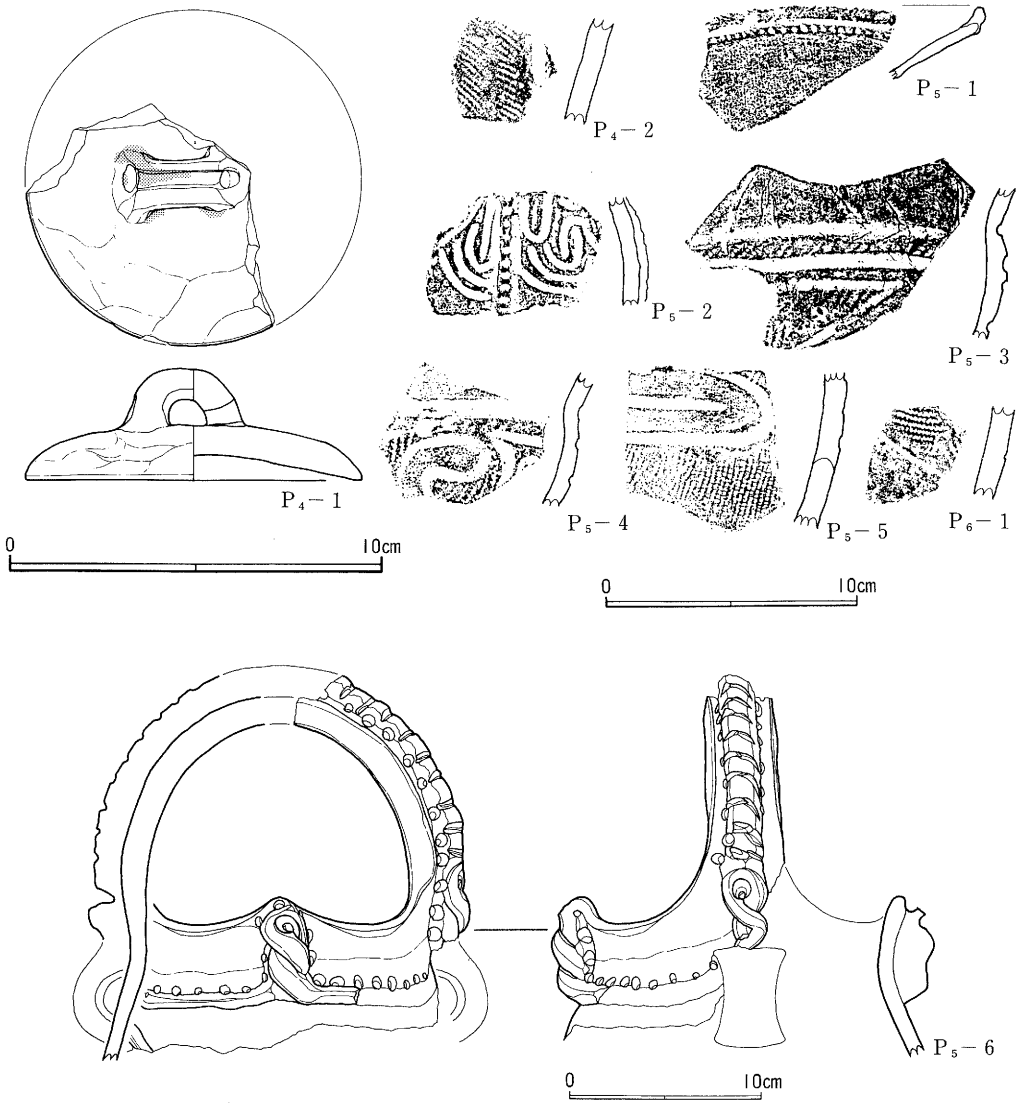


第27図　第12号住居址・柱穴内遺物出土状況（S＝1/60）

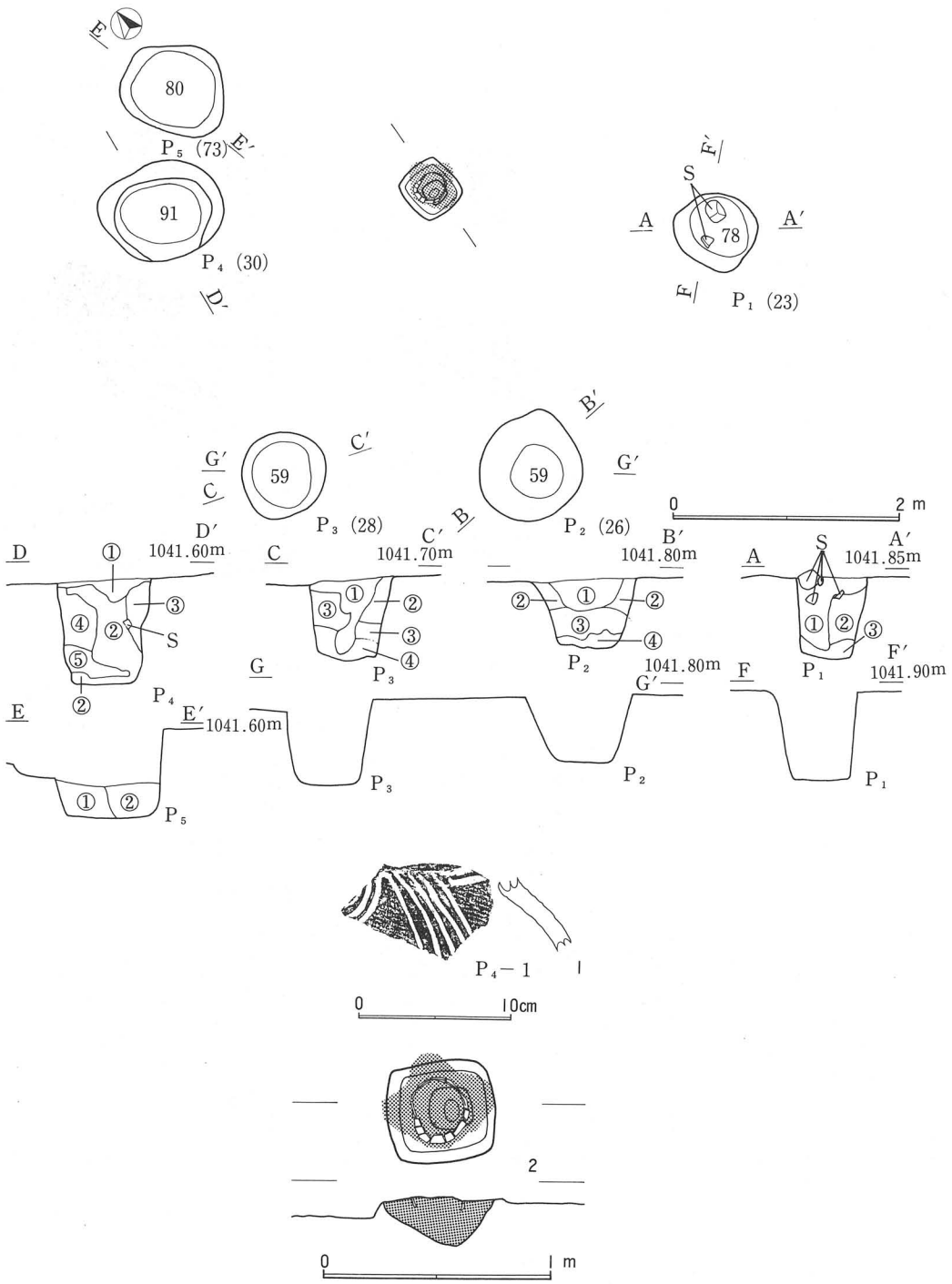


第28図　第12号住居址内炉址・集石土坑・出土遺物

（S＝1/30）（1・3・4・5、S＝1/3）（2・6・7、S＝1/4）



第29図　第12号土坑柱穴内出土遺物（P_4－1、S＝1/2　P_4－2・P_5－1～5・P_6－1、S＝1/3　P_5－6、S＝1/4）



第30図　第13号住居址（S＝1/60）（1、S＝1/3）（2、S＝1/30）

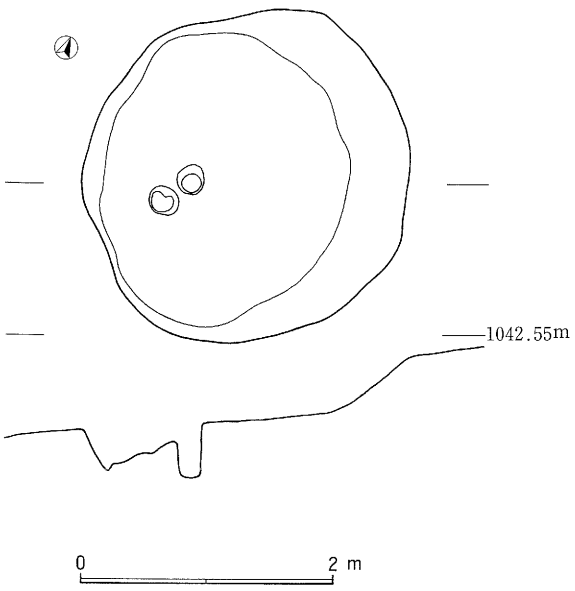
10. 第13号住居址（第30図、図版１）

調査中は土坑として扱っていたが、調査終了後、住居址とした遺構である。柱穴の配置、中央に埋甕炉を持つ点、P_1、P_3、P_4に、柱痕と考えられる土層断面①層が見られる点が、第12号住居址と類似している。

第12号住居址と同様に、床面は確認することができなかった。炉址内出土土器、P_4出土土器（第30図１）から堀之内式期に属する住居址であると考えられる。（功刀）

(2) 第１号竪穴状遺構（第31図）

第II次調査区の第６号住居址の南西から検出された遺構である。中央に１本の柱穴が認められたのみで、他の施設は検出されなかった。斜面であるため、東側の壁以外は漸移層中に作られていたと考えられ、重機作業中に破壊してしまったものと思われる。遺存した東側の壁の立ち上がりは緩い。出土遺物はなく、時期は不明である。（功刀）



第31図　第１号竪穴状遺構（S＝1/60）

(3) 第１号方形柱穴列（第32・35図、図版２）

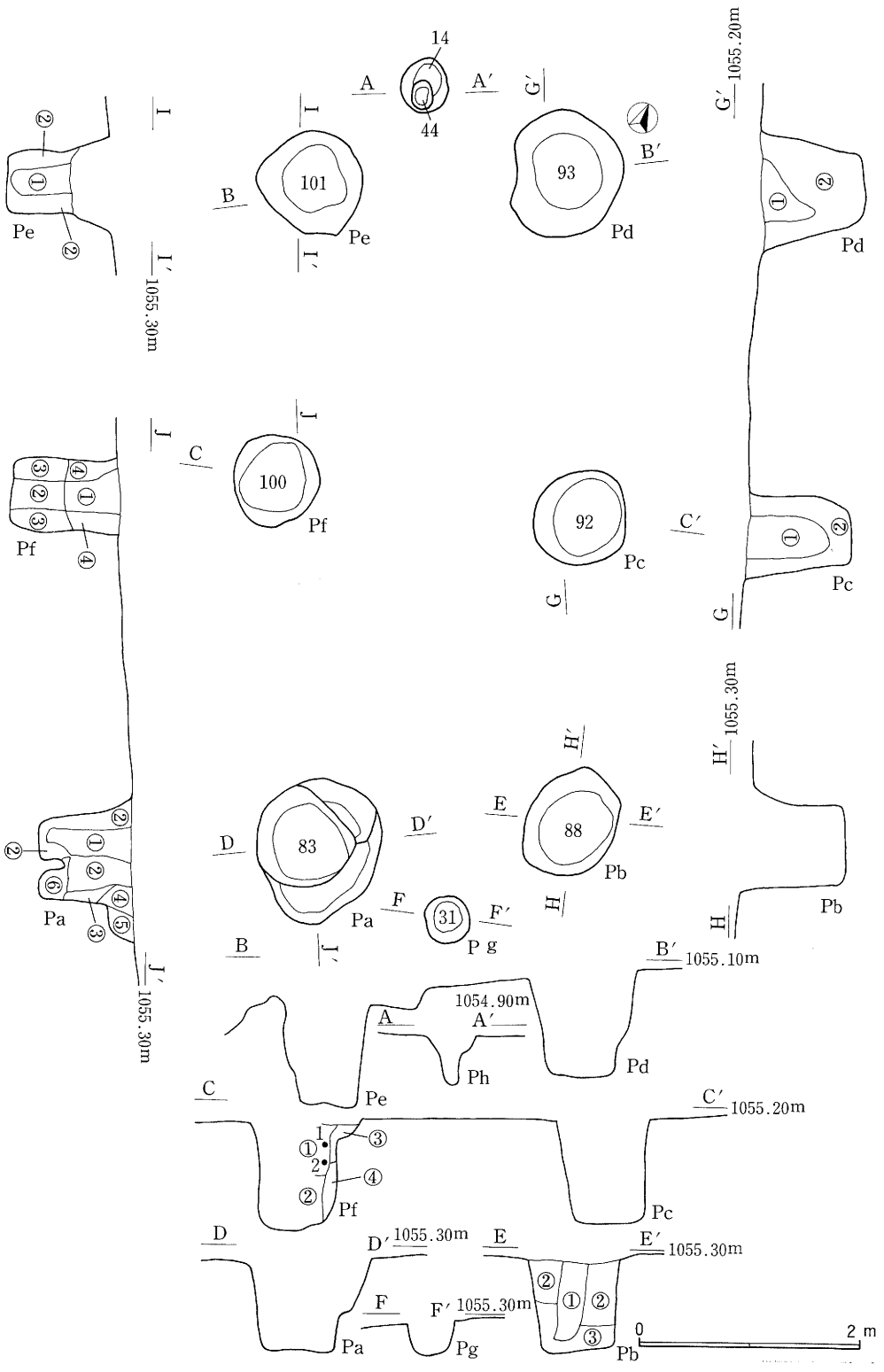
北西地区から検出された。短辺が２本、長辺が３本の柱構成で、短辺の中間に細く浅い柱穴が張り出している。長軸は北北東を向く。Ｐａ、Ｐｂ、Ｐｃ、Ｐｄ、Ｐｅの①層が柱痕と考えられる層である。いずれも暗褐色土層で柱穴内の他の土層に比べ、ロームブロックの量が少ない点で分層することができる。Ｐｆの①・②層も柱痕と考えられる層であるが、柱穴の半ばでふたつに分れてしまう点が他の柱穴にみられた柱痕と異なる点である。Ｐａは底部が２つに分れ、柱痕は北半に偏っていることから、柱の建て替えも想定することができる。柱穴の範囲内には他の施設の存在をうかがわせる痕跡は認められなかった（第32図）。

出土遺物はＰｃ、Ｐｆにのみ認められた。Ｐｃからは縄文を施した中期末の土器片が出土した（第35図Ｐｃ）。Ｐｆのエレベーション図Ｃ－Ｃ′①層１は、中期末の土器片（第35図Ｐｆ－１）、２は小形磨製石斧である（第35図Ｐｆ－２）。この磨製石斧は後述の第１号竪穴出土の磨製石斧の基部と接合した。（功刀）

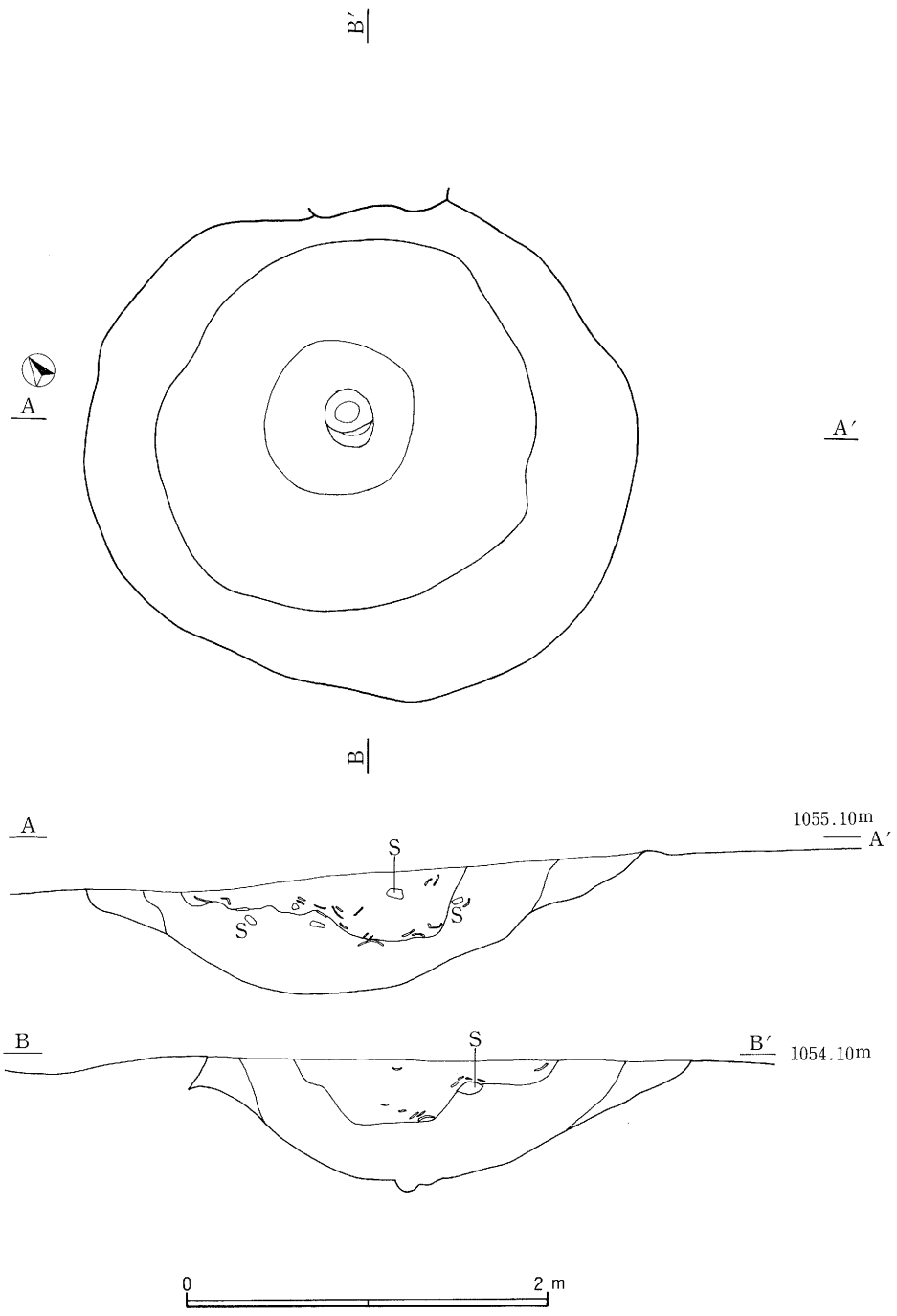
(4) 第１号竪穴（第33～38図、図版２・９）

第１号方形柱穴列の西に、接するように検出された遺構である。平面形状は円形を呈し、断面形状は擂鉢状である。壁の立ち上がりは緩やかで、下端がはっきりしない。底面中央に深さ10cm程度の極めて浅いピットがある（第33図）。

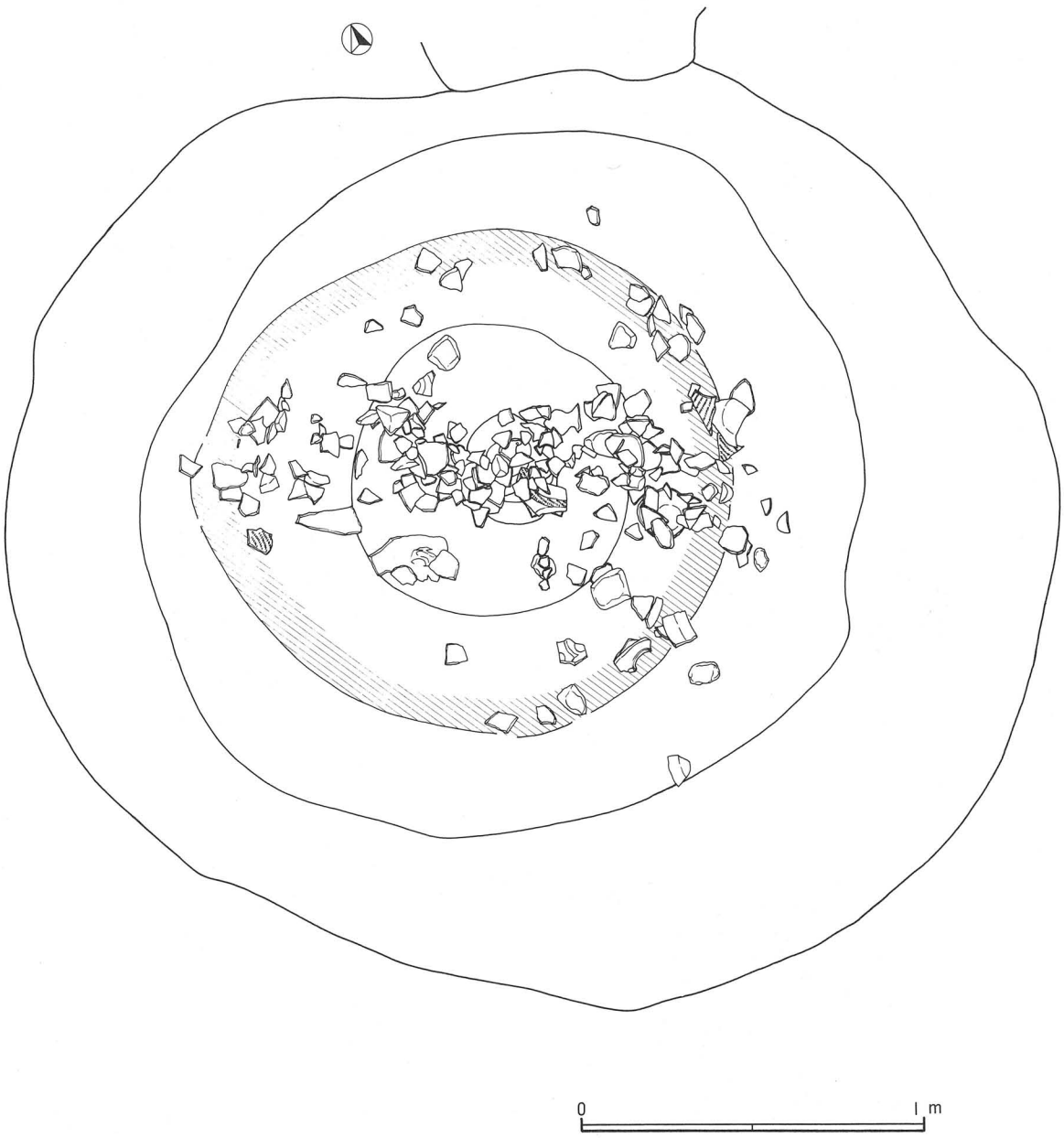
土層は上下の２層に分層できた。セクション図にみる左右脇の層は漸移層であり、掘り過ぎたものである。①層とした暗褐色土層、②層黄褐色土層とも、地山に含まれる軽石を少量含んでいた（第33図）。遺物は多量に出土し、そのほとんどが①層である暗褐色土層に含まれていた。遺物の平面分布は円形を示し、遺物が集中して廃棄された様子がうかがえる（第34図にスクリーン・トーンで示した）。土器の内復原できるものはわずかで、完全に復原できた個体はない。関東地方の称名寺式土器に類似するもの（第35図４～８、第36図、第37図１～４、図版９）、加曽利Ｅ式土器の特徴をもつ土器（第37図６～８）、曽利Ｖ式土器（第38図４～７）が出土したが、量は称名寺式土器に類似する土器群がもっとも多い。底面のピットの脇から、称名寺式土器に類似する把手が出土した（第36図11）。なお小形磨製石斧の基部１点が出土し、方形柱穴列Ｐｆ出土の磨製石斧と接合した（第35図Ｐｆ－２）。（功刀）



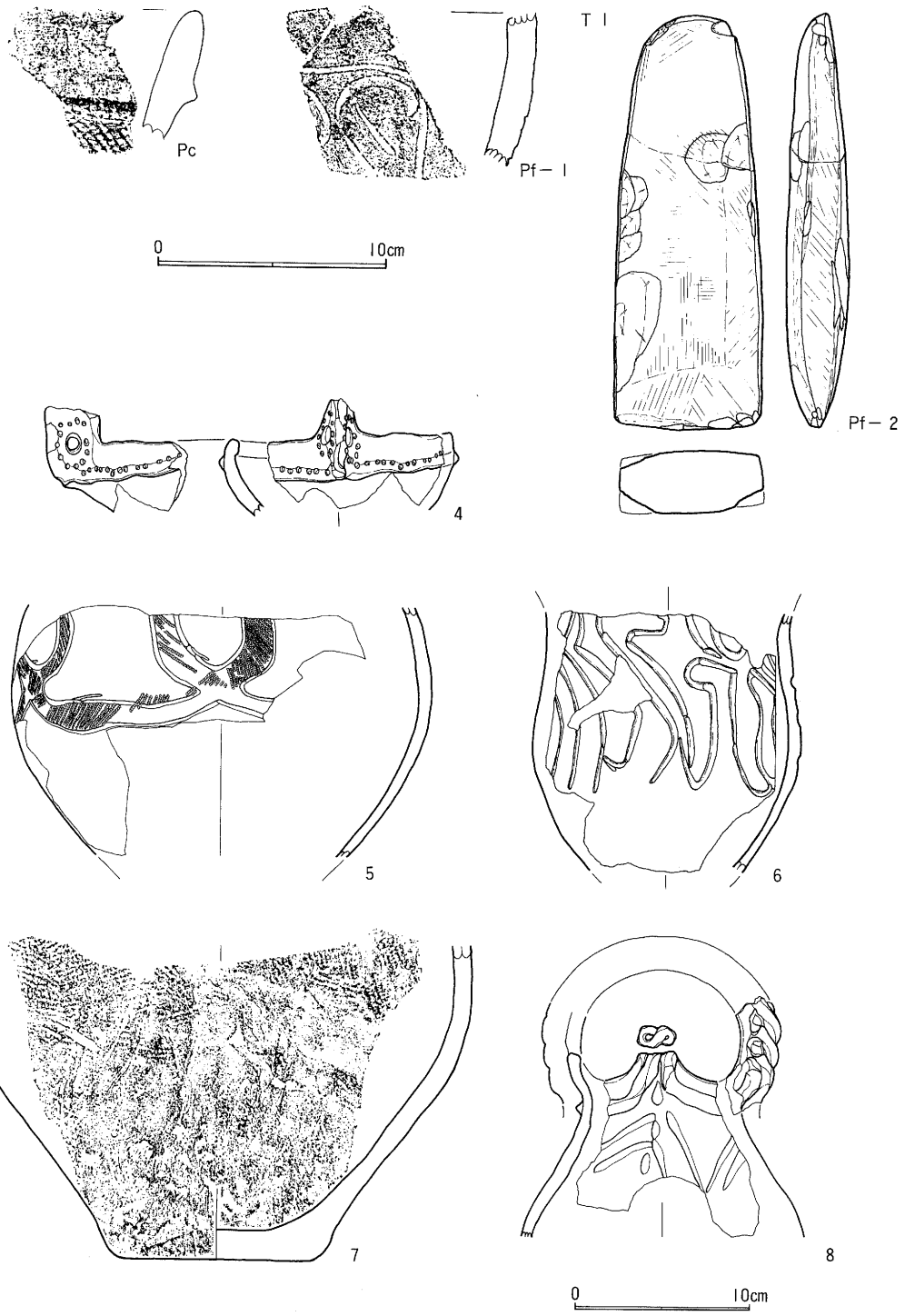
第32号　第１号方形柱穴列（S＝1/60）



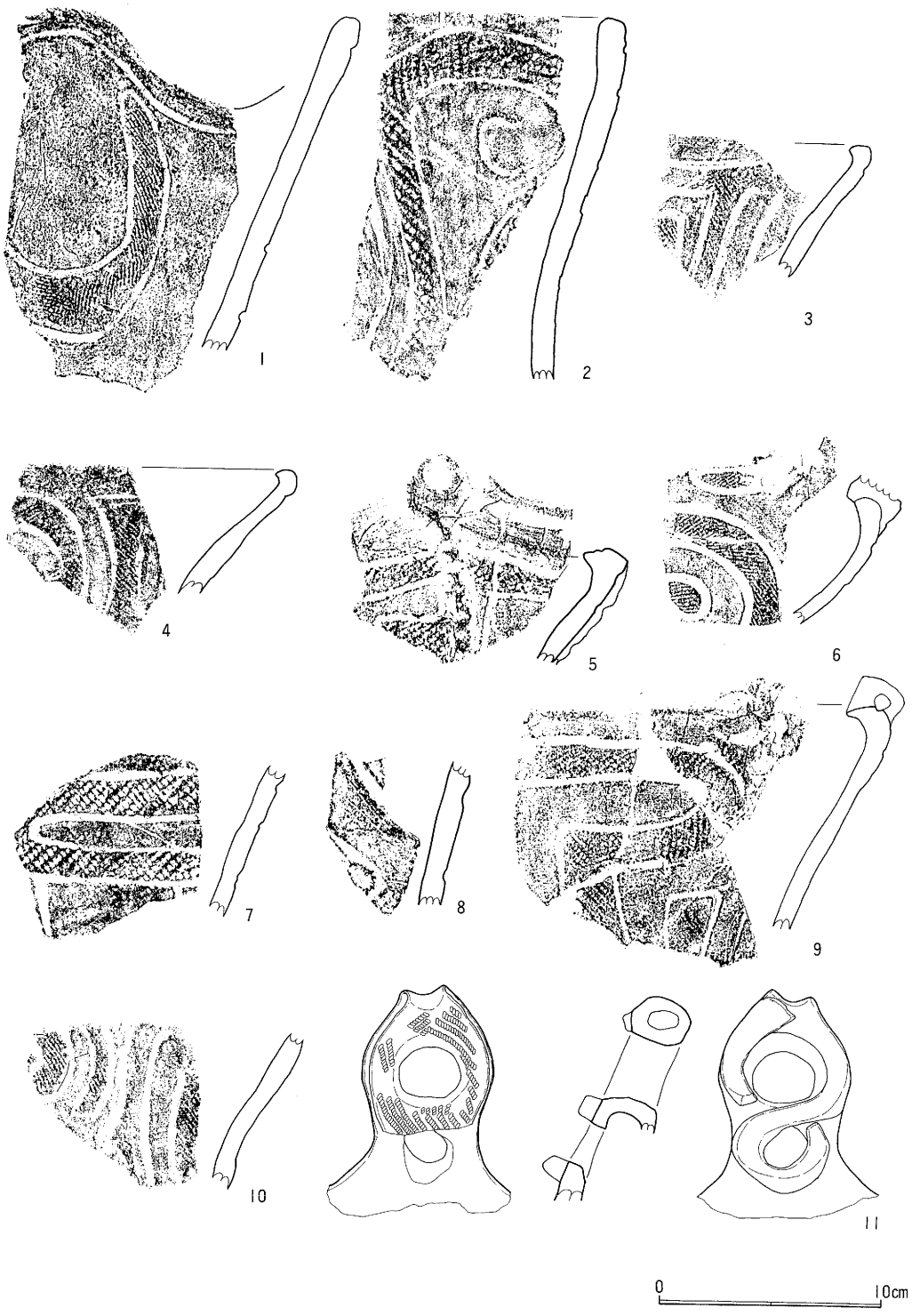
第33図　第１号竪穴（Ｓ＝1/40）



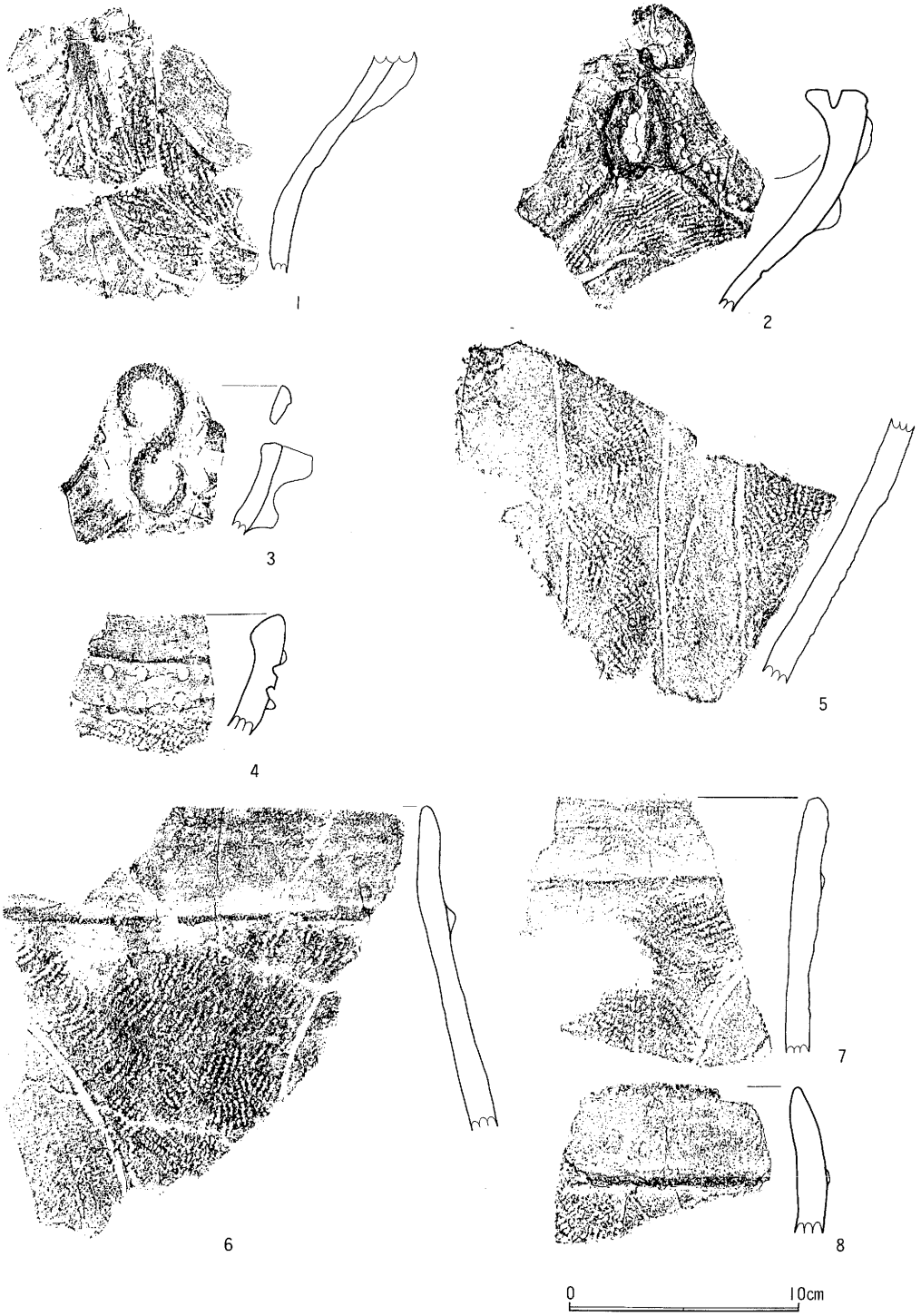
第34図　第１号竪穴遺物出土状況（Ｓ＝1/40）



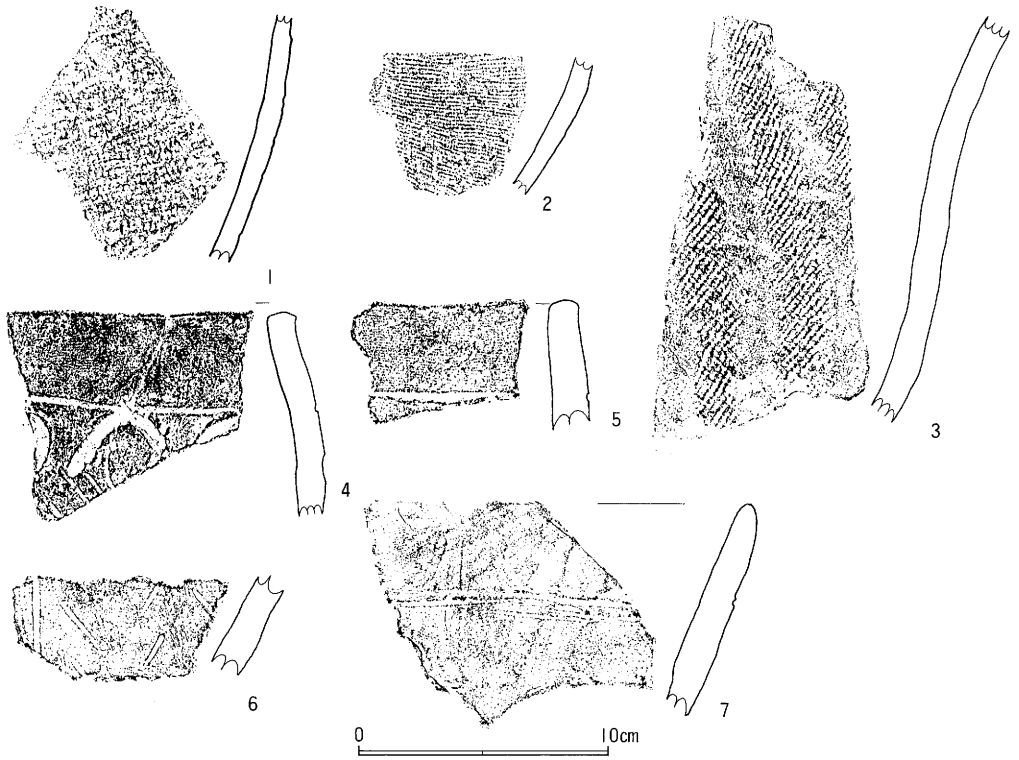
第35図　第１号方形柱穴列、第１号竪穴出土遺物(1)（Pc、Pf－１・２、S＝1/3）（４～８、S＝1/4）



第36図　第１号竪穴出土遺物(2)（Ｓ＝1/3）



第37図　第１号竪穴出土遺物(3)（Ｓ＝1/3)



第38図　第１号竪穴出土遺物(4)（Ｓ＝1/3）

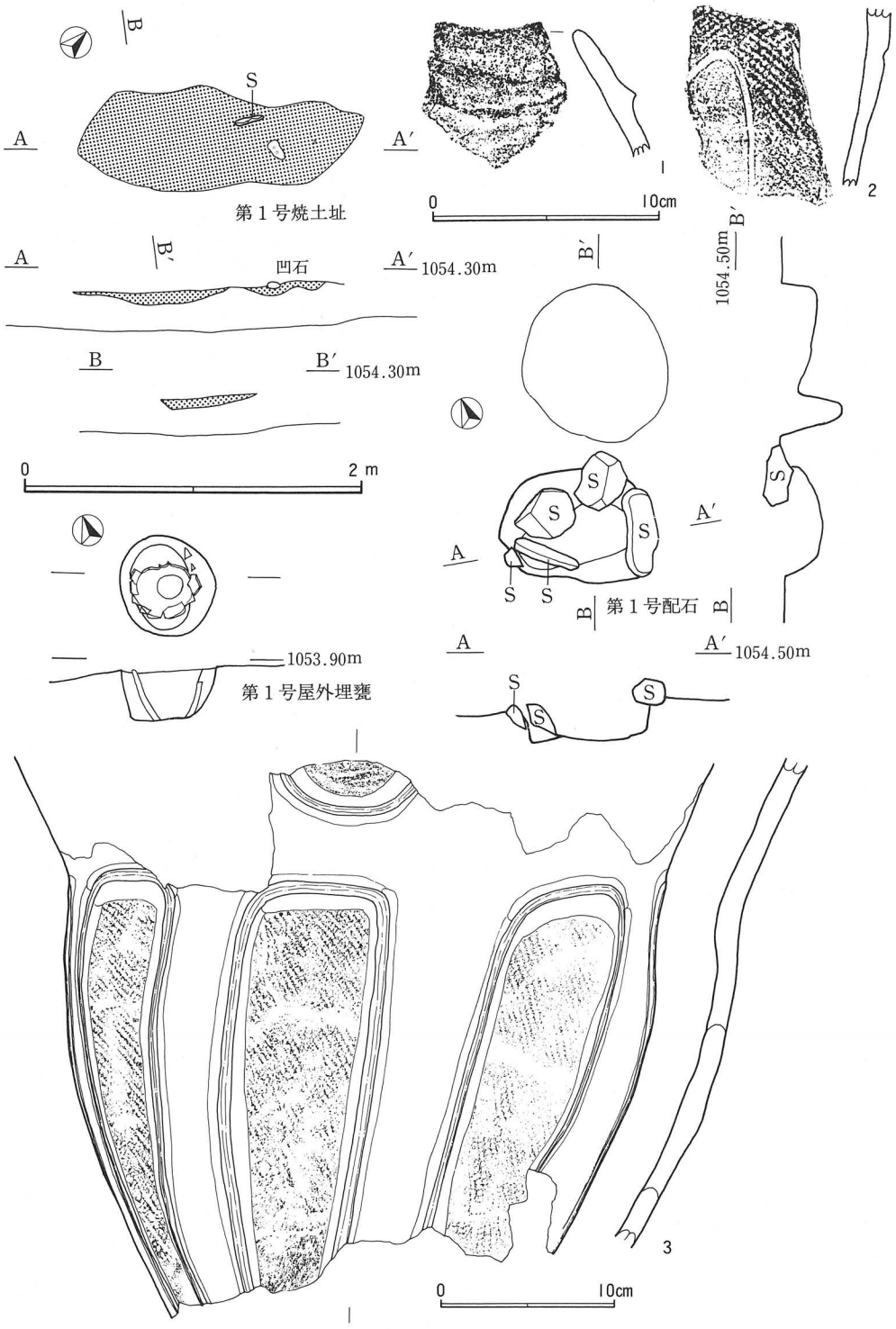
(5)　第Ｉ号焼土址（第39図）

北西地区から検出された遺構である。遺物包含層である暗褐色土層中に厚さ６㎝程の焼土が広がっていた。焼土中から凹石、土器が出土したことから、縄文時代の遺構であることがわかる。土器は、縄文時代中期末加曽利ＥIV式土器の特徴をもつ土器である（第39図１・２）。焼土址は漸移層上面から約20㎝程上位から検出されたことから、北西地区西側では、縄文時代中期末の時期の生活面は、漸移層上面20㎝より上位にあったと考えられる。（功刀）

(6)　配　石

Ｉ．第Ｉ号配石（第39図）

北西地区第１号焼土址の東、第149号、第150号土坑に接する位置から検出された。40㎝から50㎝の礫からなる遺構である。礫は赤く変色したものがあり、火を受けたと考えられるが、北端の礫は変色がみられず、配石が組まれてから火を受けたものとは考えられない。配石内部の土層観察でも、焼土粒子等、配石内部で火を焚いた痕跡はみられなかった。遺物の出土はなく、詳しい所属時期は不明である。（功刀）



第39図　第1号焼土址、第1号配石、第1号屋外埋甕（S＝1/40）（1・2焼土址遺物、S＝1/3　3埋甕、S＝1/4）

2．第２号配石（第24図）

第II次調査区第11号住居址の南に接する位置から検出された。拳大の礫を長楕円形に並べたものである。内部の掘り込みは確認されず、遺物の出土もない。所属時期は確定できない。

（功刀）

(7) 第１号屋外埋甕（第39図、図版９）

北西地区第１号焼土址の南から検出された。埋甕に用いられていたのは、加曽利ＥIV式の特徴をもつ大形の深鉢である（第39図３、図版９）。調査中に排土から採集された破片と接合したことから、重機作業中に上端を破壊してしまったものと思われる。埋甕内には暗褐色土がつまっており、出土遺物はなかった。

（功刀）

(8) 土　坑

鴨田遺跡では４つの調査区合せて、250基調査した。この内、植物の根等による攪乱も調査しているため、確実に遺構であると考えられるものは半数以下である。

土坑の大きさ等の属性は一覧表として巻末にまとめた（表２～７）。一覧表の中の、土坑断面形状は壁の立ち上がりを分類したものである。内湾は、壁が湾曲しながら立ち上がり上場に向って開くものである。外傾は、壁は直線状に立ち上がり、上場に向って開くもの。内傾は、壁が直線状に立ち上がり、上場に向って閉じていくもの。直立は、壁は直線状に立ち上がり、壁がほとんど傾かないもの。斜位とは、上場と下場がずれており、柱穴自体が斜めになっているものである。平長は土坑上場の長軸の長さを表わし、平短とは土坑上場の長軸にほぼ直交する軸線の内最大値を計測した。底長、底短は坑底形状を基準とし、計測方法は平長、平短に準ずる。深さは、確認面から計測し、上場標高の内の最高地点と坑底標高の最低地点の差を深さとしている。個々の土坑については説明を省くが、以下に特徴ある土坑について述べておきたい。

東地区第115号土坑、第116号土坑、北西地区第134号土坑は袋状土坑である（第54図、第58図、第59図）。115号土坑は一部壁面が内傾しているのみであるが、116号土坑は内傾する壁面の途中が屈曲する。116号土坑のセクション図④はハードロームが崩れたもので、土坑構築当初は他の壁面と同様屈曲をもっていたと考えられる。形状としては袋状土坑であるが、より規模が大きいのが、北西地区の第134号土坑である（第58図）。調査中の不注意から、北北西の壁を一部掘り過ぎてしまった。第115号土坑、第116号土坑と比べ土層堆積状況が複雑で、④層、⑤層は粘土質の灰黄色土である。④層、⑤層と土坑壁面の間には溝が検出された。この溝は深さ108cmから118cmまでは幅約６cmから４cmあるが、深さ118cmからは幅が減じ、⑥層と壁面の間に消えるように狭まっていく。土坑内部になんらかの施設が設けられていた痕跡であると考えられる。坑底には坑底からの

深さ16cmのピットがある。深さは浅く、ピット壁面は緩やかに立ち上がっていること、土層の断面観察でも、⑤層の面的な観察からも柱痕らしきものは観察されなかったことを合せて考えると、柱穴として機能していたとは考えにくい。この土坑が⑦層下部を坑底としていた時期と、⑤層を坑底としていた時期の2回に渡って使用されていたのか、坑底の浅いピットは施設を設けた痕跡であるのか、現時点では判断できない。第115号、第116号、第134号土坑とも遺物は出土している（表4、第59図、図版9）。特に第116号、第134号土坑は、他の土坑に比べ遺物の出土量が比較的多い。第134号土坑の遺物はほとんどが③層から出土した。土器の他、最大長が30cmから40cmの礫が出土している。第115号、第116号土坑と第134号土坑は壁面が内傾する点では一致するが、第134号土坑の粘土質灰黄色土による土層、坑底のピット等、差異のほうが目立つ。第134号土坑からは、中期末から後期初頭に属す土器（第59図1～4、図版9）、および長さ40cm程度の角がとれた礫が多量に出土した。第115号、第116号土坑からは、土器の出土がないため時期が確定できないが、両土坑の周辺には縄文時代中期初頭の遺構が多いことから、中期初頭の土坑であると考えている。

この他、特殊な土坑としては、第149号土坑がある（第61図）。土坑の平面および断面形状は他の土坑と比較しても変った所はないが、覆土中に多量の焼土と土器を含む。焼土は②層中に多く、断面形状は擂鉢状を呈する。セクション図にスクリーン・トーンで表示した2b層は、硬いブロック状の焼土である。2a層は、暗褐色土の中に多量の焼土粒子と粒子状の炭化物が含まれている土層である。①層と③層には焼土は含まれず、①層には柱状の炭化物が含まれているだけである。土坑壁面、坑底ともに火を受けた部分はみられない。遺物はすべての層から出土したが、出土量は②層が多い。石器は他の土坑と比べると出土量は多いが、土器の多さが目立っている。土器は中期末から後期初頭に属し、多くが表裏面、断面ともに赤く変色していることから、破砕後に火を受けたものと考えられる（第61図149－1～5）。

この他、坑底に焼土が検出された土坑がある。第177号土坑（第65図）、II次調査区第52号土坑（第73図）である。いずれも坑底が火を受けたものと思われ、赤く変色し、焼土直下の坑底は、他の部分と比べ硬く締っていた。第177号土坑の焼土は、②層を切っており、土坑覆土堆積以前に堆積したもののように思われた（第65図）。遺物の出土量は、第177号土坑と第II次調査区第52号土坑とではまったく異なり、第177号土坑からは石器や礫が多量に出土したのに比べ、第II次調査区第52号土坑からは遺物の出土がない（表5、6）。また第177号土坑では、覆土内上位の確認面に粘土質灰白色土が検出された。④層である。粘土質灰白色土の平面形状は、ほぼ楕円形であった（第65図）。

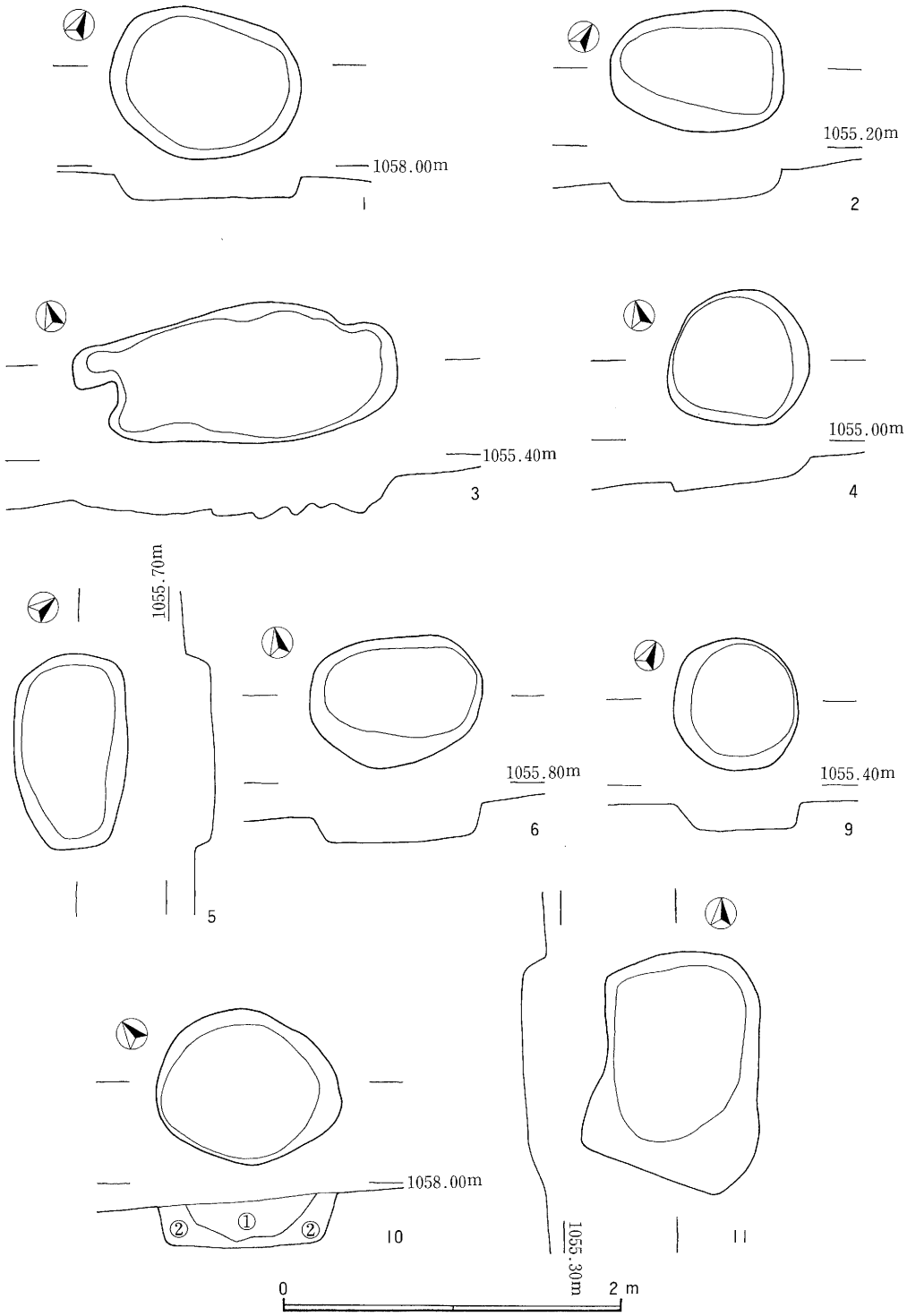
坑底ではなく、覆土に焼土を含む土坑がある。第186号土坑、第201号土坑、第II次調査区第51号土坑である。第186号土坑では土坑内中位に焼土ブロックがあり、①層は焼土粒子を含んでいる（第68図）。第201号土坑では、土坑覆土である①層と④層と、確認面より上位の層である1b層との間に焼土層がはさまれるように検出された（第69図）。第II次調査区第51号土坑では、焼土は

水平堆積を示し、①層に切られている（第51図）。縄文時代の生活面上にある本来の土坑上場は、確認面より上位であることを考えると、第201号土坑、第II次調査区第51号土坑では、土坑に覆土がある程度堆積した状態で焼土が堆積したものと考えられる。第II次調査区第51号土坑の焼土堆積状況を重視すれば、覆土上面で火が焚かれたと仮定することも許されるのではないだろうか。坑底に焼土がある場合は、土坑と焼土になんらかの関連が想定され、覆土内あるいは覆土上面の焼土は、半ば埋没した状態の土坑と焼土との間に関連があると思われるが、この差が何に起因するかは不明である。

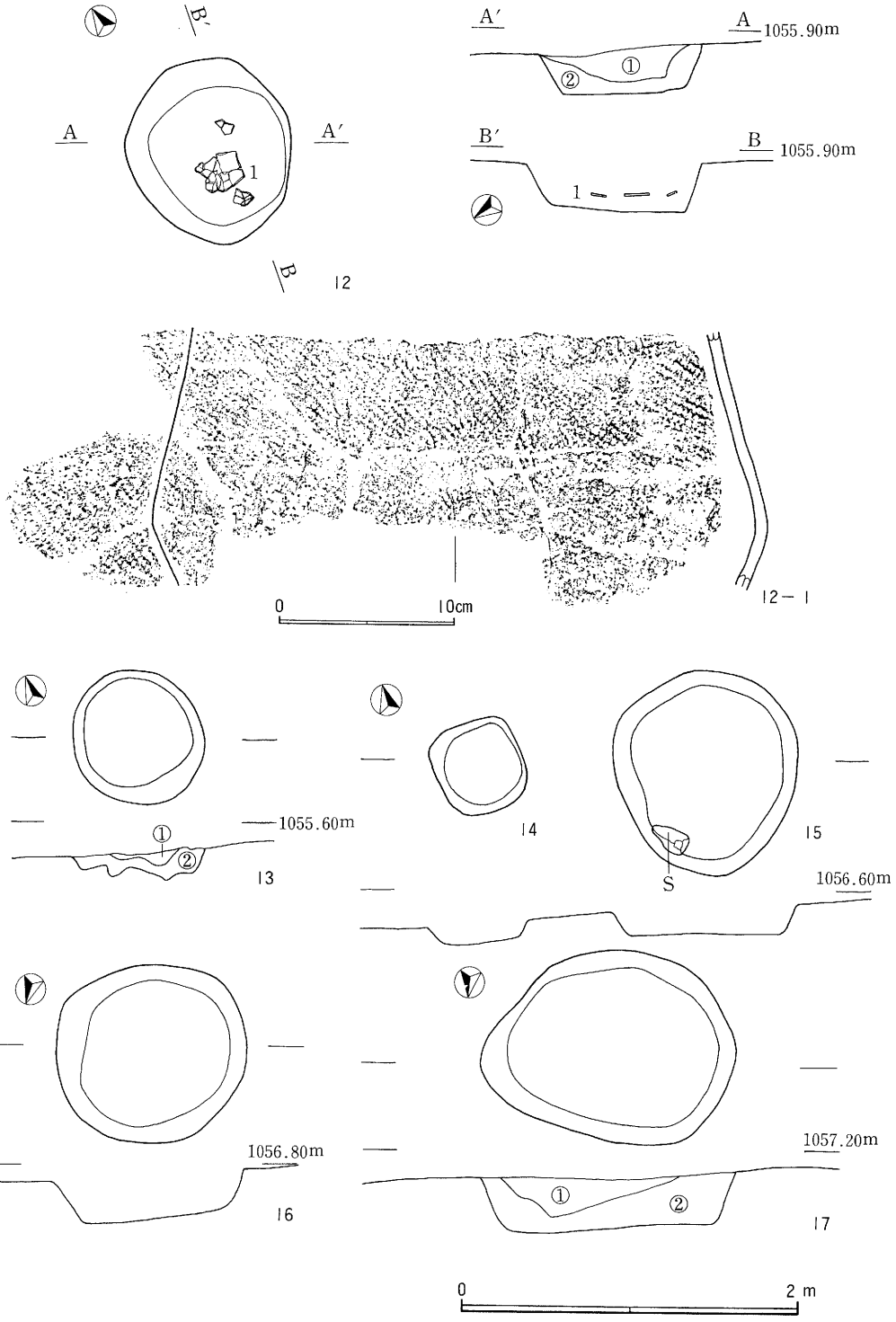
坑底中央にピットをもつ土坑がある。第132号土坑（第57図）、第186号土坑（第68図）、第201号土坑（第69図）、第II次調査区第44号土坑（第72図）の4基である。いずれも坑底のピットが土坑の一部であることを、覆土の観察によって確認したものではなく、坑底中央にピットがあるという規則性を重視して、ひとつの遺構であると判断した。第44号土坑坑底のピット上面には、土器（第72図44－1）が置かれており、埋没開始時点には、柱穴としては機能していなかったと考えられる。第II次調査区第44号土坑のピットは深いが、第132号土坑、第186号土坑、第201号土坑のピットは浅い。

北西地区第162号土坑（第64図）、第175号土坑（第67図）、第179号土坑（第67図）、第II次調査区第66号土坑（第74図）の土層の断面観察では、最初に堆積した土層がもっとも黒味がかっているという観察結果が得られた。他の土坑と比べると、第162号土坑では、①層である暗褐色土と②層である黄褐色土は2㎜から3㎜の炭化物を少量含むのに対し、③層の黒色土は8㎜以下の炭化物を多く含んでいた。第179号土坑でもほぼ同じ現象が観察された。①層は黄褐色土で3㎜以下の炭化物を少量含んでいるのに対し、②層は暗褐色土で、10㎜以下の炭化物を含み、①層に比べわずかながら炭化物の量が多い。

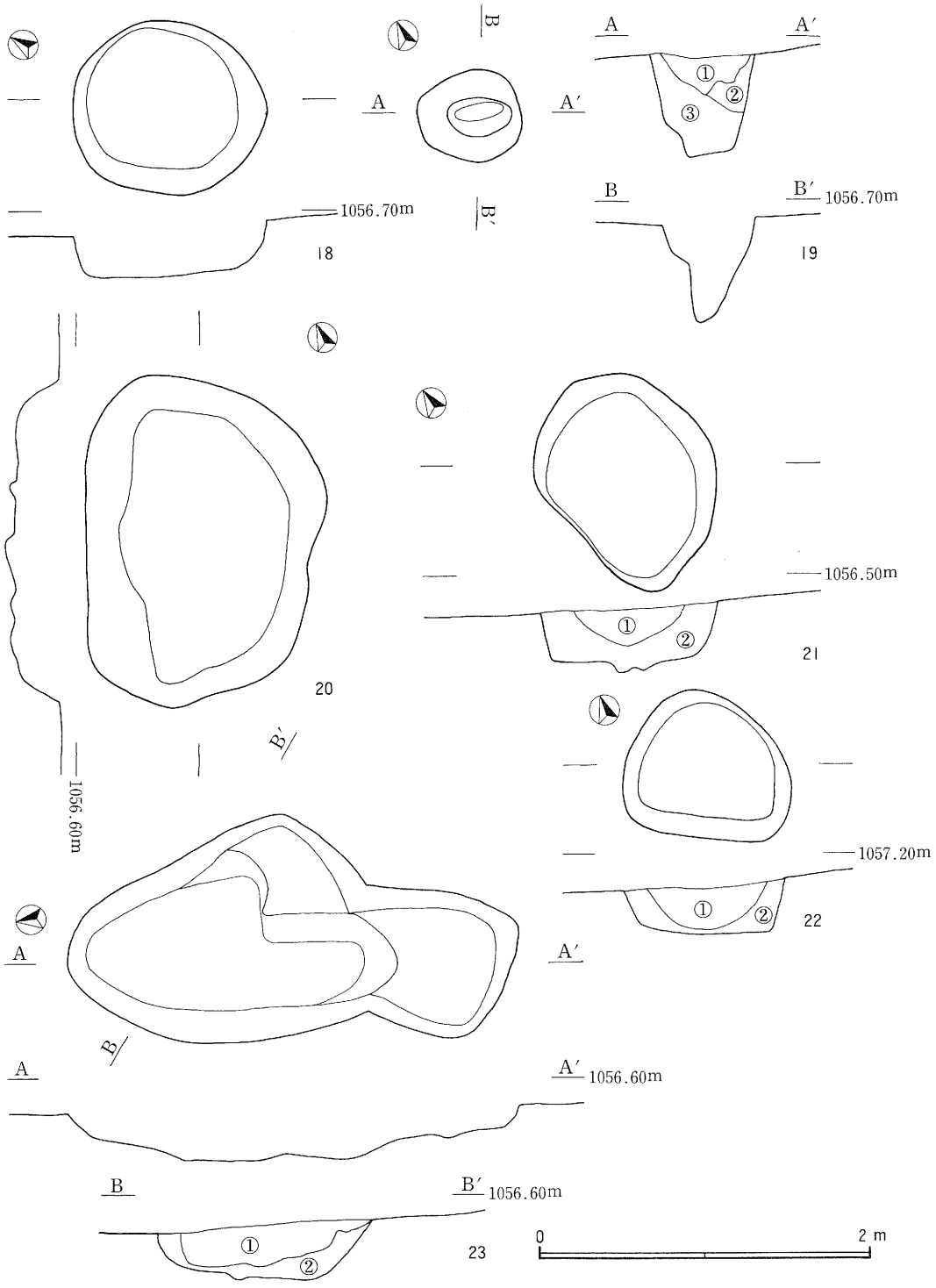
他の土坑は、西地区第28号から第34号土坑にみられる壁面の立ち上がりが明瞭なもの（I類）（第43・44図）、北西地区第142号、第147号土坑（第60・61図）のような、住居址の柱穴に似た、平面長軸の長さに比べ深い土坑（II類）、壁面の立ち上がりが不明瞭で浅い土坑（III類）の3つに大別できる。II類土坑は北西調査区に多く検出されている。II類土坑の多くは、暗褐色土、暗黄褐色土を覆土としている。検出しにくい土坑が多く、見逃したものも多いと思われ、分布の規則性などを明らかにし得なかった。III類土坑とした、壁面の立ち上がりが不明瞭な土坑の覆土は暗褐色土、暗黄褐色土を基調とするが、黄褐色土を斑状に含むものが多いことから、植物の根による攪乱が多く含まれていると思われる。（功刀）



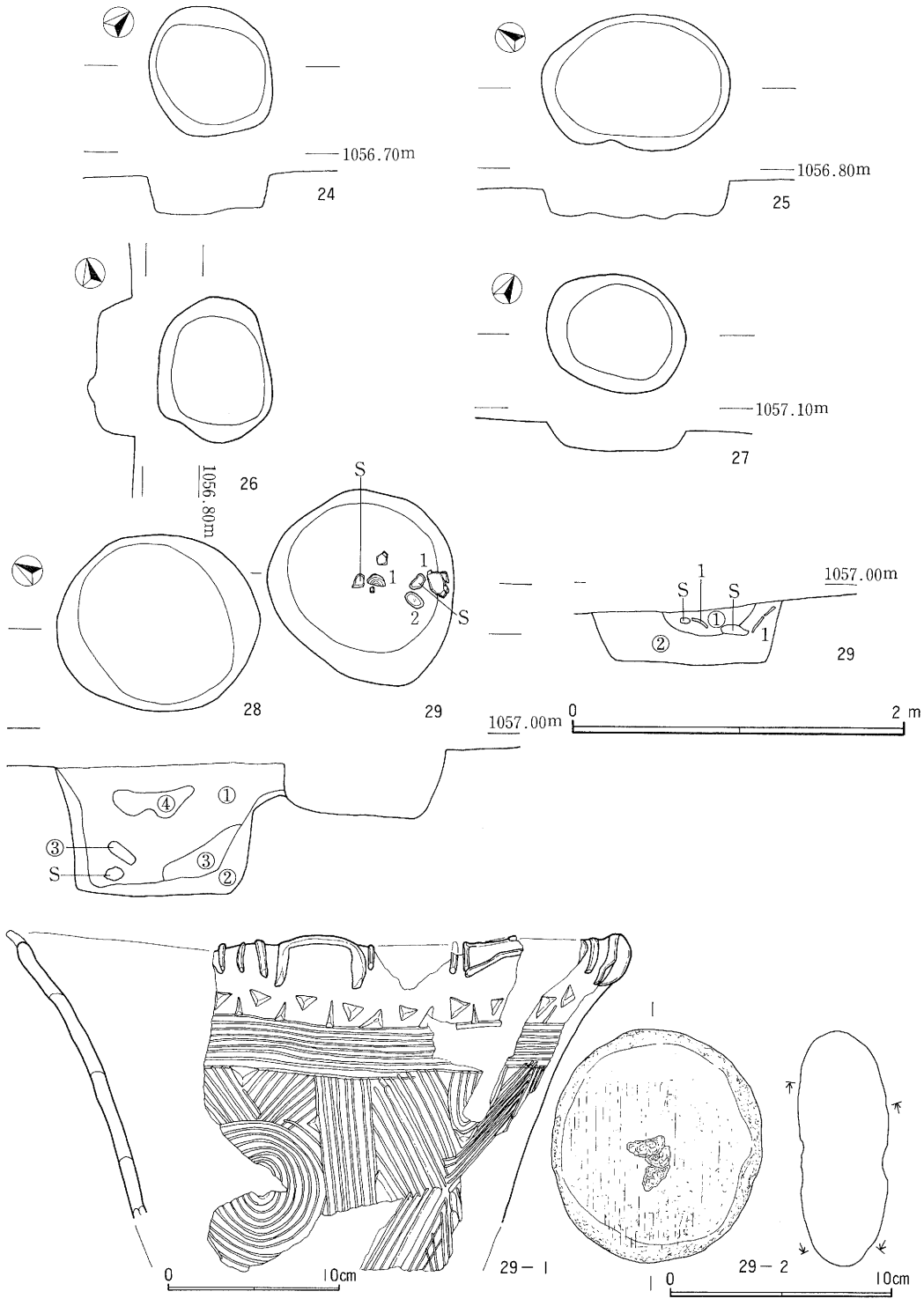
第40図　西地区土坑(1)（S＝1/40）



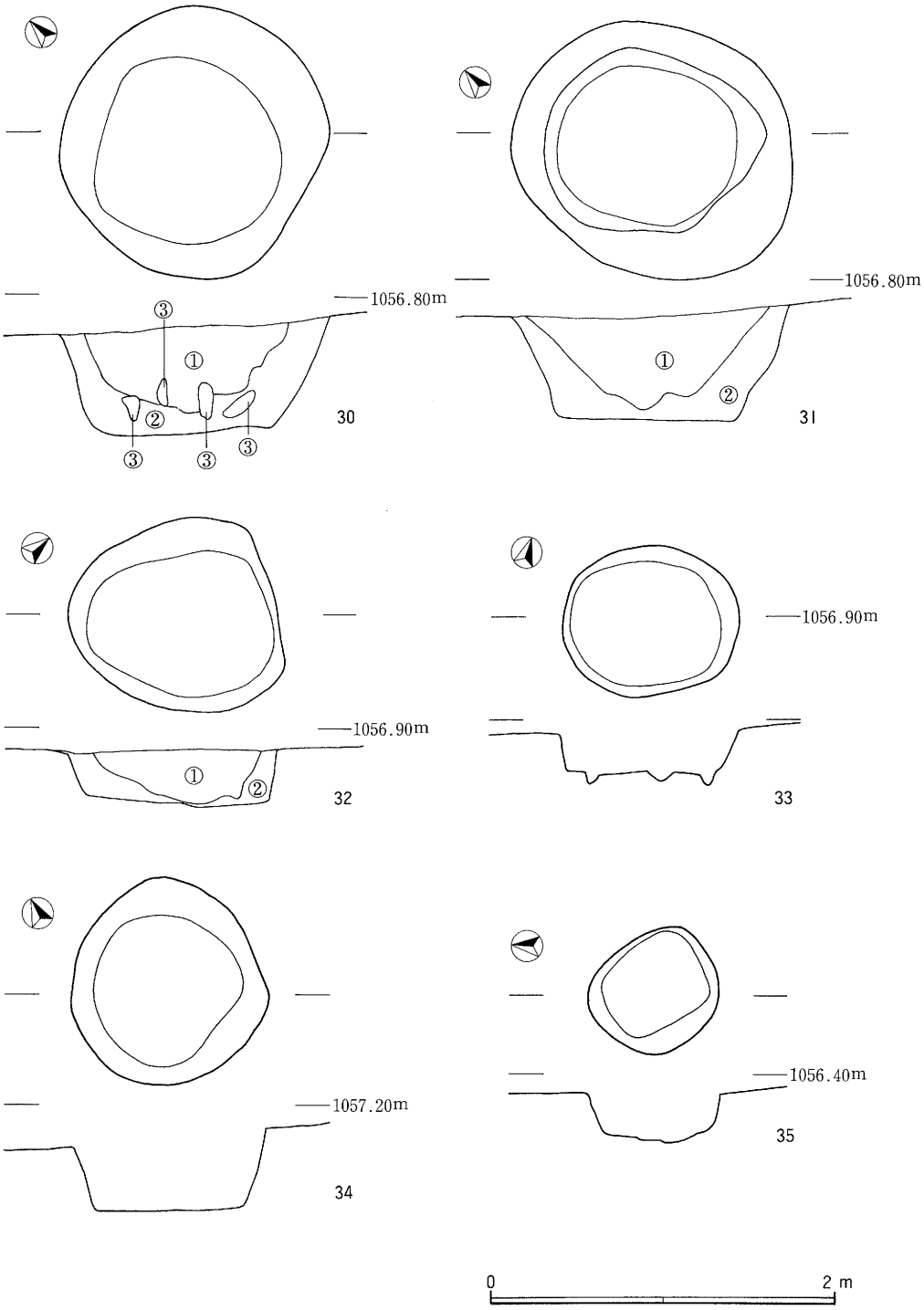
第41図　西地区土坑(2)（S＝1/40）（12－1、S＝1/4）



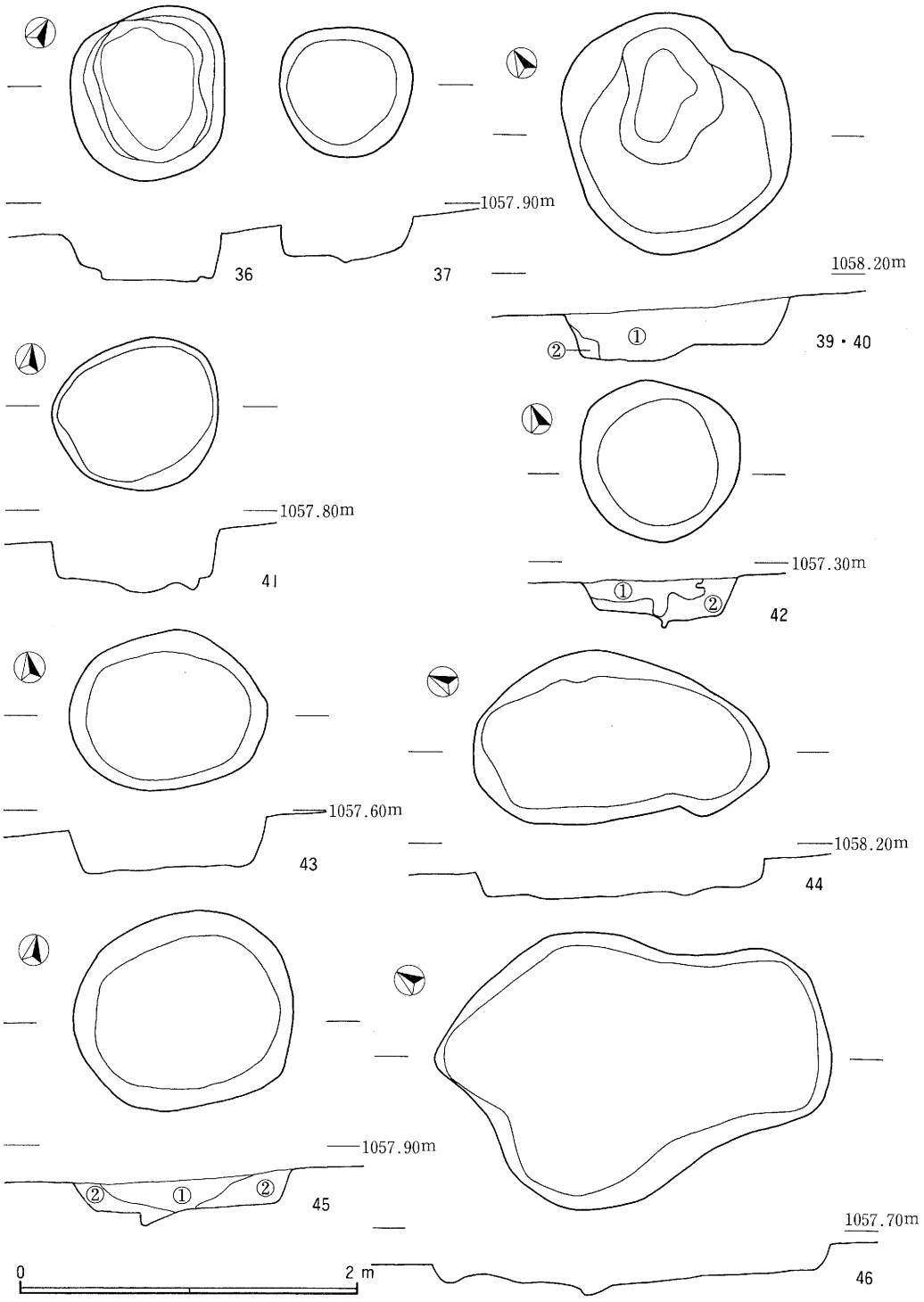
第42図　西地区土坑(3)（S＝1/40）



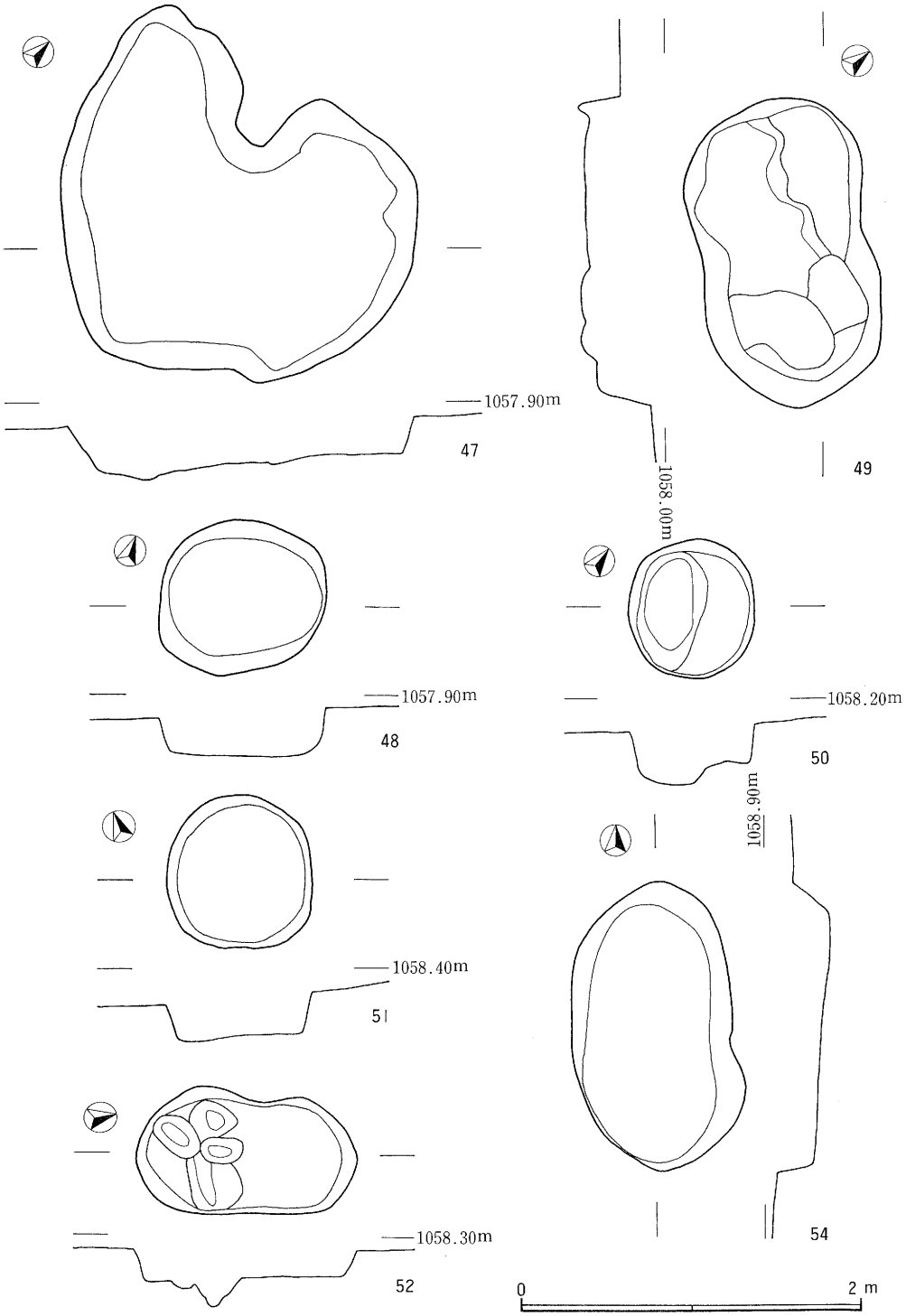
第43図　西地区土坑(4)（S＝1/40）（29－1、S＝1/4）（29－2、S＝1/3）



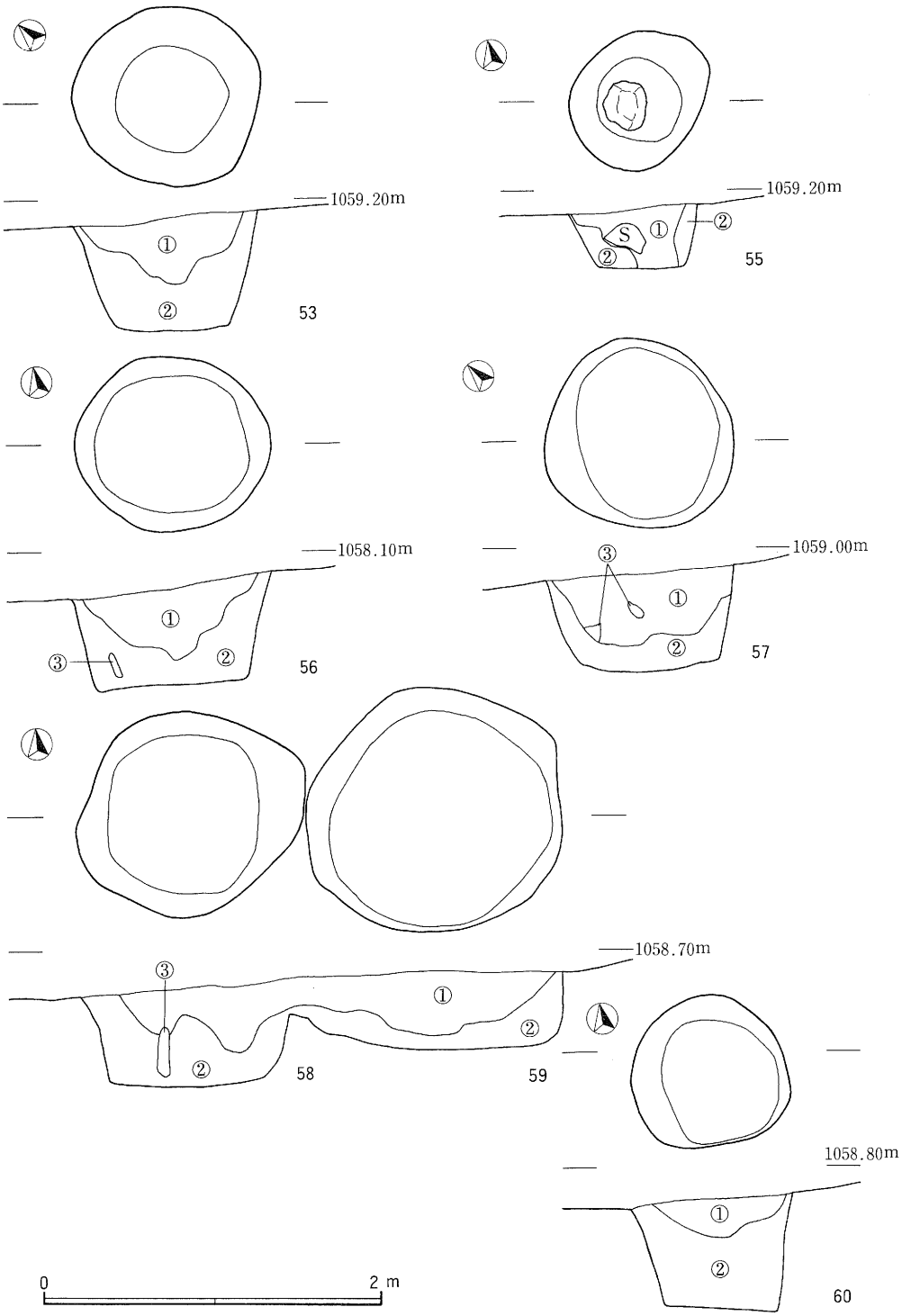
第44図　西地区土坑(5)（S＝1/40）



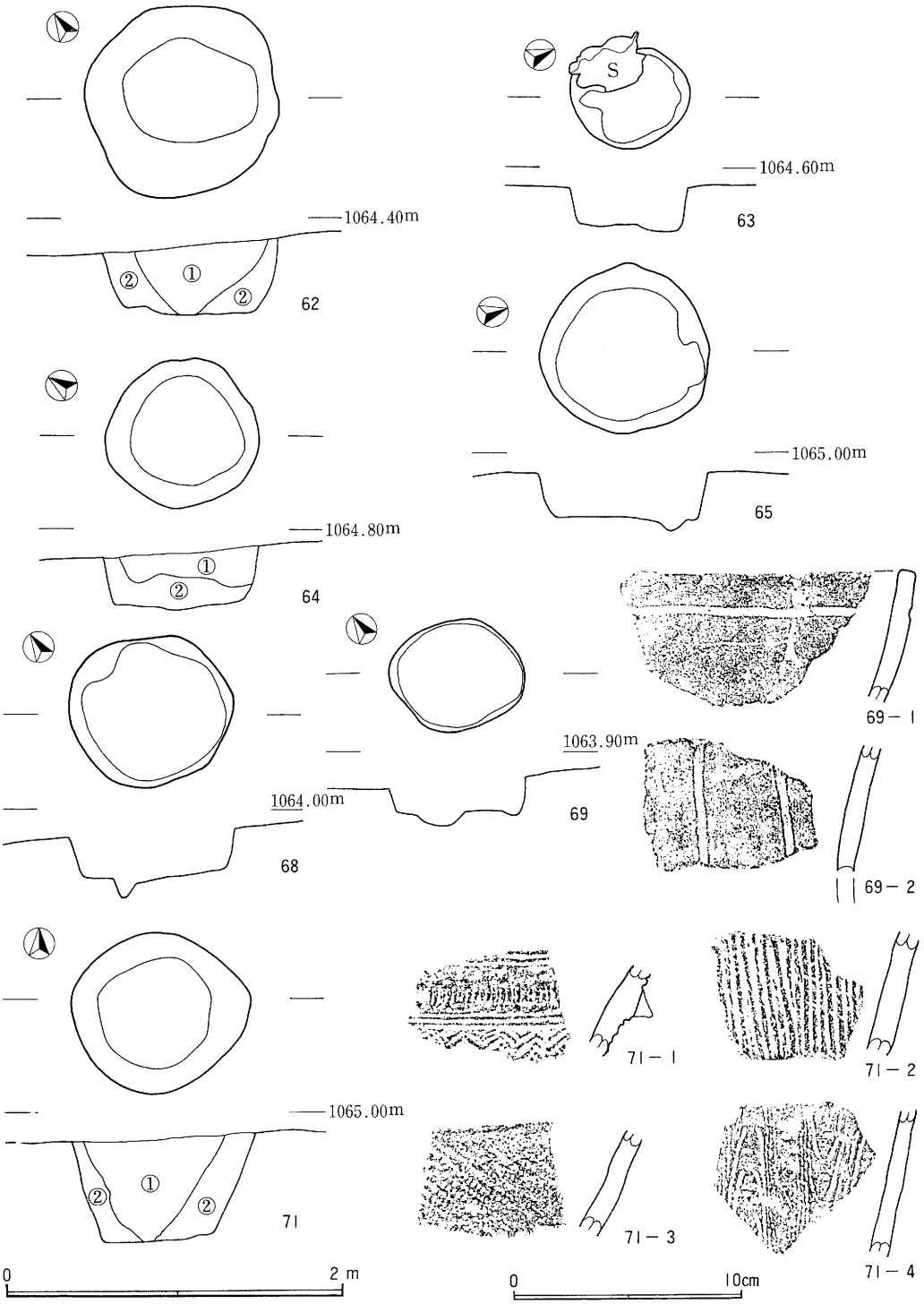
第45図　西地区土坑(6)（S＝1/40）



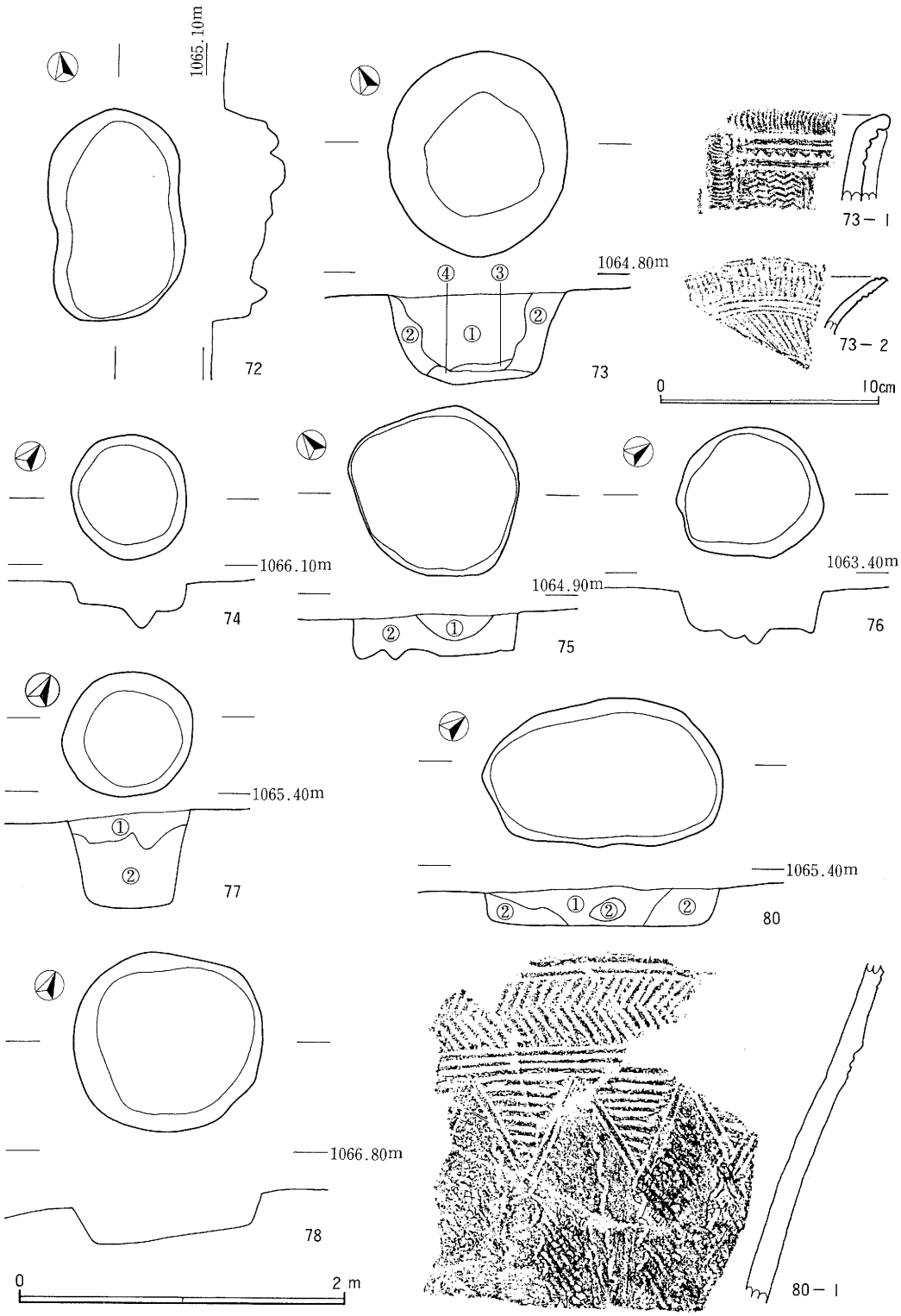
第46図　西地区土坑(7)（S＝1/40）



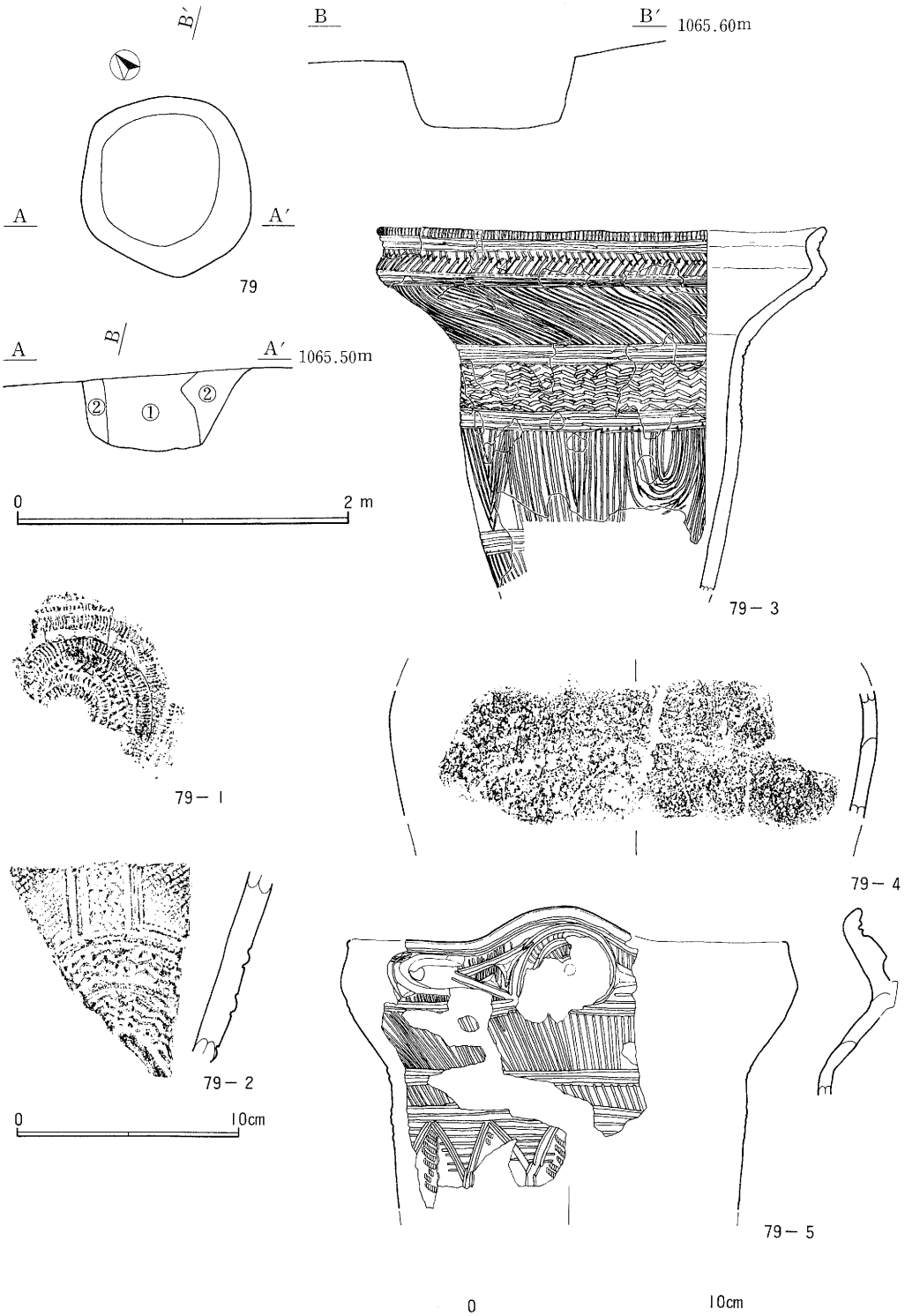
第47図　西地区土坑(8)（S＝1/40）



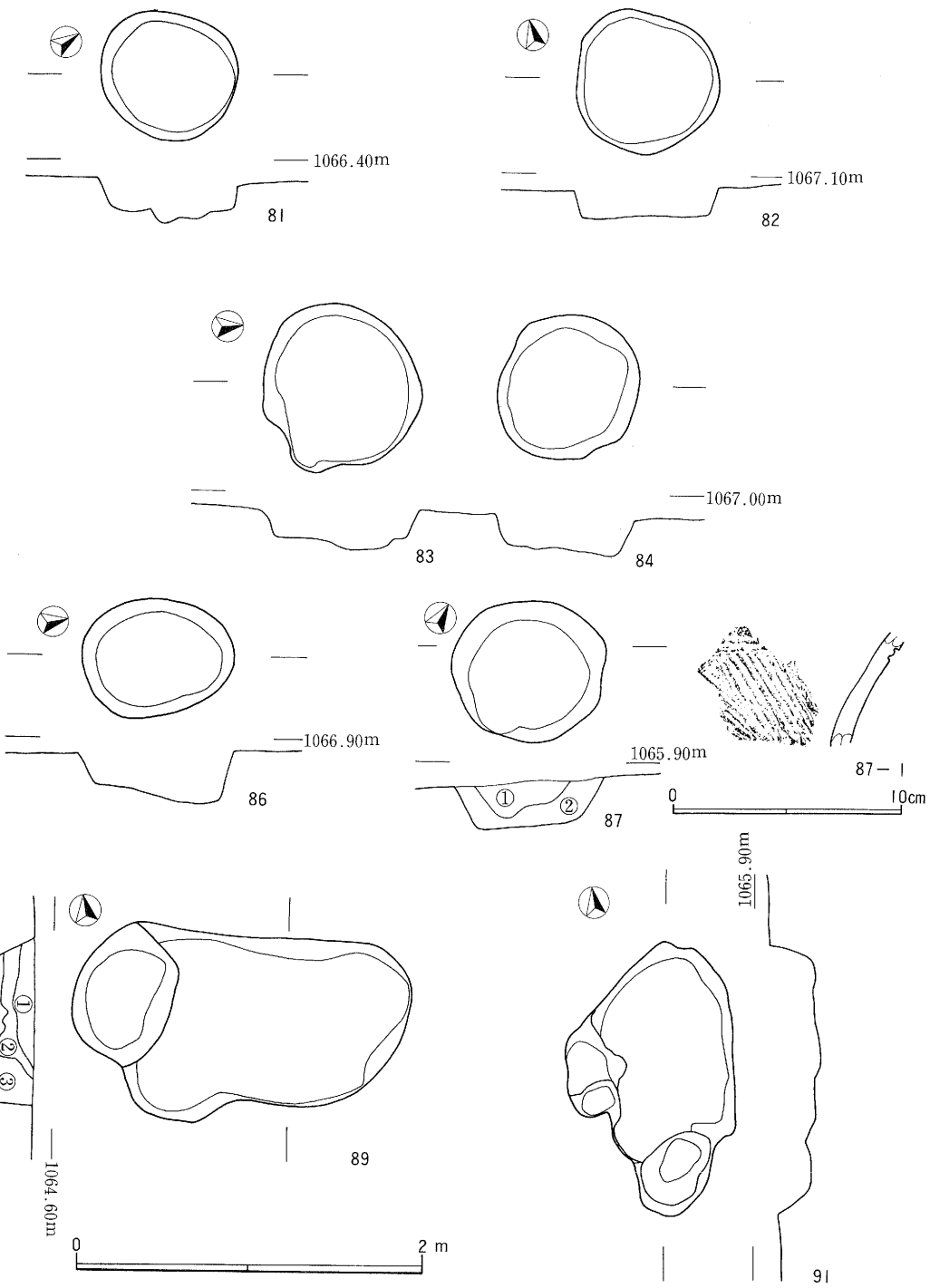
第48図　東地区土坑(1)（S＝1/40）（69－1～2、71－1～4、S＝1/3）



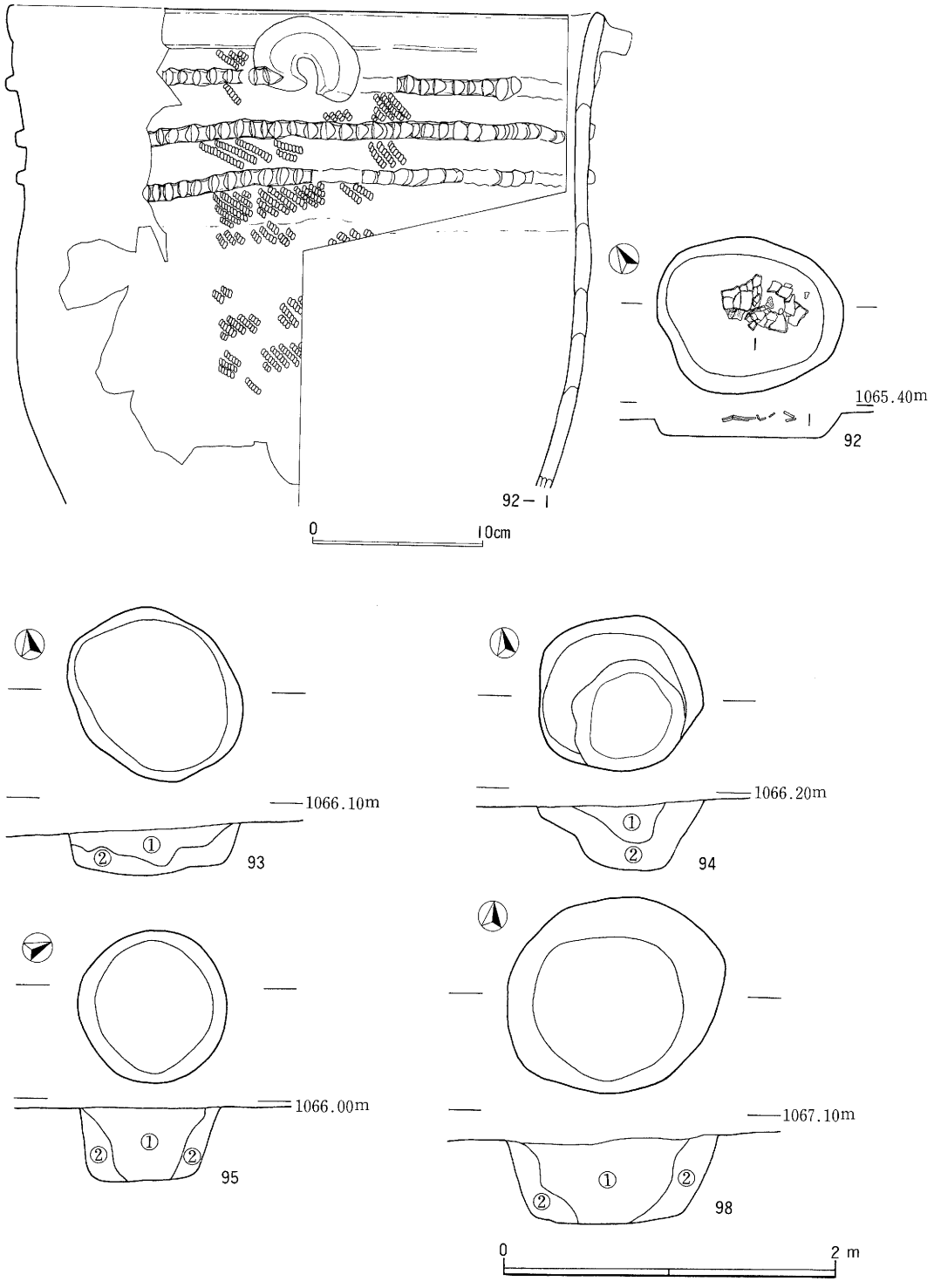
第49図　東地区土坑(2)（S＝1/40）（73－1・2、80－1　1/3）



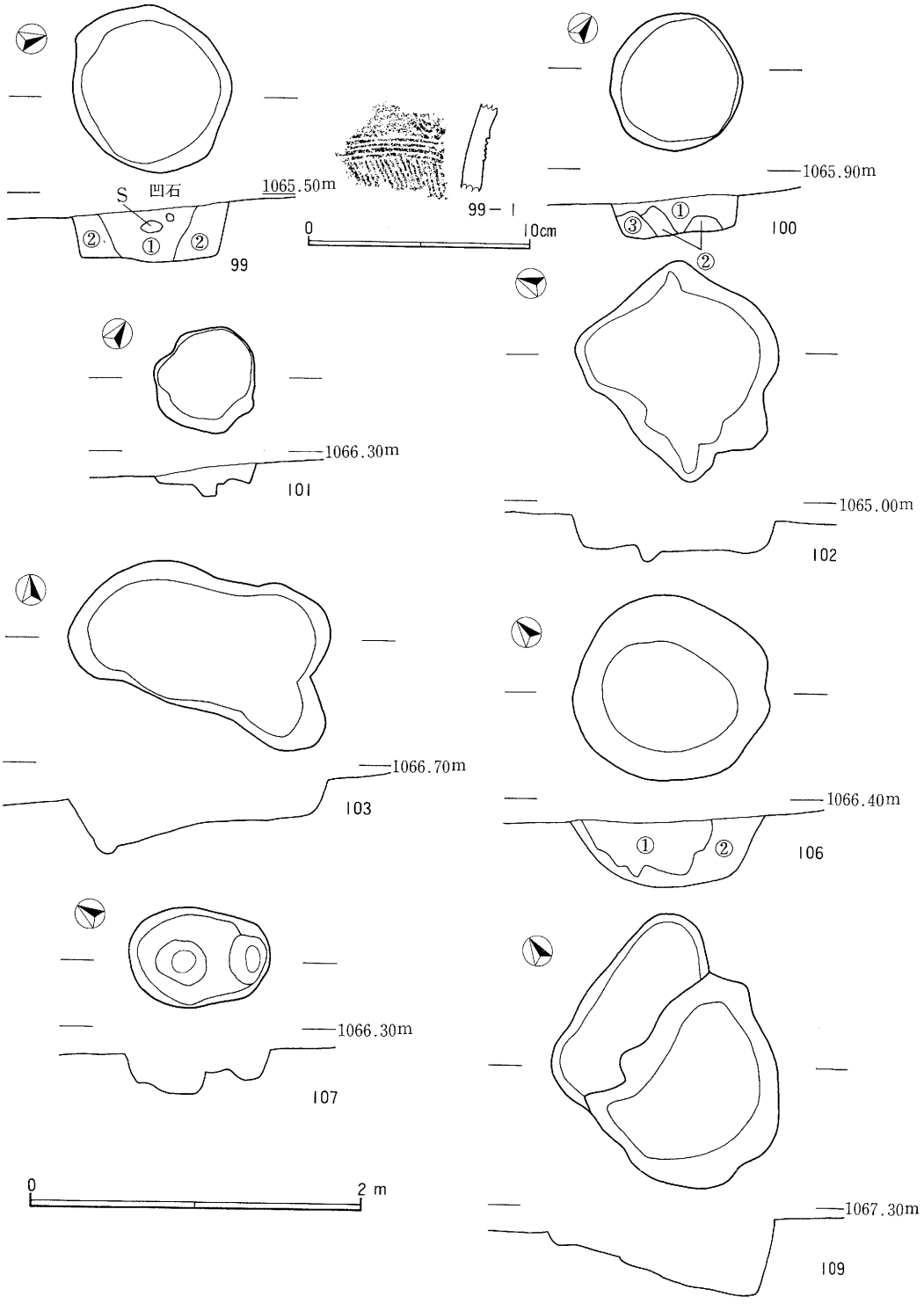
第50図　東地区土坑(3)（S＝1/40）（79－1・2、1/3）（79－3・4・5、1/4）



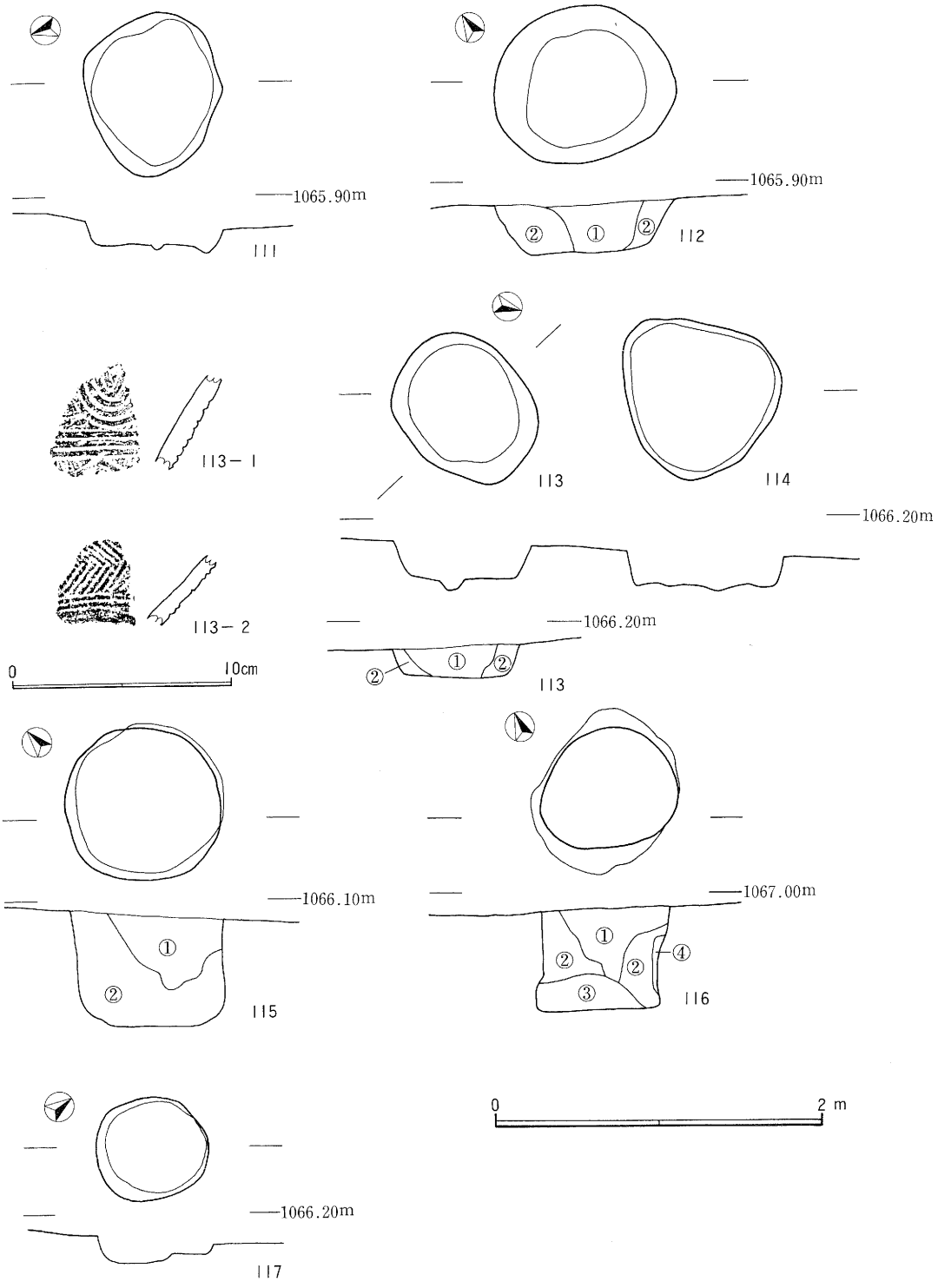
第51図　東地区土坑(4)（S＝1/40）（87－1、1/3）



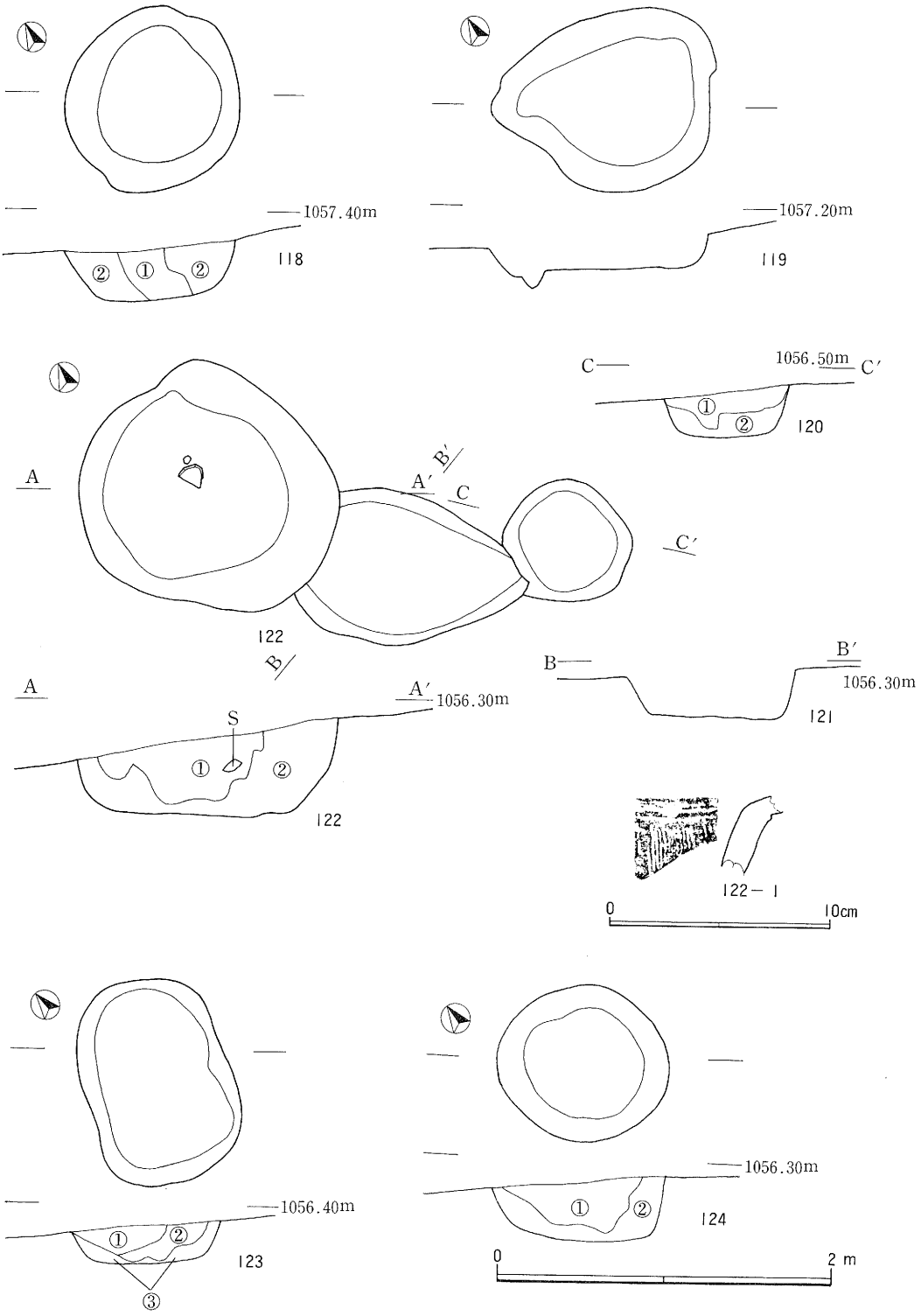
第52図　東地区土坑(5)（S＝1/40）（92－1、S＝1/40）



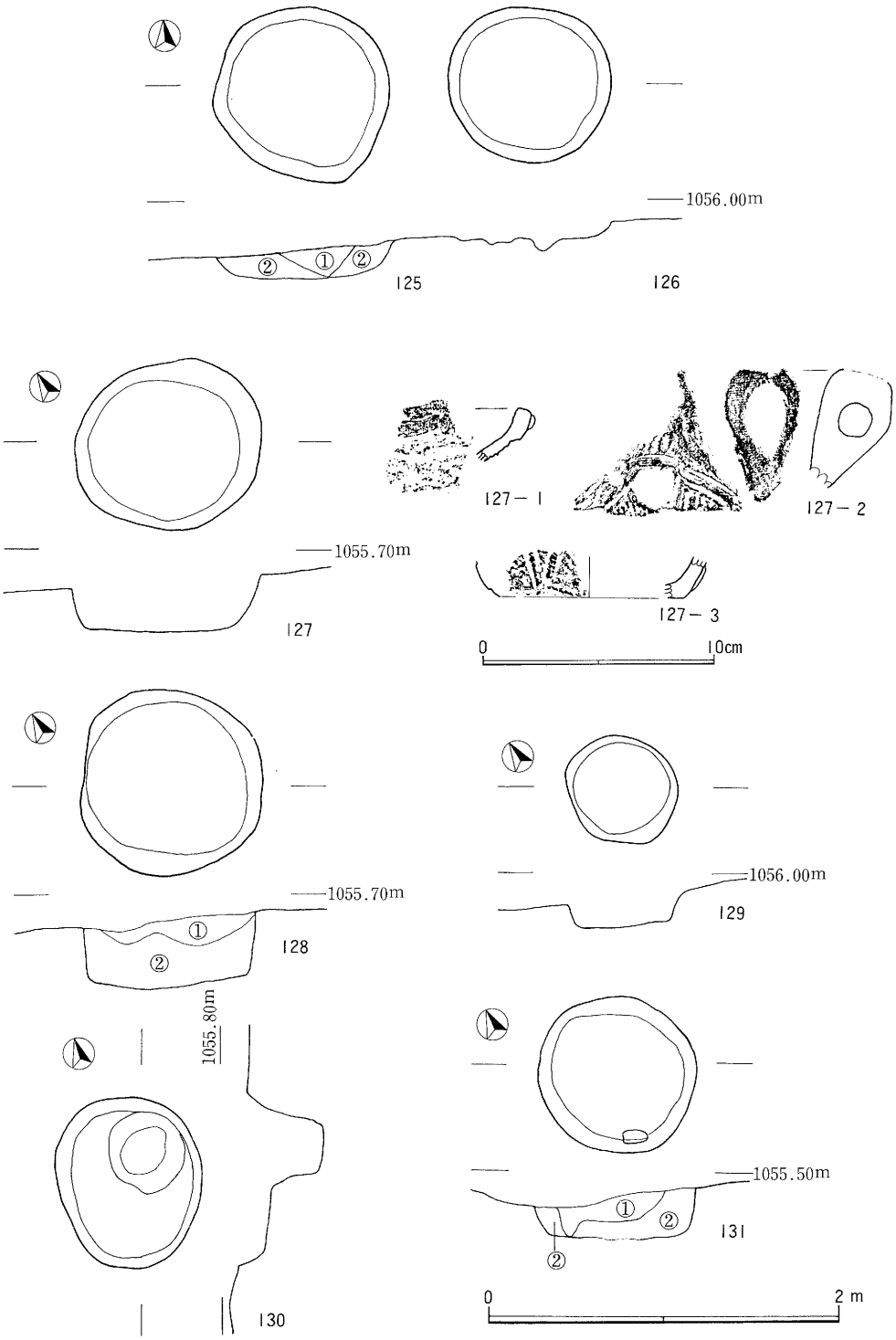
第53図　東地区土坑(6)（S＝1/40）（99－1、1/3）



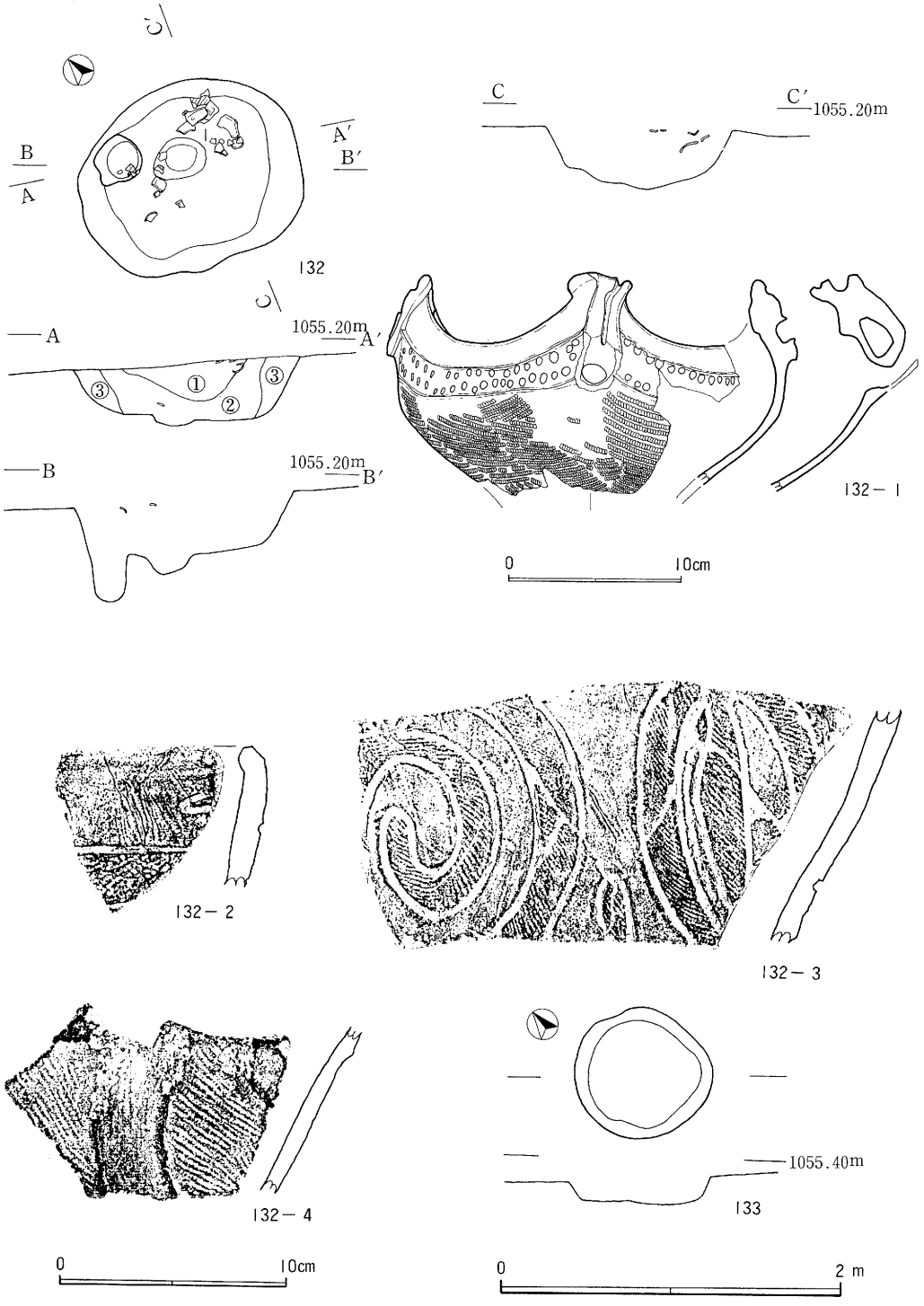
第54図　東地区土坑(7)（S＝1/40）（113－1・2、1/3）



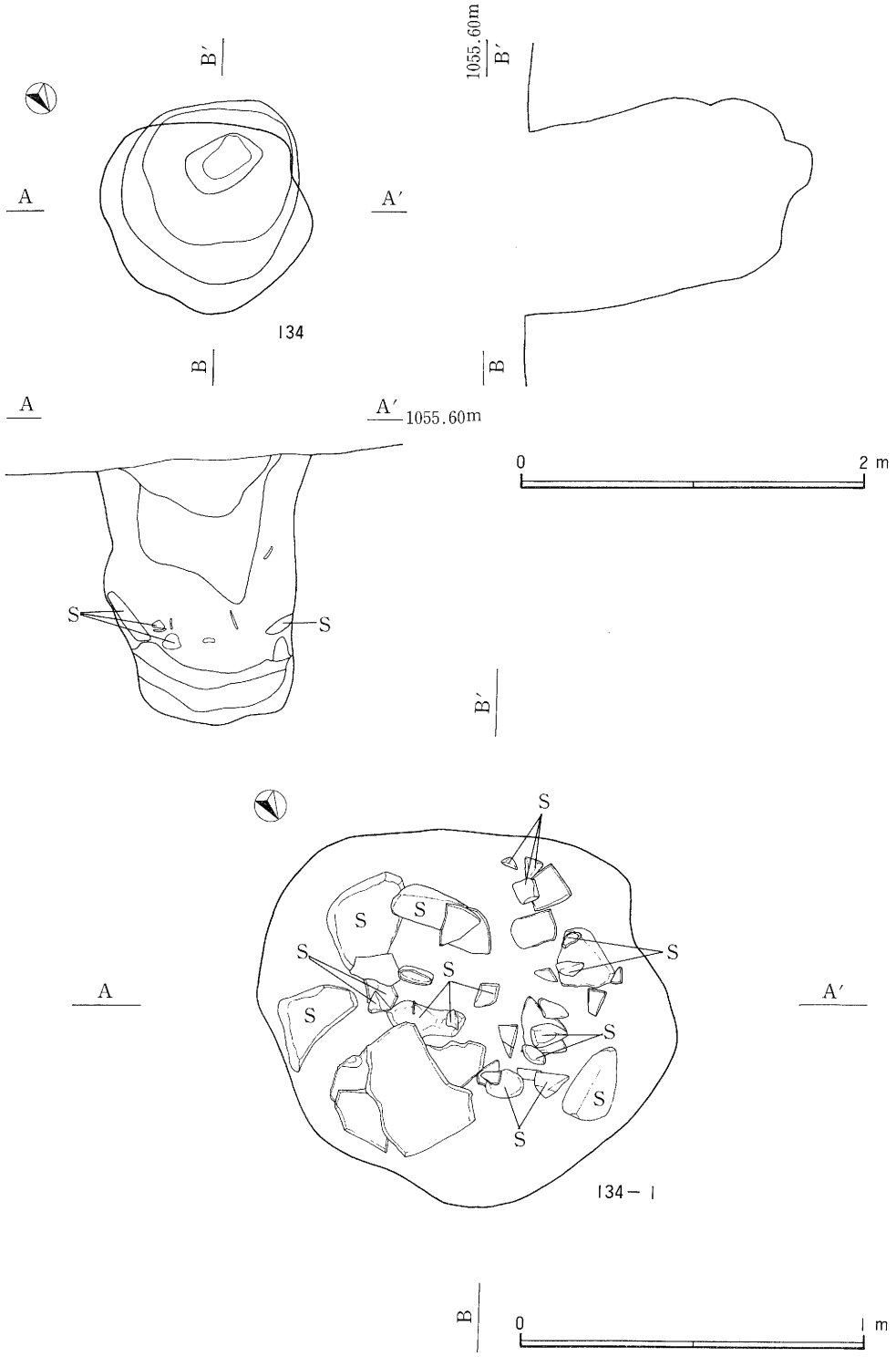
第55図　北西地区土坑(1)（S＝1/40）（122－1、S＝1/3）



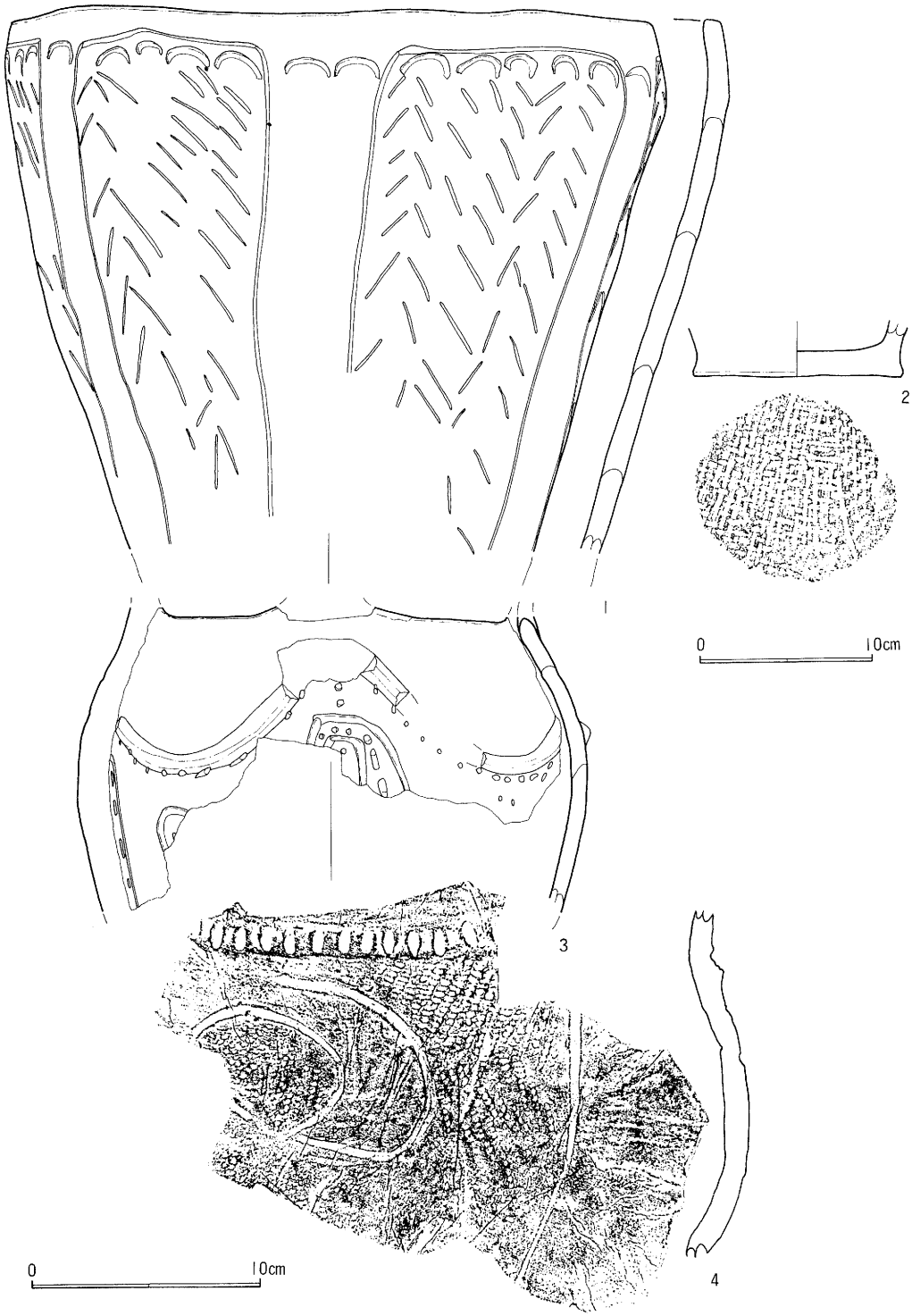
第56図　北西地区土坑(2)（S＝1/40）（127－1・2・3、S＝1/3）



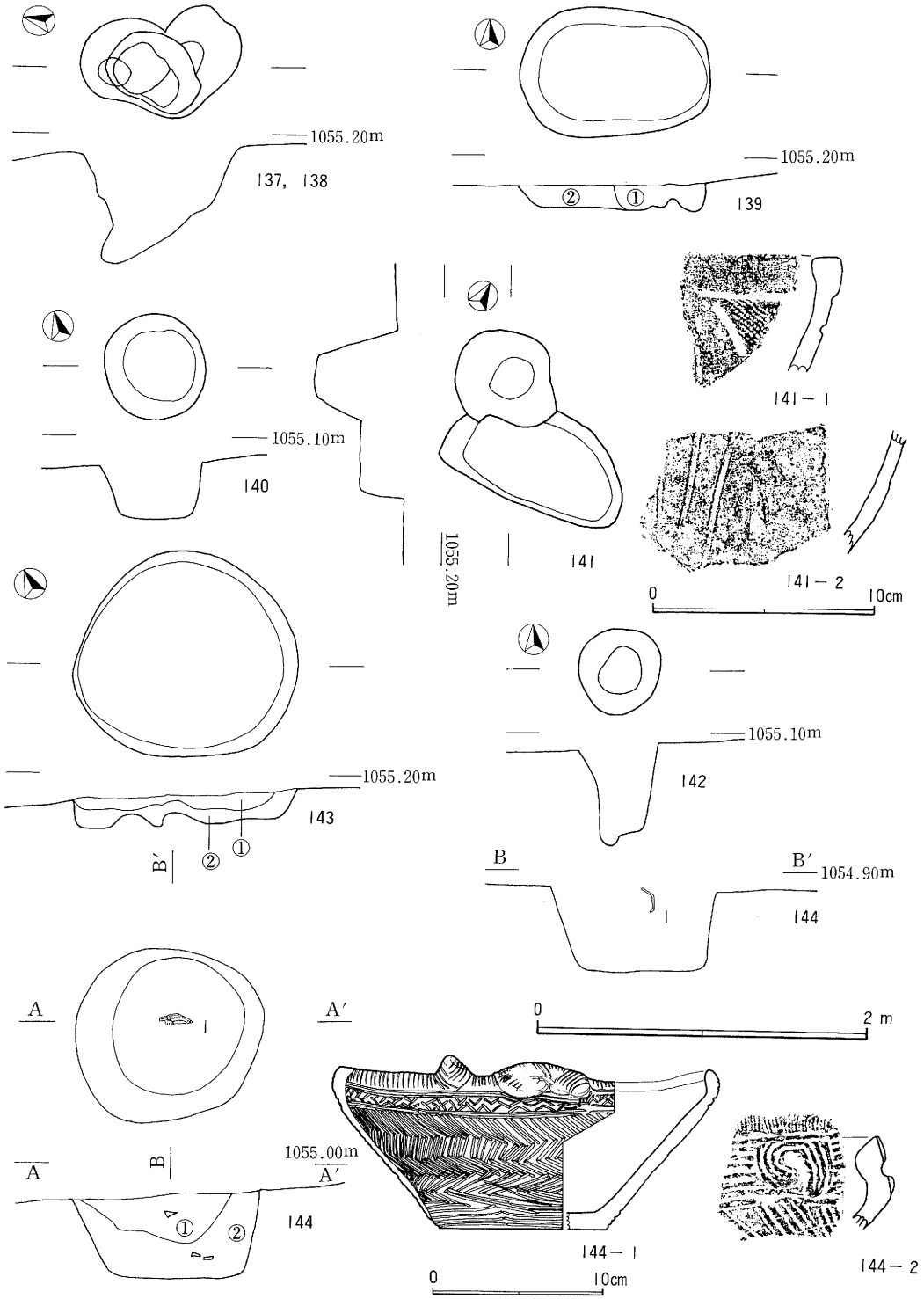
第57図　北西地区土坑(3)（S＝1/40）（132－1、S＝1/4）（132－2・3・4、S＝1/3）



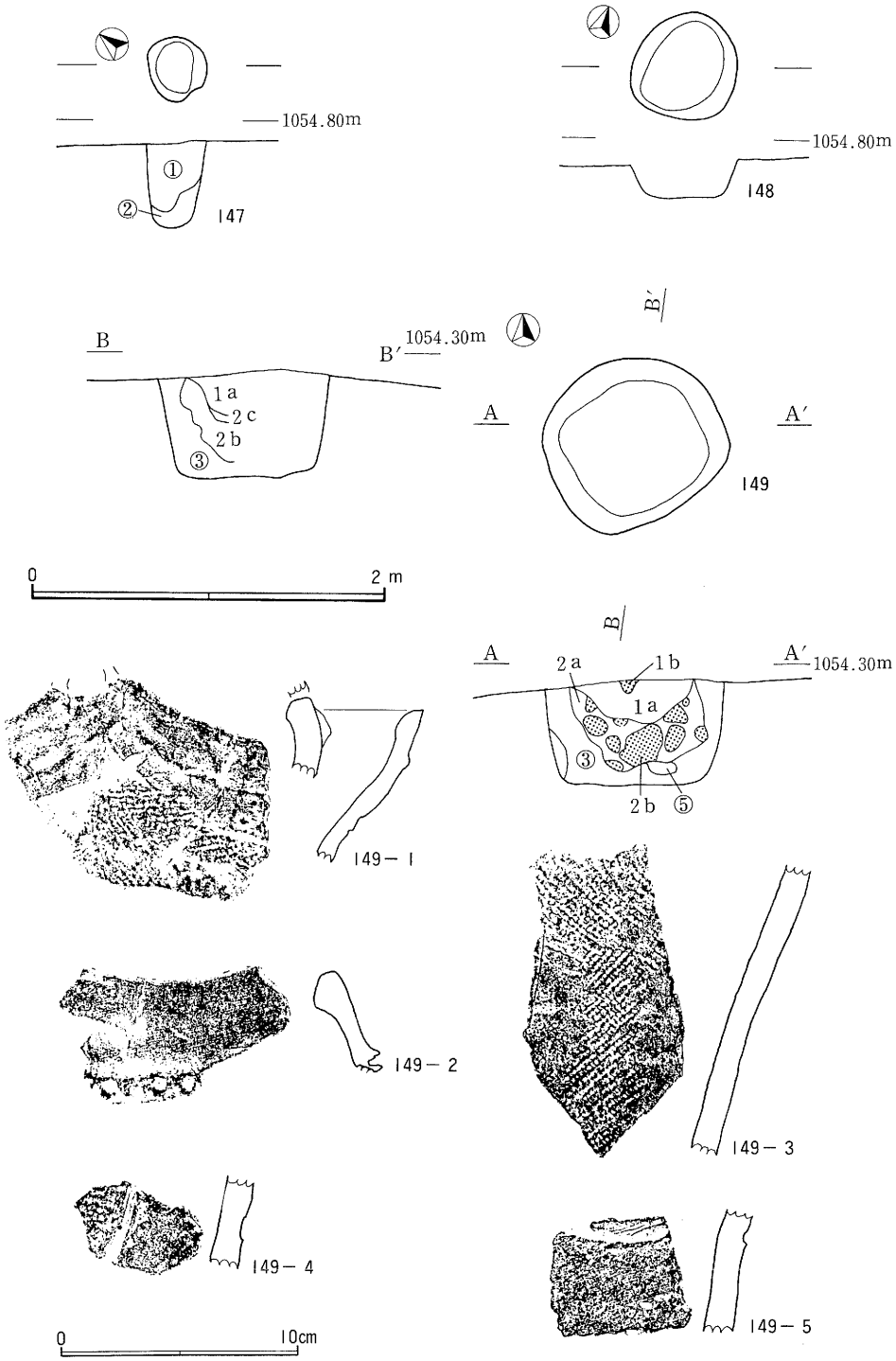
第58図　北西地区土坑(4)（S＝1/40）（134－1、遺物出土状態　S＝1/20）



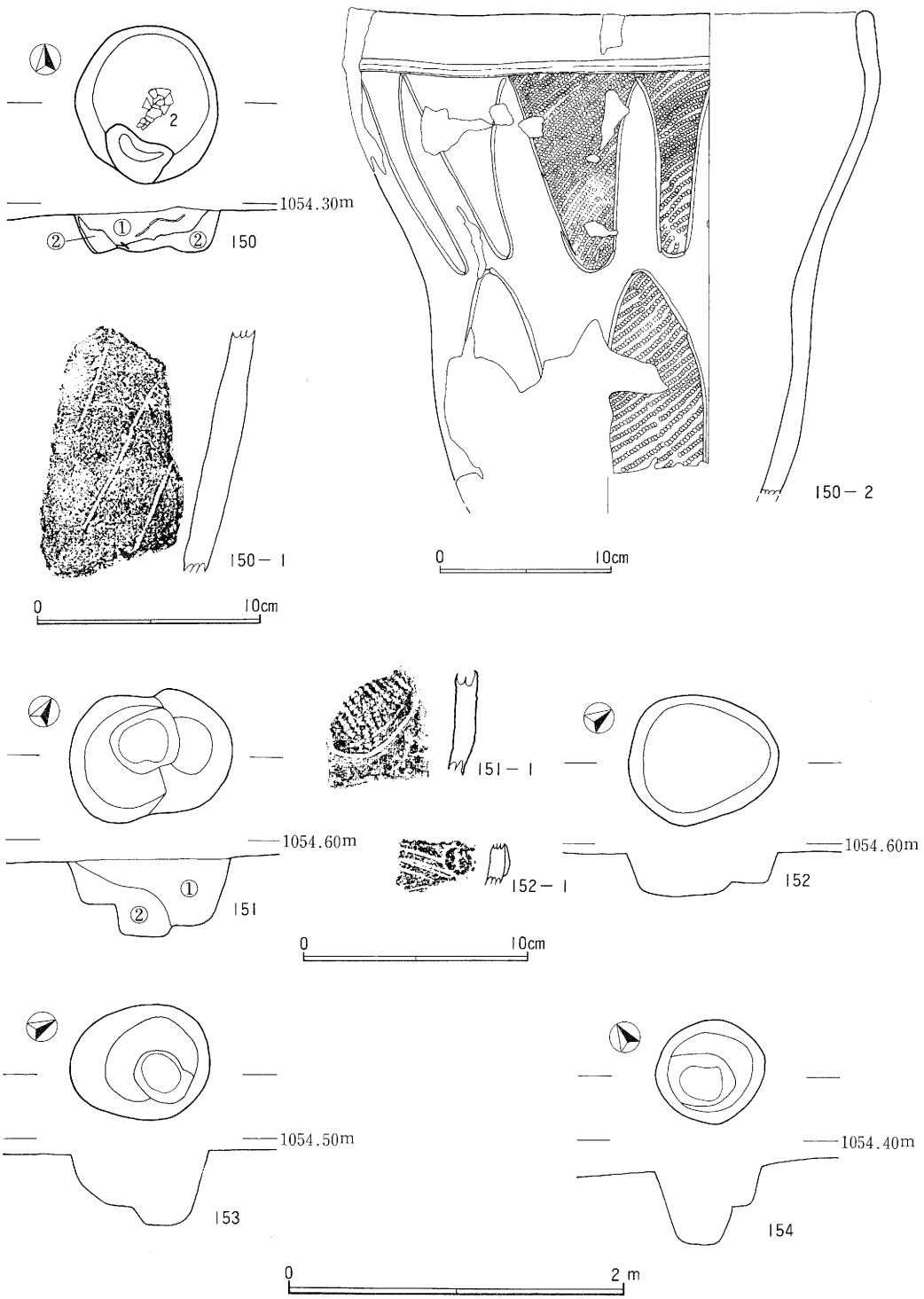
第59図　134号土坑出土遺物（1～3、S＝1/4　4、S＝1/3）



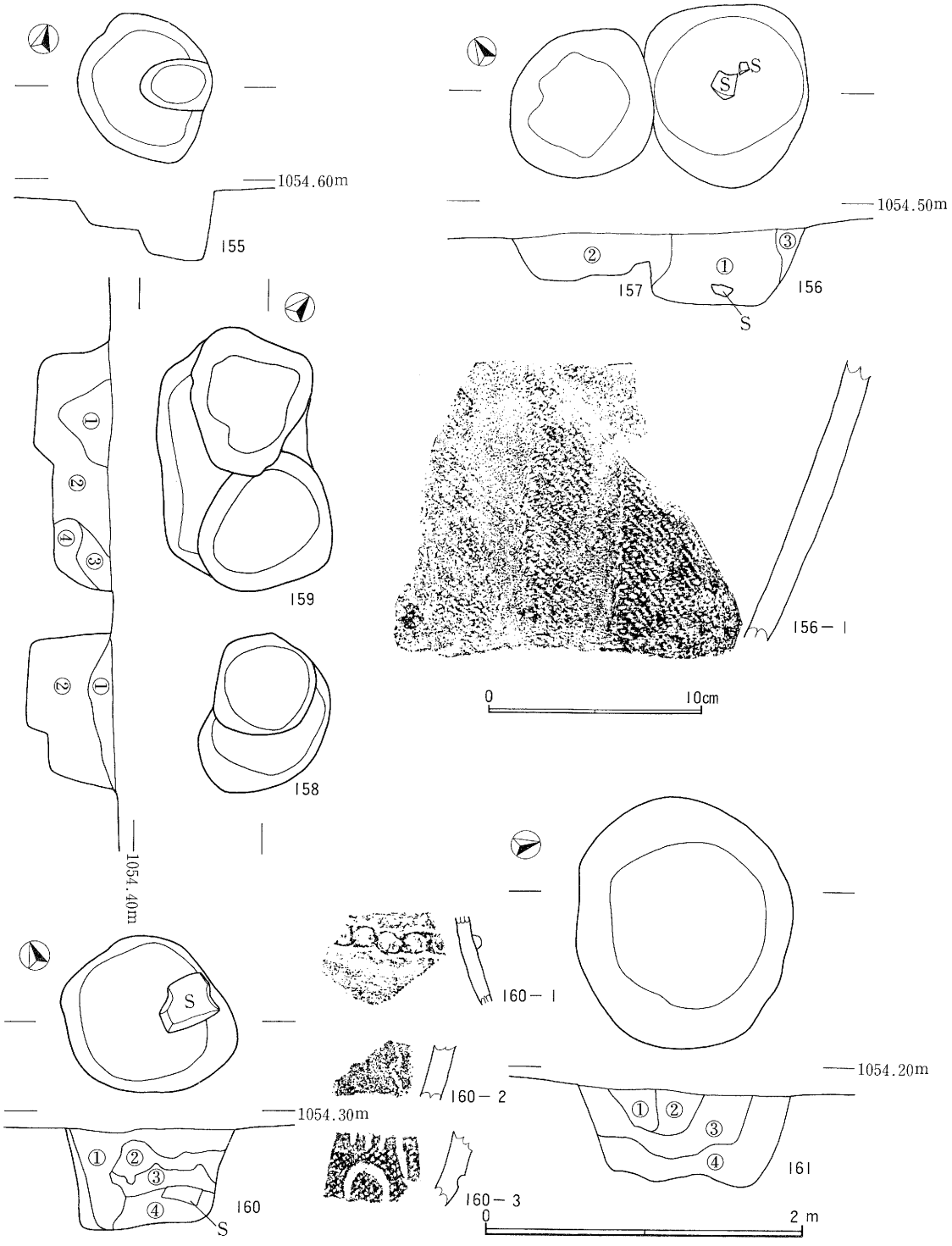
第60図　北西地区土坑(5)（S＝1/40）（144－1、S＝1/4）（141－1・2、144－2、S＝1/3）



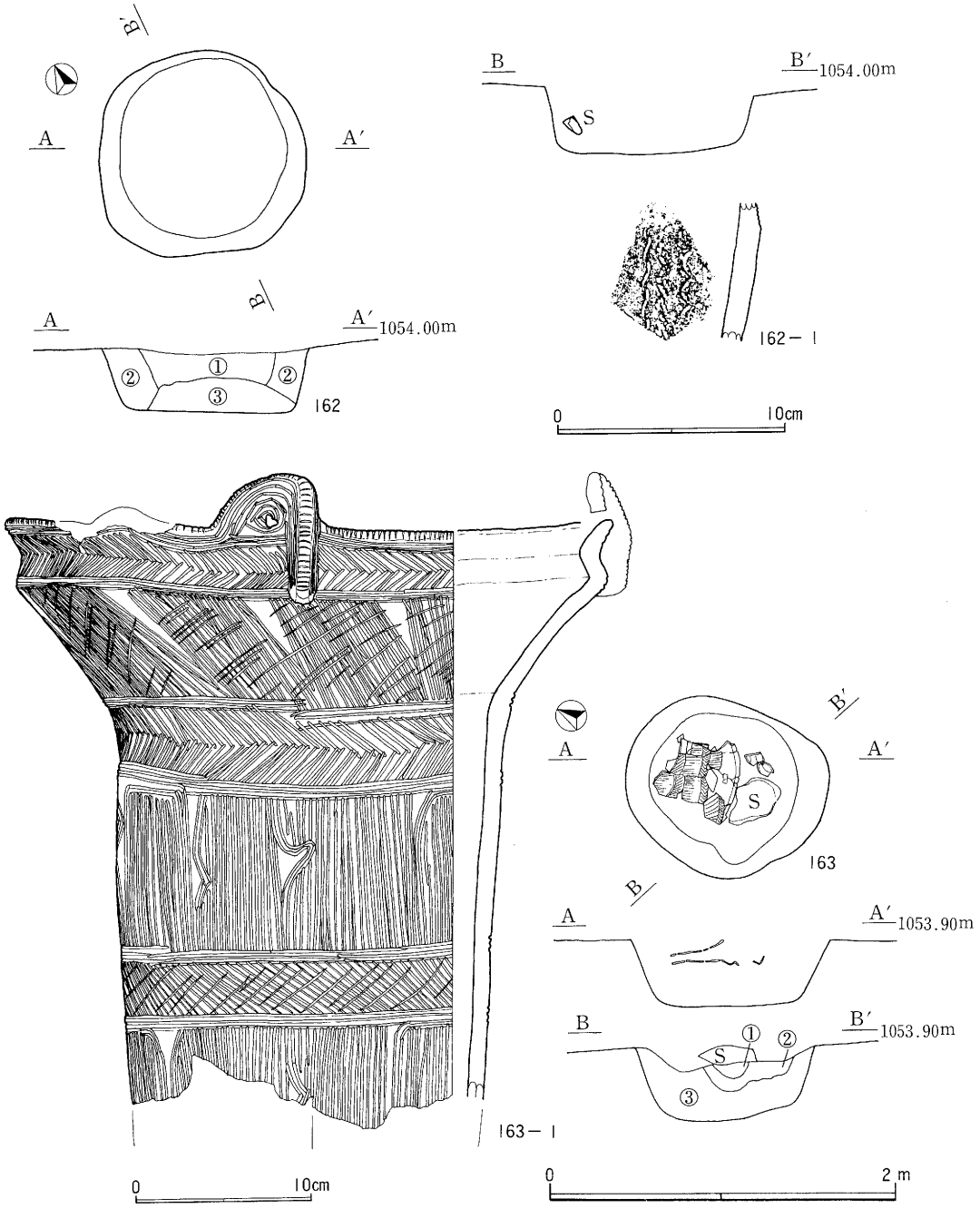
第61図　北西地区土坑(6)（S＝1/40）（149－1・2・3・4・5、S＝1/3）



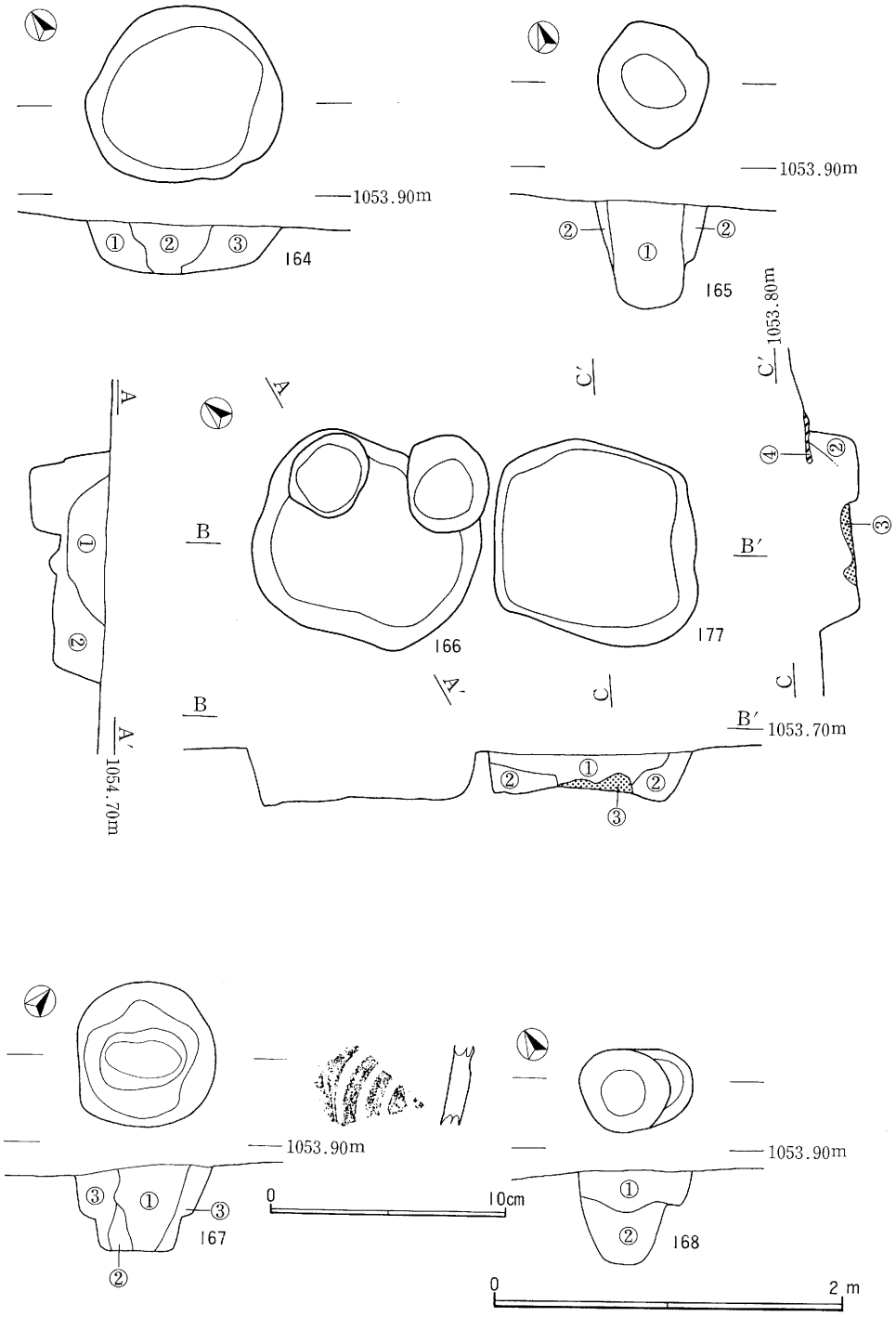
第62図　北西地区土坑(7)（S＝1/40）（150－1、151－1、152－1、S＝1/3）（150－2、S＝1/4）



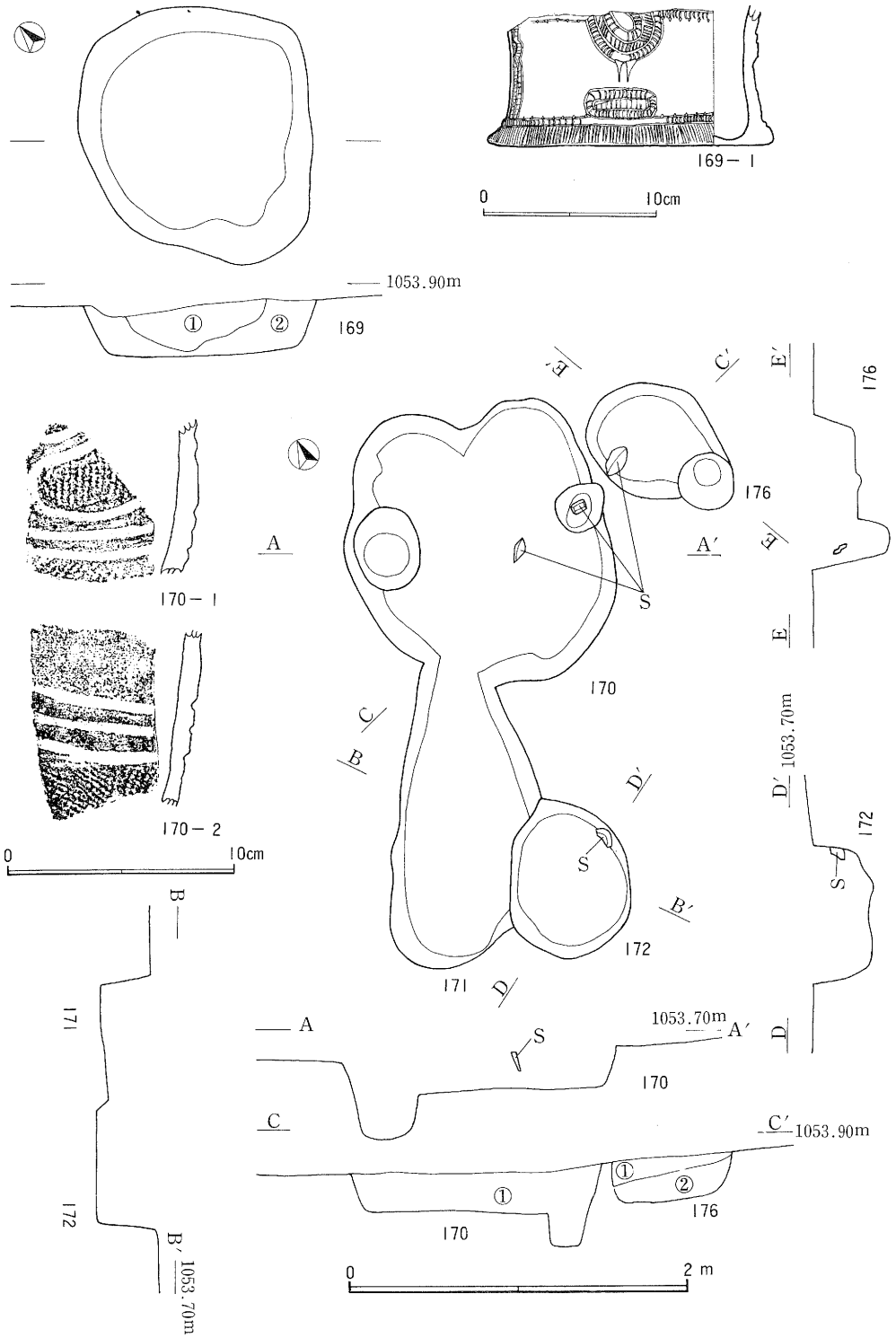
第63図　北西地区土坑(8)（S＝1/40）（156－1、160－1・2・3、S＝1/3）



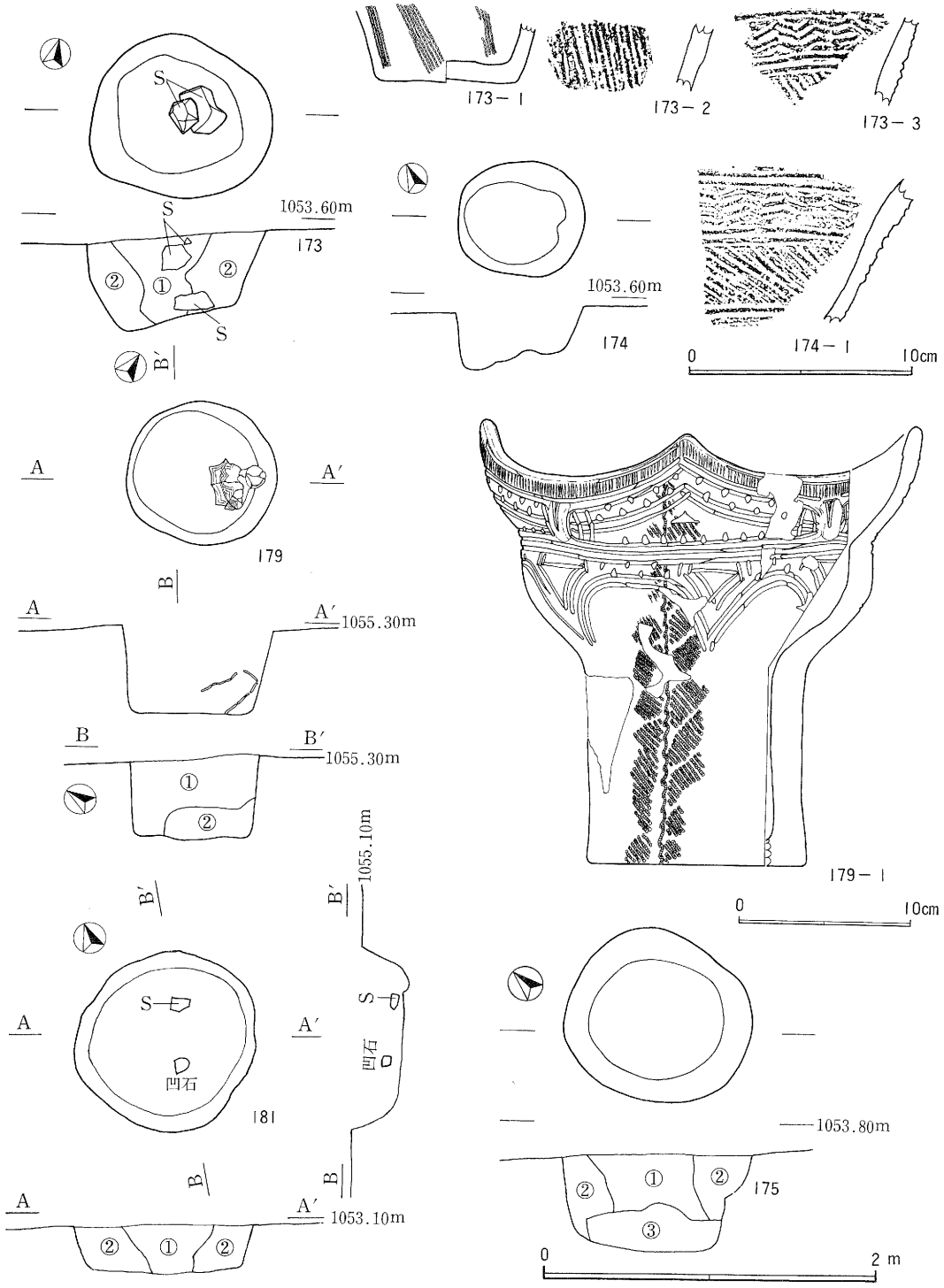
第64図　北西地区土坑(9)（S＝1/40）（162－1、S＝1/3）（163－1、S＝1/4）



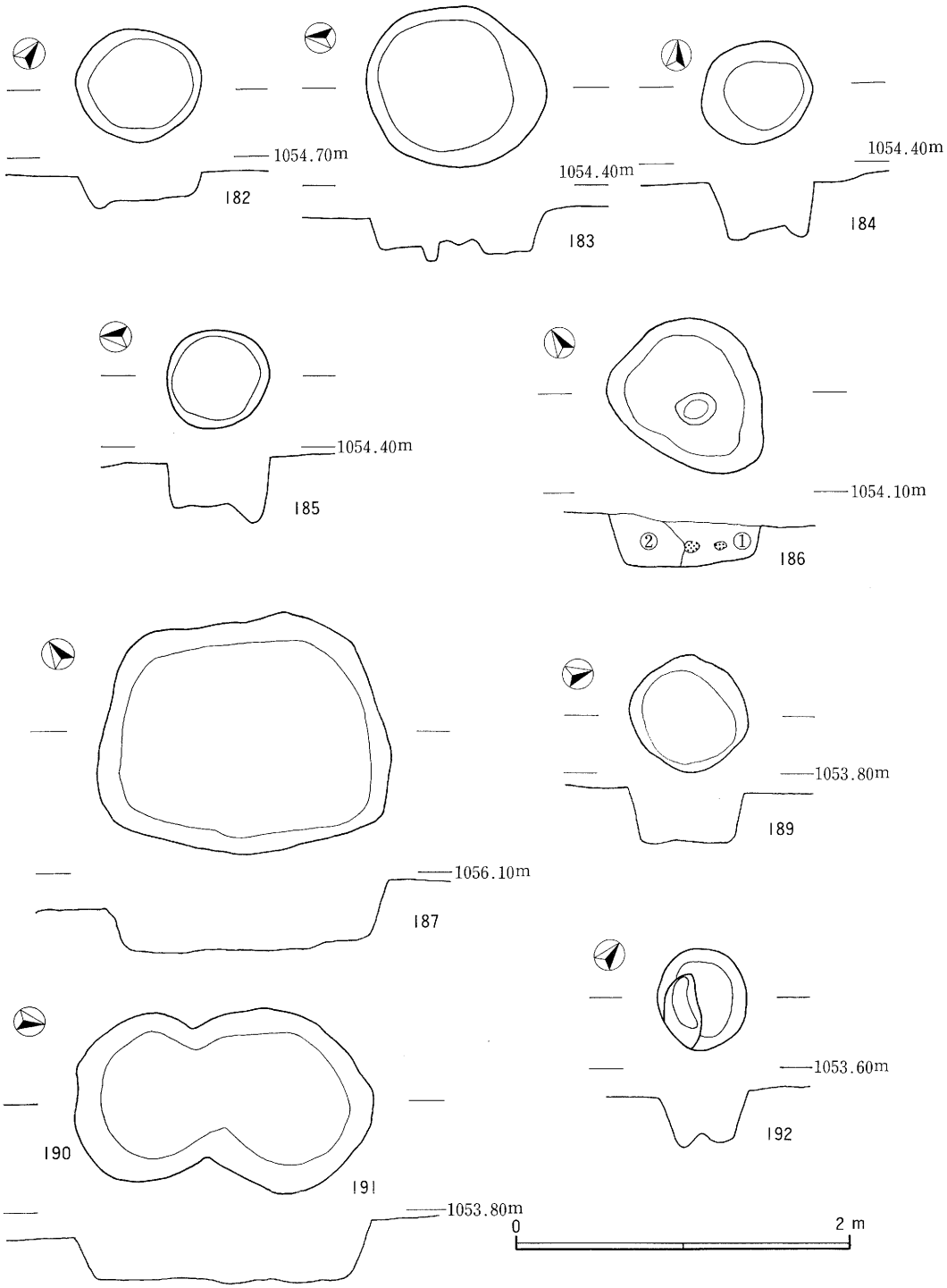
第65図　北西地区土坑⑽（S＝1/40）（167－1、S＝1/3）



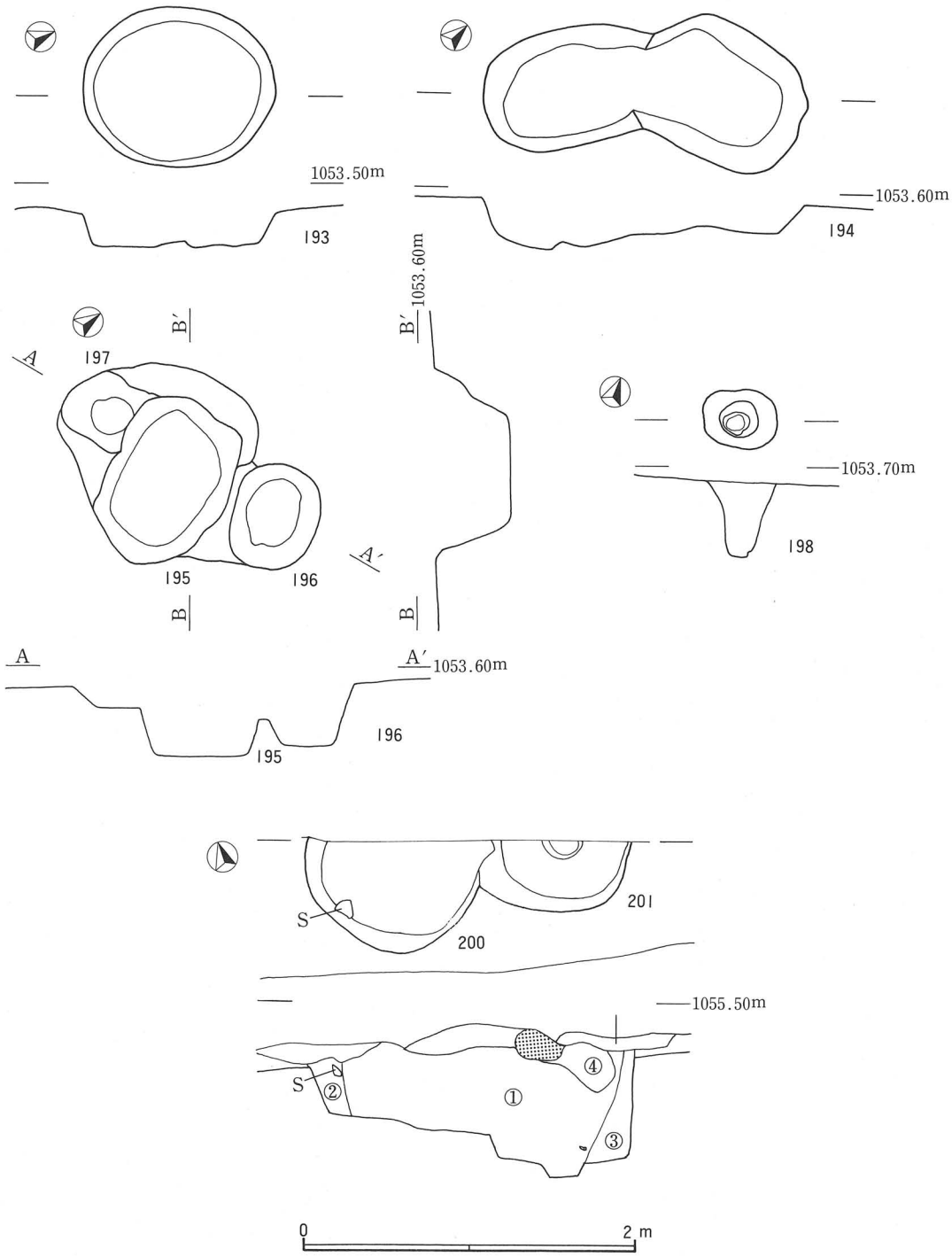
第66図　北西地区土坑(11)（S＝1/40）（169－1、S＝1/4）（170－1・2、S＝1/3）



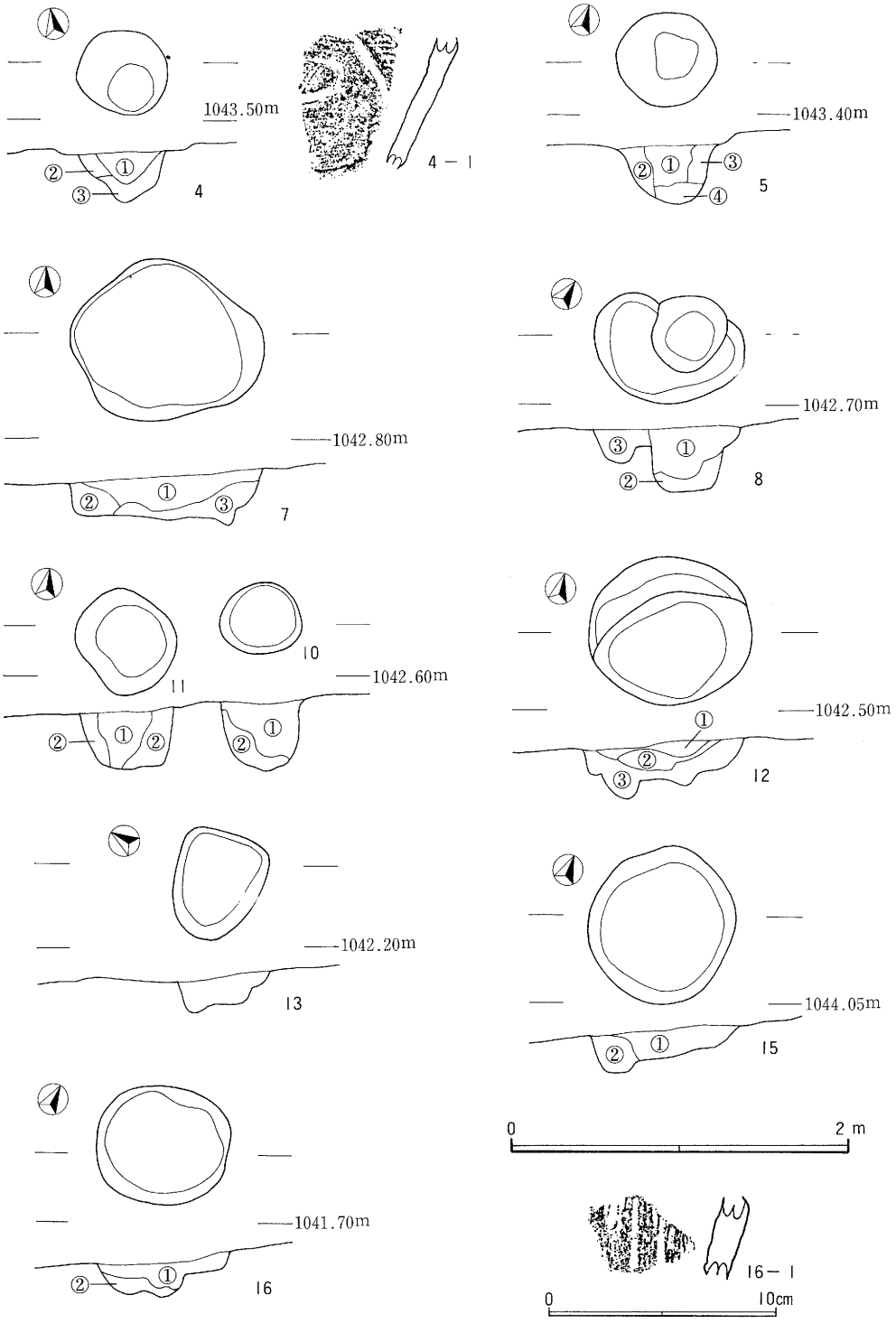
第67図　北西地区土坑(12)（S＝1/40）（173－1、S＝1/2）（173－2・3、174－1、S＝1/3）（179－1、S＝1/4）



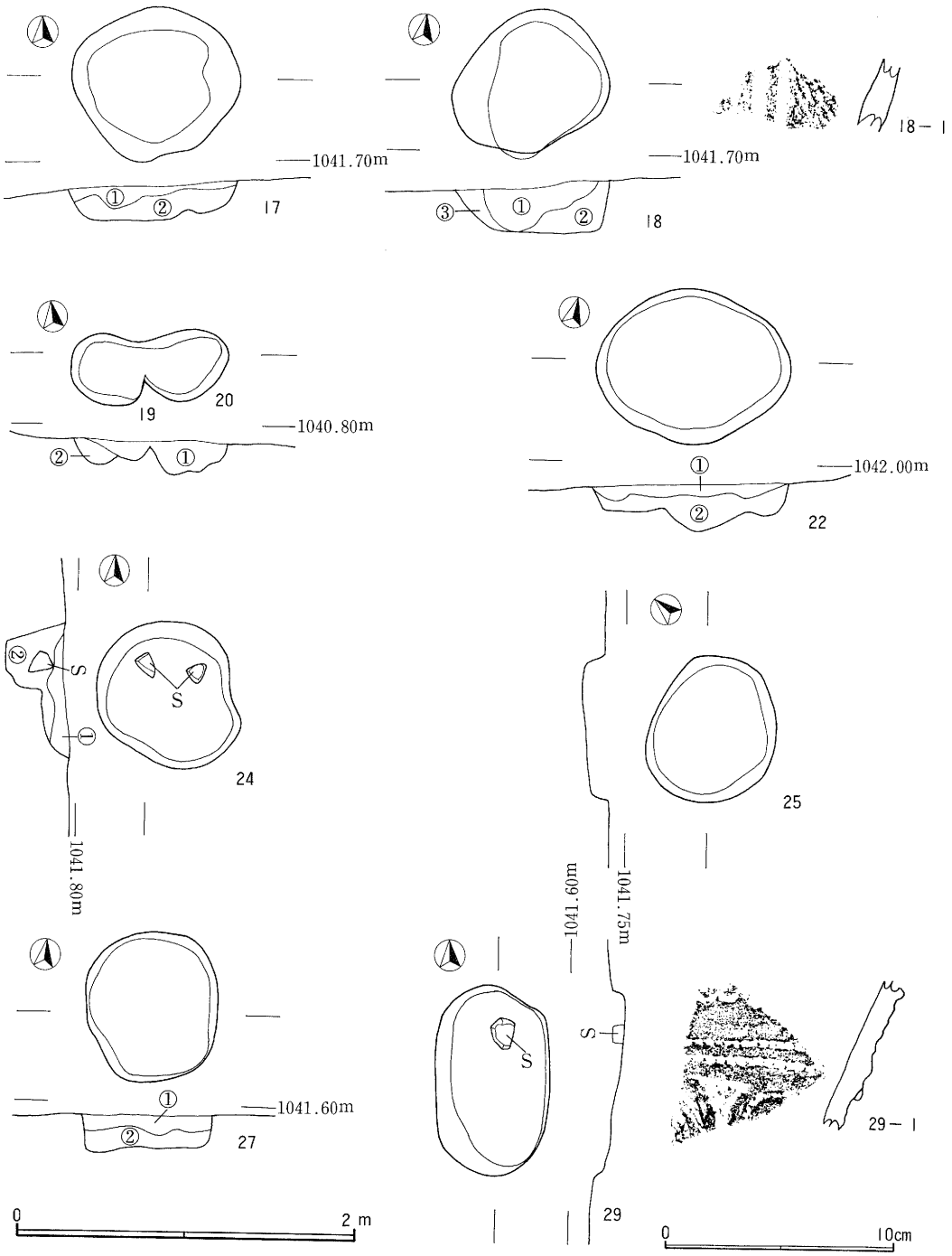
第68図　北西地区土坑(13)（S＝1/40）



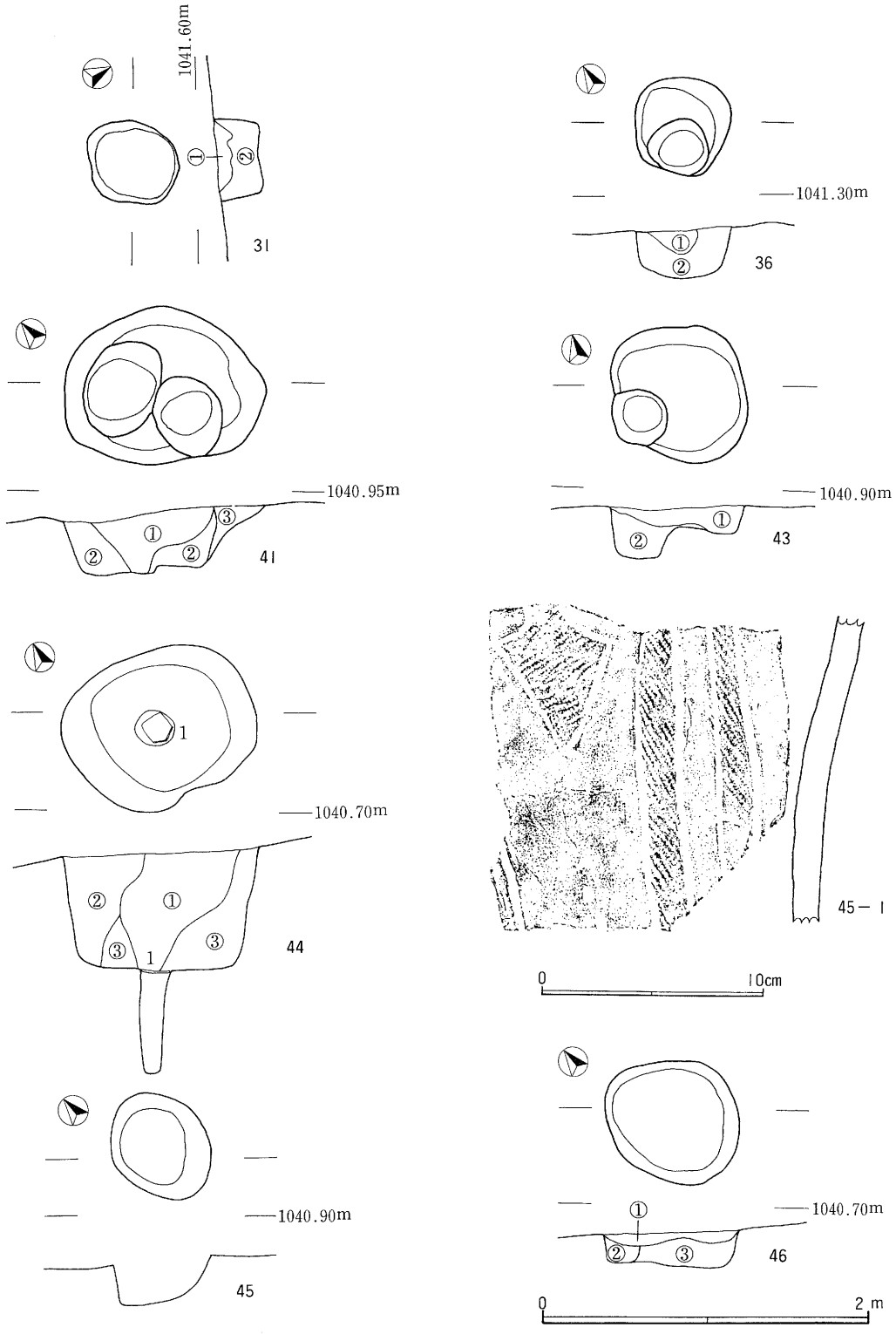
第69図　北西地区土坑⑭（S＝1/40）



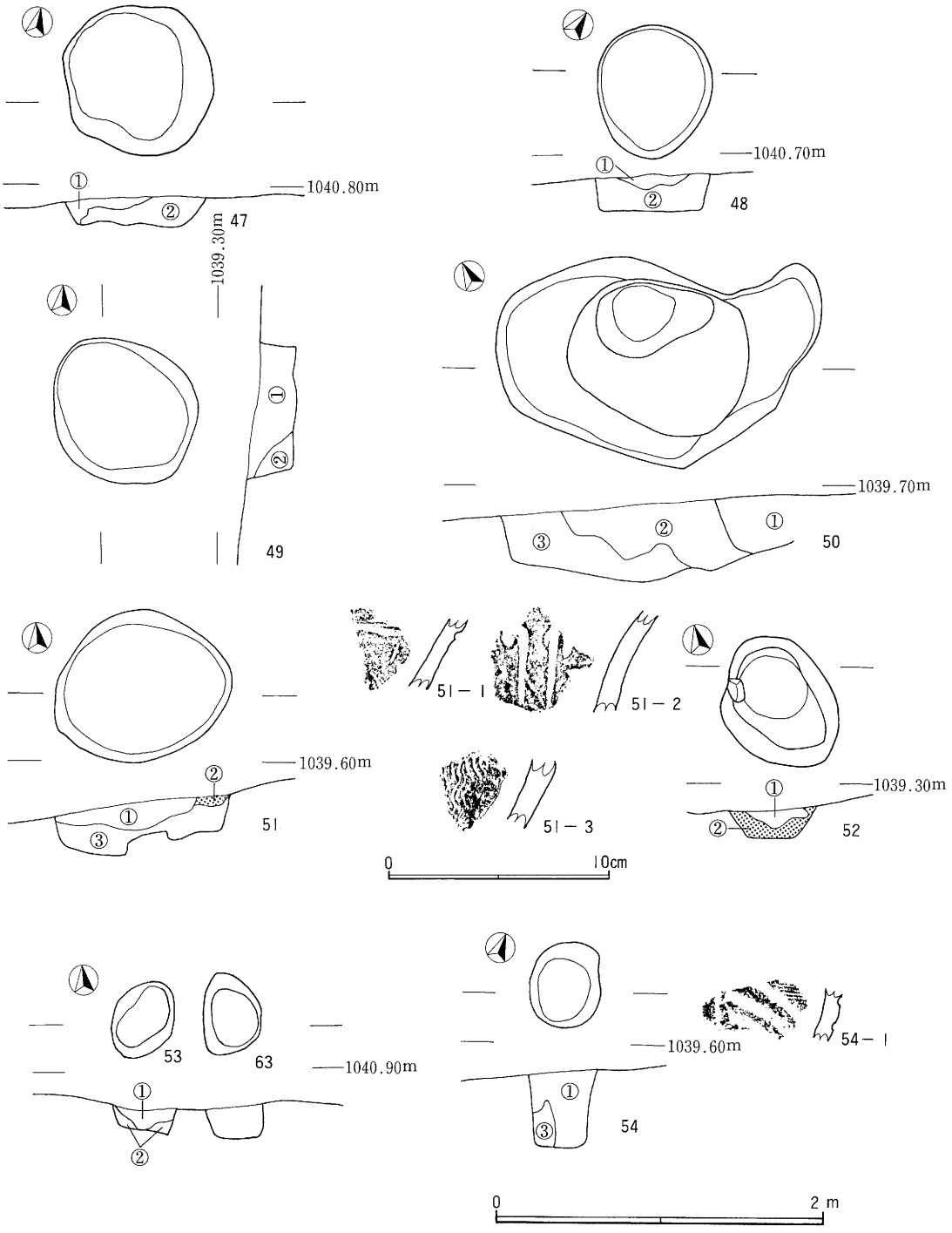
第70図　II次調査区土坑(1)（S＝1/40）（4－1・16－1、S＝1/3）



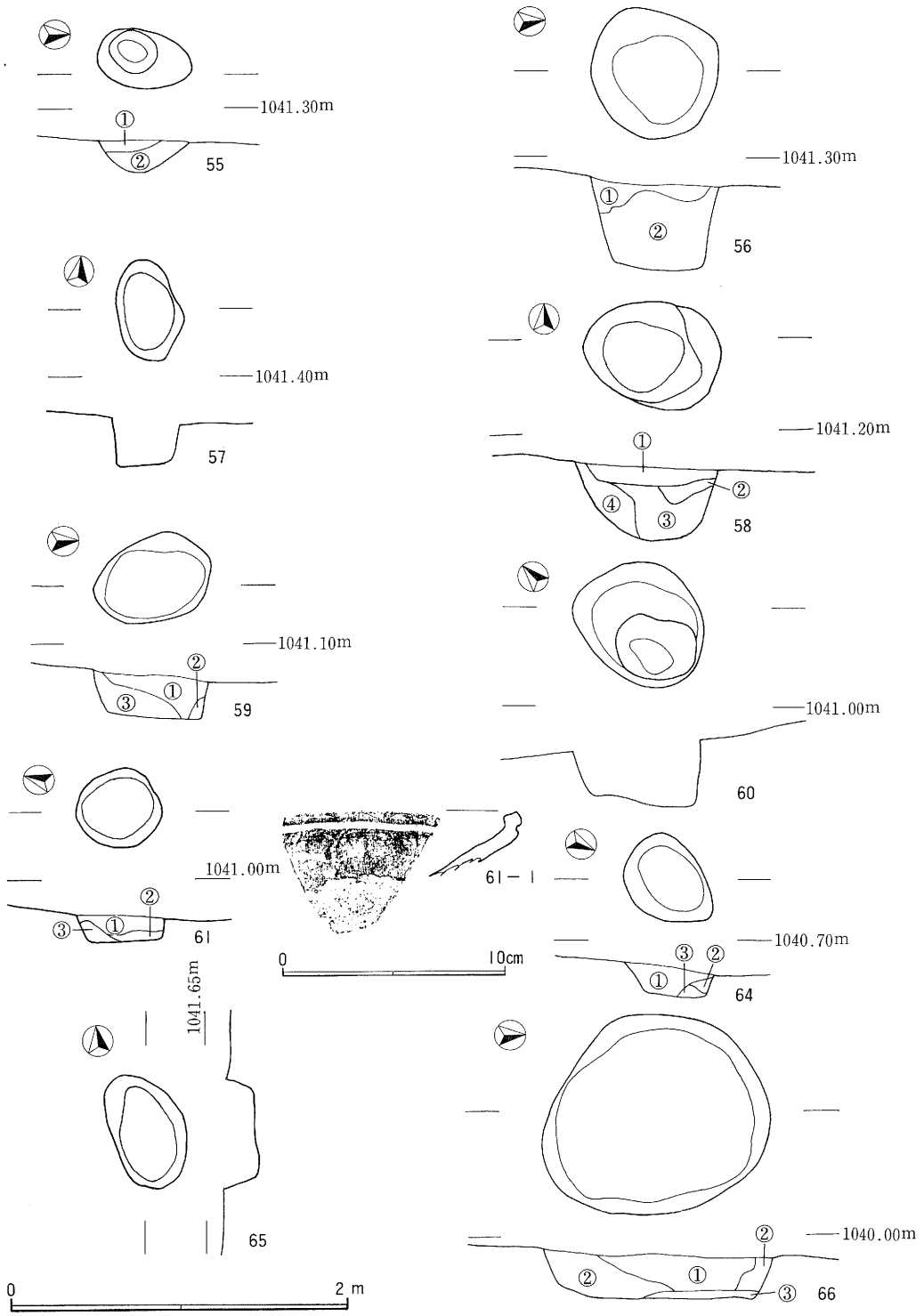
第71図　II次調査区土坑(2)（S＝1/40）（18－1・29－1、S＝1/3）



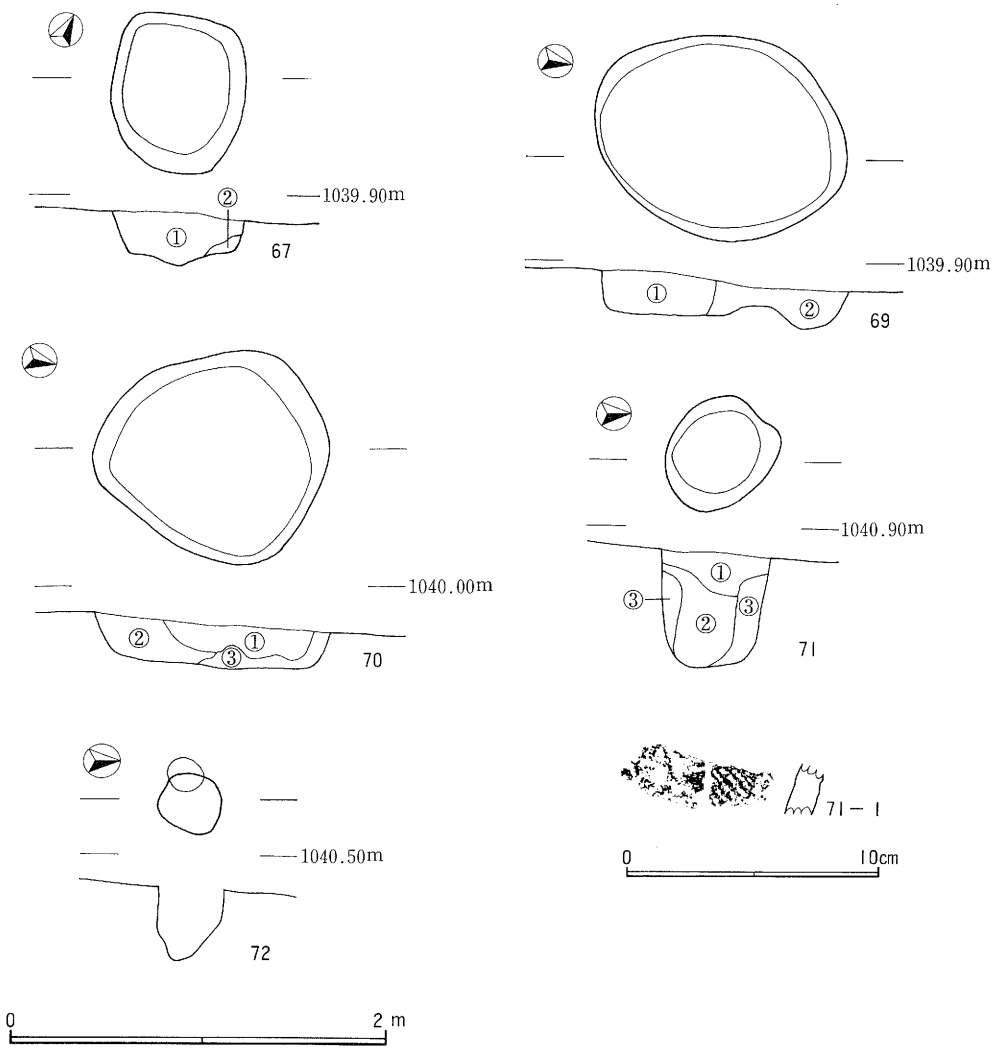
第72図　II次調査区土坑(3)（S＝1/40）（45－1、S＝1/3）



第73図　II次調査区土坑(4)（S＝1/40）（51－1～3・54－1、S＝1/3）



第74図　II次調査区土坑(5)（S＝1/40）（61－1、1/3）



第75図　II次調査区土坑(6)（S＝1/40）（71－1、S＝1/3）

第２節　平安時代の遺構と遺物

１．第14号住居址住居址（第76・77図、図版８）

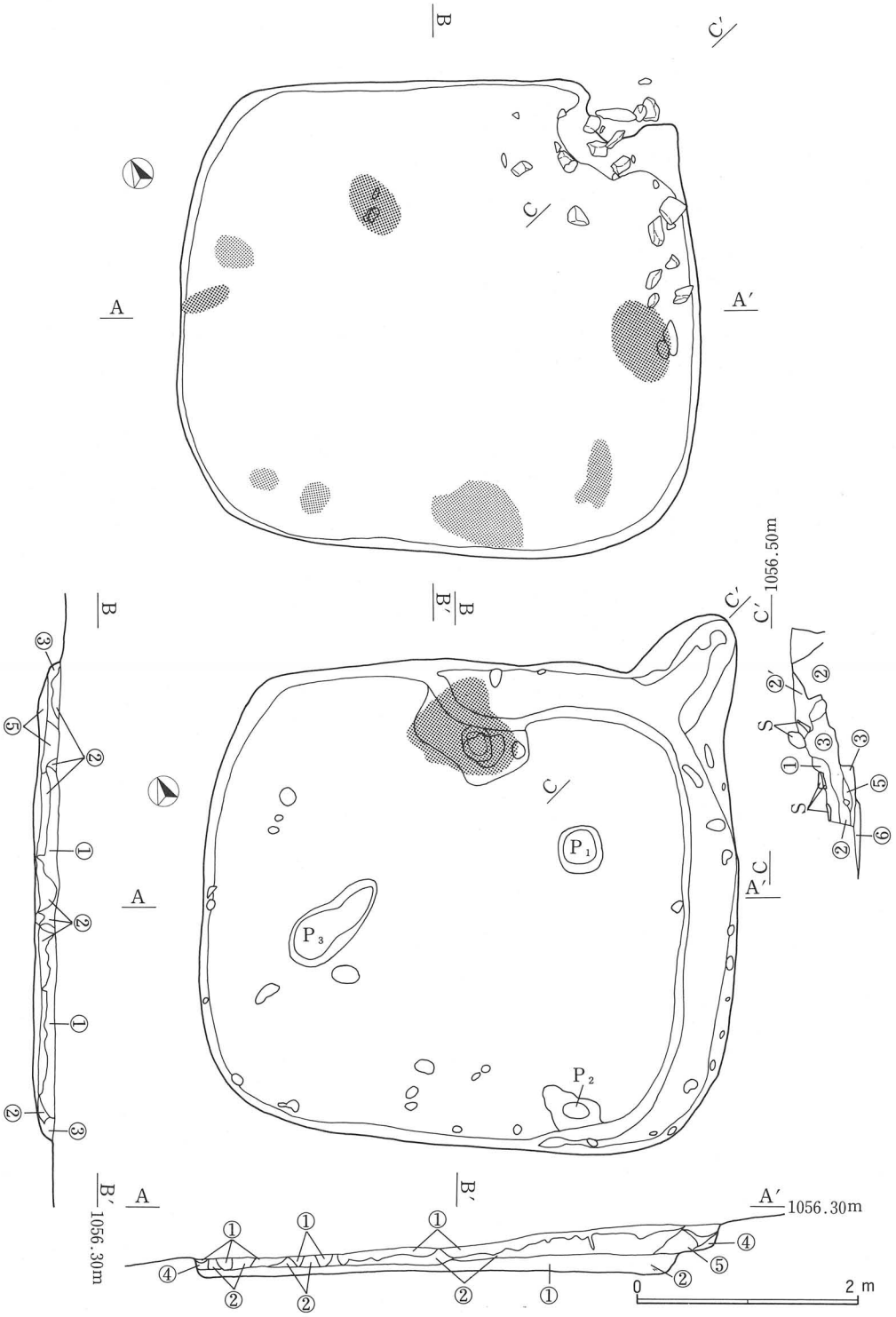
調査区西よりの西向き緩斜面に独立して位置する隅丸方形の住居址。主軸はN35°Eを向く、長軸4.82m×4.34mで西方向の大部分は耕作による攪乱で壁の立ち上がり部分で高さ８cmが検出できただけ、一方東の竈方向は開墾時から道路敷下になっており大きな攪乱は免れて竈周辺には焼土粒が散る若干締まりがある竈のセクション②′層と同じ層が残り、東南方向の壁高も60cm確認できた。

床面は、焼土粒が目立ち始めた所で暗褐色の固く締った張り床②下層を検出し、張り床上の②上層とは厚さ２～３cmの張り床を挟むだけで特に差異は認められない。遺物包含層は②上層で土師器、灰釉陶器片が出土している。ほぼ完形の土師器坏２枚は中央北よりに内側を下にして重なる形で出土。灰釉陶器皿は南東の焼土と礫の間から出土した。竈南西側の礫は割石がほとんどで熱を受けているため竈を破却した際、遺棄したものと思われる。床面での柱穴は明瞭には検出できなかったが、P_1上の張り床面に締まりはないのでこれが主柱穴であろう。なお壁面の小孔はほとんどが住居址中央へ向って斜めに掘られており径10～15cm深さ９～26cmで上屋に関係する遺構と思われる。

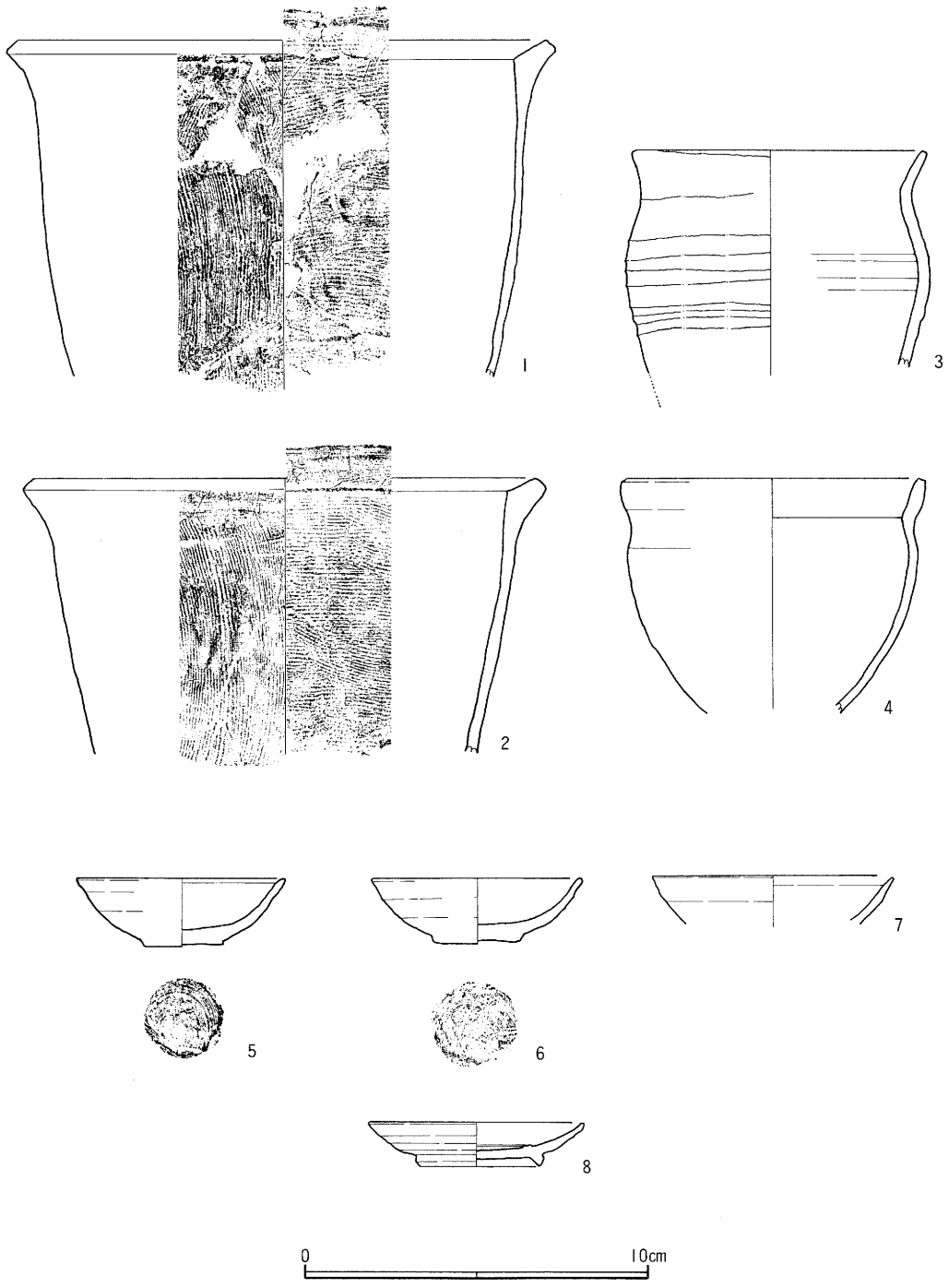
張り床面の竈は東隅にある石組み竈で煙道も検出できた。竈構築用の粘土は竈の掘り方南側に薄く残っていただけだった。竈内には破砕された甕（第77図２）の一部が入っていた。張り床北西側三分の一程度は花卉の根が床面まで届く漆黒の耕作土層（①層）で粘性はなく粒子は細かい。この土は乾燥すると暗灰色になる。④層は遺構が埋まる際の崩落土で黄褐色の締まりのない層、⑤層は焼土、網点部分は焼土粒子を検出した部分を含む。

張り床下の床面は一回り小さく拡張は北東から南にかけ約三分の一の範囲にわたり行なわれている。北東側壁のほぼ中央に偏平な河川礫があり下によく締まった焼土ブロックがハードロームまで続いていた。これが建て替え前の竈であろう。床面は南東方向に向って傾斜している。

遺物は張り床面よりすべて上層で器形復元できたものは土師器の甕が４、坏が３、灰釉陶器皿１個体である。甕は（第77図１・２、図版８）がヘラ磨き整形痕が外側が孤状に垂下、口縁上部と内側は横に行なわれている。第77図３はロクロ整形だがゆがみが大きい。第77図４は外側が指による押圧、内側はヘラ削りで仕上げも粗い。いずれも胴下部を欠損。坏は第77図５・６が完形で第77図７は内面が黒色の内黒土器。灰釉陶器皿（第77図８）はロクロ整形で浸釉が施されている。その他には器形復元できない甕が１個体、坏が土師器で10個体以上、内黒土器坏２個体、灰釉陶器坏が２個体分確認できた。（百瀬）



第76図　第14号住居址、上は張り床面（S＝1/60）



第77図　第14号住居址出土遺物（S＝1/4）

第IV章　ま　と　め

鴨田遺跡には、縄文時代前期末、中期初頭に始まり、中期前半から後期前半の遺構が残されていた。鴨田遺跡の広大な範囲の中で各時期毎に、遺構の組合せ、分布が変化している。

縄文時代前期末、中期初頭の遺構は土坑のみである。土坑には大きく分けて３つの類型があるが、中期初頭の遺物を出土する土坑はＩ類が多いこと、III類土坑は植物の根等による攪乱を誤認したものが多く含まれると考えられることから、ここではＩ類土坑を対象とする。遺物が出土した中期初頭の土坑は分布範囲が広く、西地区、東地区、北西地区に渡っている。西地区においては、Ｉ類の土坑が群を成して検出された。土坑群は、２ケ所にみられる。西地区Ｉ35付近の第28号から第34号土坑からなる１群と、H36付近の第53号・第55号から第60号土坑である。以上の土坑を除くと、西地区の土坑は第10号、第12号土坑がＩ類、第19号土坑がII類であり、他はIII類土坑である。これらの内、時期が判明したのは第12号土坑、第29号土坑の２基である。土坑の密集度、および西地区内からは平安時代の住居址以外には他の時代、時期の遺構が検出されていないことを考えると、２ケ所の土坑群は、いずれも中期初頭に作られたものであると考えるほうが蓋然性が高い。

東地区では、調査区中央の谷を囲むように土坑が検出されている。東地区で中期初頭の土器が出土した土坑は、調査区南西Ｉ40の第71号土坑、第73号土坑、調査区北西Ｇ40の第79号土坑、第80号土坑、第87号土坑、Ｇ41の第92号土坑、第99号土坑、調査区南東Ｉ41の第113号土坑である。それぞれの土坑の周辺には、Ｉ類土坑が検出されている。第71号、第73号土坑の周辺では第62号、第64号、第65号土坑、第79号、第80号土坑の周辺には第77号、第78号土坑、第92号、第99号土坑の周辺には第87号、第95号土坑、第113号土坑の周辺には第111号から第116号土坑がある。この他、１基のみであるが、調査区北東にＩ類土坑である第98号土坑が検出されている。東地区では中期末に属するであろう土器を出土した第69号土坑があり、中期末の土坑が含まれていることも考えられるが、西地区土坑群の存在を考慮すれば、中期初頭の土坑群を想定することは可能であると思われる。

北西地区では、中期初頭の土坑群と中期中葉の土坑、中期末から後期初頭の遺構群が検出されており遺物の出土がない土坑の時期を推定するのは難しい。中期初頭の遺物を出土した土坑は、第122号土坑、第127号土坑、第144号土坑、第152号土坑、第156号土坑、第157号土坑、第158号土坑、第160号土坑、第162号土坑、第163号土坑、第173号土坑、第179号土坑の12基がある。遺物を出土した土坑をみる限り、２群から３群の土坑群があると思われる。土坑それぞれの時期は推定にとどまるが、西地区第10号、第12号土坑を第Ｉ群、Ｉ39の土坑群を第II群土坑、H36の土坑群を第III群土坑、東地区Ｉ40の土坑群を第IV群土坑、Ｉ41の土坑群を第Ｖ群土坑、第98号土坑は１基のみであるが、他の土坑からかなりの距離を置くことから１群の土坑群とし、第VI群土坑とす

る。G41の土坑群とG40の土坑群は互いに近接し、分離し難いことから、G41の土坑群を第Ⅶ群ａ、G41の土坑群を第Ⅶ群ｂとする。北西地区の土坑については分離しないこととし、第Ⅷ群とする。

土坑群の内部構成をみると、各群は一括土器あるいは凹石、磨石、打製石斧を出土する土坑１基から２基と、遺物を出土しない土坑数基からなる点で類似している。また、Ⅰ類土坑の中でも比較的小さな土坑と大きな土坑から構成される点でも、第Ⅱ群、第Ⅲ群、第Ⅳ群、第Ⅶ群ａ、第Ⅶ群ｂについては共通する。第Ⅴ群土坑は袋状土坑を構成要素とする点で他の土坑群とは異質であるが、遺物を出土する土坑と遺物の出土がない土坑からなる点は他の土坑群と一致している。土坑群間の相違点としては、土坑の分布密度があげられる。第Ⅱ群、第Ⅲ群、第Ⅶ群ｂは密度が高く、北西地区の第Ⅷ群を除く他の土坑群は低い。土坑群の密度の差を、集団差と考えるのか、時間差と考えるかは、土坑の時期差、用途を土坑自体から判定する属性を見つけ出すことが必要である。この属性を見つけ出すために行なわれるべき分析方法には、土器の胎土分析、石器の原産地分析、土坑覆土の土壌分析が考えられるが、いずれも今回の調査期間中には実施できなかった。

土坑の用途については、墓穴、貯蔵穴、陥穴が考えられる。鴨田遺跡の土坑は、平面形状、断面形状とも通常の陥穴とされているものと大きく異なる。陥穴の中でも円形を呈するものがあるが(小林　1991)、坑底ピットをもつものが多い。鴨田遺跡西地区、東地区の土坑坑底については精査を行なったが、坑底ピットは検出されなかったことから、陥穴であるとは考えにくい。貯蔵穴には、断面形状に特徴のある袋状土坑をあてる場合が多いが、貯蔵穴が必ずしも袋状土坑に限られることはない（今村　1988）ことから、鴨田遺跡の土坑群には、貯蔵穴か墓穴、あるいは両者の混在の可能性が残される。土坑群の近くに居住遺構が認められないことは、貯蔵穴であろうヽ墓穴であろうと、特殊な在り方であるといえる。中期初頭に属すことが確定できる土坑に限ってみても分布範囲の広さには注目すべきである。また、土坑群は、東地区から西に向い、西地区と北西地区の間を走る浅い谷状地形を巡るように分布している。今後の調査研究に委ねられる部分が多いが、縄文時代中期初頭における鴨田遺跡は、この谷状地形を中心として、縄文時代中期初頭の集団間の接点、あるいは１集団にとっての特殊な場であった可能性も考えられる。

中期前半から中期後半にかけては住居址は検出されているが、土坑等の遺構がみられなくなる。中期前半の遺構には第１号住居址、第２号住居址がある。同時期の他の遺構では、第Ⅱ次調査区第29号土坑があるのみである。中期中葉の遺構は北西地区第169号土坑があるのみで住居址は検出されていない。中期後半曽利Ⅰ式期になると第３・４・７号住居址、第５号住居址、第９号住居址の５基の住居址があるが、土坑で曽利Ⅰ式期に属すものは確認されていない。第６号住居址は曽利Ⅰ・Ⅱ式期に属し、第10号住居址は曽利Ⅲ式期、第２号住居址は中期末に属すと考えられる。いずれの時期とも住居址以外の遺構は確認できない。

中期末から後期初頭の時期の遺構では、中期初頭同様明確な居住遺構はなく、方形柱穴列、竪

穴、屋外埋甕、焼土址といった用途不明の遺構の他、袋状土坑、土坑等が検出されている。分布範囲は中期初頭と異なり、北西地区に集中している。土坑の内、確実に中期末から後期初頭に属すと考えられるⅠ類土坑は、第132号、第149号、第150号土坑の3基である。この内、149号土坑は多量の焼土が検出された遺構で、他のⅠ類土坑とは用途が異なると考えられるため、北西地区のⅠ類土坑は2基とすくないが、遺物が出土していない土坑の内にも、中期末から後期初頭に属すものがあると思われる。北西地区にはII類土坑が多く検出されている。北西地区内での分布をみると、大きく2つに分けることができる。方形柱穴列の南東付近に分布する第141号、第142号、第147号、第151号、第153号、第154号、第155号および第132号土坑と重複しているものの8基、および調査区西側に集中する第165号、第166号土坑と重複する2基、第167号、第168号、第170号土坑と重複するもの、第176号と重複する1基、196号、198号の9基である。このうちで遺物が出土したものは中期末から後期前半までに属し、分布範囲も中期末から後期初頭の遺構群と一致することから、北西地区のII類土坑は中期末から後期初頭、後期前半の遺構であると考えられる。北西地区の他、第II次調査区からも第44号土坑、第51号土坑のわずか2基ながら、中期末から後期初頭のⅠ類土坑が検出された。またII類土坑も第5号、第43号、第53号、第54号、第57号、第63号、第71号土坑の7基が検出され、第II次調査区においても、第5号土坑を除くすべての土坑がⅠ類土坑の周辺に分布している。この時期の遺構分布範囲が台地先端に限られていることが確認された。

後期前半になると再び居住遺構が現われ、土坑等の遺構の検出例は減少する。しかし遺構の分布範囲は、中期最末から後期初頭の範囲を受継いでいる。居住遺構3基が検出されたとはいえ、敷石住居址1基と、柱穴が通常の竪穴住居址にくらべ、はるかに大きい遺構2基であり、住居址群の構成要素が中期末以前とは大きく異なっている。

鴨田遺跡においては中期初頭の土坑群の後に、竪穴住居による集落が形成された。竪穴住居による集落は以後、中期末まで断絶する時期がありながらも継続する。中期末から後期初頭の遺構群には居住遺構が欠けているのみで、同様に居住遺構が欠けている中期初頭の遺構群に比べ、その種類の多さが際立っている。用途不明の遺構群が1地点に集中して作られた後期初頭以後、竪穴住居とは住居形式の異なる居住遺構による集落が形成された。縄文時代中期初頭も、中期最末から後期初頭という時期も、縄文時代における変動期といわれるが、変動の内実はかなり異なっていたことが推察される。

（功刀）

引用・参考文献

今村　啓爾　1988　「土坑性格論」『論争・学説日本の考古学2先土器・縄文時代1』雄山閣

小林　深志　1991　『上見遺跡』　茅野市教育委員会

勅使河原　彰　1986　「第4節　縄文時代の茅野」『茅野市史　上巻』　茅野市

宮坂　英弐　1937　「信濃國諏訪郡上場澤の遺跡」『中部考古學會彙報』第2年6報

宮坂　英弐　1966　「第一編　豊平の原始文化」『豊平村誌』　豊平村誌編纂委員会

表１　鴨田遺跡住居址出土遺物組成表

遺構名	時期	打斧	横刃	粗大石匙	凹石	磨石	石鏃	石錐	磨斧	ピエス・エスキーユ	調整剥片	黒曜石剥片	石核	剥片	礫	軽石製品	備考
１号住居址	中期前半	4	4		2		2			4		26	3	7	14	2	打製石斧１，横刃型石器２は欠損品．石鏃１炉出土．
２号住居址	中期後半		1		1					4	1	5	1	1			蜂の巣石１，凹石１は集石内出土．
３号住居址	曾利Ⅰ		1						2			6	1	1	5	1	
４・７・８号住居址	中期	3	1	1			1			6	1	24	1	8	11	1	打製石斧３は欠損品，剥片１は敲打痕を残す．
５号住居址	曾利Ⅰ	1		1	2	1				1		4	2	2			打製石斧は欠損品．
６号住居址	中期後半	2	4			1					1	15	2	2	8		打製石斧１は欠損品．
９号住居址	曾利Ⅰ	6	4	1	4		1		1	12	3	25	2	7	43	2	砥石１．黒曜石原石１．
10号住居址	曾利Ⅱ	1	1		2				1	3		23	1	1	24		石製品１．土製品１．石棒１．黒曜石原石１．
11号住居址	堀之内	1	1						1	1		3	1				上部集石内出土石器を含む．
12号住居址	堀之内	1			3	1			2	3	1	6	1	3	4	2	柱穴，集石，柱穴範囲内出土石器の総計．
12号住集石	堀之内				2				2	2		1					
12号住Ｐ２	堀之内										1	1					
12号住Ｐ４	堀之内									1							
12号住Ｐ５	堀之内				1	1						4	1		3	2	黒曜石原石１．
13号住居址	堀之内				1					1							
方形柱穴列	中期末								1				1				磨製石釜は，竪穴１出土の磨製石斧基部と接合．
竪穴	称名寺	1	1		1	1		1	1	4	1	49	5		5	1	
焼土址	中期末				1					1		3			1		

表２　鴨田遺跡土坑一覧表(1)

土坑	位置	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	出土遺物	時期	備考	図
1	J34-a4･b4	楕円形	内湾	113	89	96	77	16				40
2	I34-j2	楕円形	内湾	101	72	90	49	20			坑底に凹凸あり.	40
3	I34-b2･c2	楕円形	内湾	190	83	173	75	25				40
4	H34-j1	円形	内湾	88	81	84	85	20			坑底が傾斜している.	40
5	H34-f4･g4	楕円形	外傾	116	68	103	56	18				40
6	H34-d4	楕円形	内湾	102	76	90	53	23				40
7	G33-j10･H33-a10		内湾									40
8	G33-j10･H33-a10	楕円形	内湾	381	204	332	147	29				40
9	G34-j2	円形	外傾	79	73	66	60	17				40
10	G34-g2	円形	外傾	109	93	93	80	33				40
11	G34-f1	楕円形	内湾	124	91	110	76	15				40
12	G34-e6	円形	外傾	110	97	82	79	29	一括土器	中期初頭		41
13	G34-b3	円形	内湾	81	77	64	62	20			坑底に凹凸あり.	41
14	G35-j1	円形	外傾	61	60	48	48	14				41
15	G35-j2	円形	外傾	120	109	103	88	18	礫１			41
16	H35-a4	円形	外傾	113	105	93	83	32				41
17	H35-b6	楕円形	外傾	150	114	124	94	26				41
18	H35-b2	円形	内湾	118	103	93	84	34				42
19	H35-c2	楕円形	外傾	61	57	30	10	64				42
20	H35-d1･d2	楕円形	内湾	201	145	166	102	28			坑底に凹凸あり.	42
21	H34-d10･e10	楕円形	外傾	123	98	102	80	35			坑底の一部に凹凸あり.	42
22	H35-e6･f6	楕円形	内湾	102	90	83	76	34				42
23	H35-h1･i1	不整形	内湾									43
24	H35-i2	円形	内湾	84	78	81	60	23				43
25	I35-c3･c4	楕円形	内湾	112	82	99	79	23			坑底に凹凸あり.	43
26	I35-c4	楕円形	内湾	89	68	85	55	34				43
27	I35-c5･c6	円形	内湾	82	70	63	54	17			底面が傾斜している.	43
28	I35-c4	円形	外傾	121	106	102	85	80	礫		底面楕円形.	43
29	I35-d5	円形	外傾	120	110	95	86	42	一括土器　横刃型石器１　凹石１　礫２	中期初頭		43
30	I35-c3･d3	円形	外傾	154	140	105	105	69				44
31	I35-d2･e2	楕円形	外傾	166	144	102	89	66				44
32	I35-e4	円形	外傾	120	113	108	86	34				44
33	I35-f4	楕円形	外傾	103	87	87	82	25				44
34	I35-g6	円形	外傾	115	111	85	79	49				44
35	I35-j2	円形	内湾	75	65	60	49	25			坑底に凹凸あり.	45
36	I36-j1	楕円形	外傾	101	90	86	76	27				45
37	I36-i2･j2	円形	内湾	83	80	66	63	23				45
39	H36-a3･a4	楕円形	内湾	81	56	56	32	32				45
40	H36-a3･a4	円形	内湾	144	131	110	107	30				45
41	G36-j1･h36-a1	楕円形	外傾	98	90	89	74	30				45
42	H35-a10･H36-a1	円形	外傾	96	96	74	70	26				45
43	G35-i10	楕円形	内湾	116	92	95	75	32				45
44	G36-i4･j4	楕円形	内湾	174	102	159	78	24				45
45	G36-f1･f2		外傾	129	115	109	89	27				45
46	G35-e10･f10	不整形	内湾	235	164	221	150	26				45
47	G36-e2	不整形	内湾	212	212	198	188	33				46

表３　鴨田遺跡土坑一覧表(2)

土坑	位置	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	出土遺物	時期	備考	図
48	G36-b2	円形	内湾	97	91	91	69	29				46
49	G36-b2	楕円形	内湾	182	103	162	92	38				46
50	G36-c4	円形	内湾	82	74	72	64	36				46
51	G36-c5	円形	外傾	90	85	81	75	29				46
52	G36-g5	楕円形	内湾	130	75	115	61	20			坑底に凹凸あり.	46
53	H36-b10・H37-b1	円形	外傾	110	108	67	65	72				46
54	H36-c8	楕円形	内湾	170	96	152	76	31			坑底が傾斜している.	46
55	H36-e10	楕円形	外傾	88	71	48	46	37	礫			47
56	H36-e8・e9	円形	外傾	107	105	91	90	70				47
57	H36-f8	円形	外傾	115	113	102	82	63				47
58	H36-e7	円形	外傾	142	142	129	118	46				47
59	H36-e6	円形	外傾	125	122	94	88	63				47
60	H36-g7	円形	外傾	94	93	73	67	70	凹石１			47
62	J39-e8・e9	円形	外傾	121	115	80	61	45	黒曜石剥片１			48
63	J39-e10	円形	直立	72	70	57	55	26	黒曜石剥片４			48
64	I40-b1	円形	外傾	90	89	67	65	38				48
65	I40-j2	円形	外傾	101	100	87	78	27				48
66									黒曜石剥片１			48
67									黒曜石剥片６　黒曜石石刻１　砕片１			48
68	J39-d5・d6	円形	外傾	96	88	84	82	29				48
69	J39-b5	円形	直立	80	67	72	62	20	土器破片　黒曜石剥片２	中期末		48
71	I40-e5・f5	円形	外傾	104	96	67	67	64	土器破片　黒曜石剥片９　破片２　石核１　ピエス２	中期初頭		48
72	I40-a8	楕円形	外傾	129	78	119	65	45	凹石１		坑底が荒れている.	49
73	I40-d4	円形	内湾	126	109	78	74	47	打製石斧２　黒曜石剥片２　破片２			49
74	H40-e3	円形	内湾	77	71	61	61	28				49
75	H39-d8	円形	直立	106	106	102	95	27			坑底が荒れている.	49
76	G39-j5・j6	円形	外傾	90	79	80	68	24			坑底が荒れている.	49
77	G40-f5	円形	外傾	81	77	60	59	60			坑底が荒れている.	49
78	G40-b4・b5	円形	外傾	115	110	97	87	32	土器破片	中期初頭	坑底が傾斜している.	49
79	G40-d5	円形	直立	109	100	80	71	49	一括土器　黒曜石剥片１　破片１	中期初頭	坑底が傾斜している.	50
80	G40-e5・f5	楕円形	外傾	148	92	139	76	24	一括土器　凹石１　横刃型石器１　黒曜石剥片１　破片１	中期初頭		49
81	H40-a6	円形	内湾	81	75	71	64	19			坑底が荒れている.	51
82	H41-d3	円形	外傾	84	83	75	74	19			坑底が荒れている.	51
83	H41-c2	円形	外傾	98	92	87	77	22				51
84	H41-b2	円形	外傾	84	83	71	67	23				51
85												51
86	G41-j1	楕円形	外傾	90	68	74	54	31				51
87	G40-g10・h10	円形	外傾	90	83	70	65	31				51
88												51
89	G40-i8	楕円形	直立	197	102	186	100	30				51
90												51
91	G40-f9・g9	楕円形	内湾	161	97	145	94	30			坑底が荒れている.	51
92	G41-e2	楕円形	外傾	103	96	95	74	14	一括土器　黒曜石剥片１　破片２	中期初頭		52
93	G41-a3	楕円形	外傾	115	96	94	82	32				52
94	F41-j3	円形	内湾	102	96	54	47	43	黒曜石剥片３			52

表4　鴨田遺跡土坑一覧表(3)

土坑	位置	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	出土遺物	時期	備考	図
95	F41-h2	円形	外傾	93	90	81	71	45				52
96												52
97									黒曜石剝片1			52
98	F42-e4	円形	外傾	128	119	91	87	54				52
99	G41-g6	円形	外傾	100	95	86	84	36	土器破片　凹石1　黒曜石剝片2　破片1	中期初頭		53
100	G41-g8	円形	外傾	84	79	76	67	27				53
101	G42-e3・h3	円形	内湾	64	61	55	54	14			坑底が荒れている.	53
102	G42-g2	不整形	内湾	134	119	122	104	21			坑底が荒れている.	53
103	h42-f8	不整形	内湾	163	90	140	77	46			坑底が傾斜している.	53
106	I42-b8	円形	内湾	119	112	82	76	44				53
107	I42-d5・e5	楕円形	外傾	84	61	78	54	28			坑底が傾斜している.	53
109	J42-c7	不整形	外傾	165	127	104	62	47			坑底が傾斜している.	53
111	J41-b10・C10	円形	外傾	100	87	89	74	15	黒曜石剝片1		坑底が荒れている.	54
112	J41-a8	円形	外傾	110	95	77	72	14			坑底が荒れている.	54
113	I41-j4・j41-a4	円形	外傾	95	78	74	74	34	土器破片　ピエス1　黒曜石剝片4　石核2	中期初頭		54
114	I41-j4	円形	外傾	104	96	93	90	22			坑底が荒れている.	54
115	J41-a3	円形	直立	97	96	88	87	70	黒曜石剝片3　石核2		袋状土坑.	54
116	J41-g10・J42-g1	円形	内傾	102	85	80	77	64	磨石1　黒曜石剝片14　石核2　礫2		袋状土坑.	54
117	I41-g9・g10	円形	内湾	69	61	62	56	27	ピエスエスキーユ1			54
118	C33-a5	円形	内湾	113	105	83	72	37	土器破片		坑底が荒れている.	55
119	C33-a4	不整形	内湾	132	110	107	75	28				55
120	C32-b10	円形	内湾	76	68	59	52	32				55
121	C32-b9・b10	楕円形	外傾	136	93	124	76	30				55
122	C32-b9	円形	内湾	156	143	113	111	61	土器破片　黒曜石剝片1	中期初頭		55
123	C32-a10	楕円形	内湾	124	88	108	69	27	土器破片			55
124	B33-g1・h1	円形	内湾	105	95	73	67	40				55
125	B32-g9・h9	円形	内湾	100	98	84	80	23				56
126	B32-h8	円形	内湾	95	90	80	75	17			坑底が荒れている.	56
127	B32-h7	円形	外傾	108	100	88	80	33	土器破片	前期末		56
128	B32-i7	円形	直立	108	103	92	88	45				56
129	C32-a8	円形	外傾	67	61	55	53	21	土器破片　黒曜石剝片1	後期前半		56
130	C32-b7	円形	外傾	46	45	32	24	47	土器破片	中期末～後期前半	上端掘りすぎ.	56
131	C32-b5	円形	内湾	91	90	77	71	30	土器破片	中期末～後期前半		56
132	C32-a3・b3	楕円形	内湾	134	107	103	90	17	一括土器　凹石1　礫1	中期末・後期初頭	ピット1基重複，坑底中央にピット	57
133	B32-j5	円形	外傾	81	77	65	64	38				57
134	B32-i6	円形	内傾	123	111	84	78	165	一括土器　磨石1　黒曜石剝片12　破片1　石核2　礫4	中期末・後期初頭	袋状土坑.	58
136	B32-I4・i5	円形	外傾	81	74	59	51	46				
137	B32-j4	不整形	斜位	98	56	21	15	71	土器破片	後期前半	138土坑と重複．合せて計測.	60
138	B32-j4	楕円形	不明									60
139	B32-i4・j4	楕円形	内湾	115	79	101	56	17	土器破片　打製石斧1　黒曜石剝片1	中期末～後期前半	坑底が荒れている.	60
140	B32-j3	円形	外傾	63	61	42	41	34	礫1			60
141	B32-i3	円形	外傾	56	56	26	23	54	土器破片	後期初頭	上端掘りすぎ.	60

表５　鴨田遺跡土坑一覧表(4)

土坑	位置	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	出土遺物	時期	備考	図
142	B31-i2	円形	外傾	136	124	123	112	56				60
143	B32-h4	円形	内湾	51	50	30	25	27	黒曜石剝片２		坑底が荒れている.	60
144	B32-e2･e3	円形	外傾	111	109	84	75	53	一括土器（浅鉢）	中期初頭		60
147	B32-h1	円形	直立	46	34	28	21	49	土器破片　黒曜石剝片１　礫１	中期末～後期前半		61
148	B32-j1	円形	内湾	62	58	54	39	22	土器破片　黒曜石剝片１			61
149	B31-j7	円形	外傾	100	92	74	70	58	土器破片　礫19　黒曜石剝片14　石核３　原石１	中期末・後期初期	多量の焼土	61
150	B31-j8･c31-a8	円形	外傾	94	85	79	70	26	一括土器　石皿１　礫２　黒曜石剝片２	中期末		62
151	B31-h9･h10	不整形	外傾	97	85	30	22	46	土器破片　調整痕のある剝片　黒曜石剝片１	中期末	土坑２基とピット１基が重複.	62
152	B31-g10	楕円形	外傾	89	79	75	65	26	土器破片　黒曜石剝片３	前期末		62
153	B31-g9	楕円形	外傾	84	70	24	19	45			土坑とピットが重複.	62
154	B31-f10	円形	外傾	47	32	24	19	48			上端掘りすぎ.	62
155	B32-c1	円形	外傾	45	32	34	24	44	土器破片　黒曜石剝片１	中期初頭	上端掘りすぎ。坑底が傾斜している.	63
156	B31-c9	円形	内湾	115	98	92	87	49	一括土器　礫１　調整痕のある剝片１　黒曜石剝片５	中期初頭		63
157	B31-c8･c9	円形	内湾	92	90	66	65	34	土器破片　ピエス・エスキーユ１　黒曜石剝片１　石核１	中期初頭		63
158	B31-d8	楕円形							土器破片　黒曜石剝片１	中期初頭	土坑が２基重複か？	63
159	B31-d8	楕円形									土坑が２基重複か？	63
160	B31-d8･e8	円形	外傾	112	98	86	86	62	土器破片　打製石斧１　黒曜石剝片３　破片１	中期初頭		63
161	B31-e6	円形	外傾	157	132	104	98	62	土器破片　黒曜石剝片１		坑底に凹凸あり.	63
162	B31-F4･f5	円形	外傾	125	125	105	99	39	土器破片　石皿１	中期初頭		64
163	B31-e3	円形	外傾	116	100	85	79	38	一括土器　黒曜石剝片１	中期初頭		64
164	B31-e2	円形	内湾	112	101	98	79	29				65
165	B31-e2	円形	外傾	62	62	40	29	61				65
166	B31-f2･g2	隅丸方形	外傾	124	111	108	86	30	土器破片		ピット２基と重複.	65
167	B31-f3	円形	外傾	83	79	43	20	49	土器破片　黒曜石剝片２	後期前半	中段がある.	65
168	B31-g3･g4	円形	外傾	52	48	25	25	53				65
169	B31-h4	円形	外傾	141	136	115	111	33	一括土器	中期中葉		66
170	B31-h2	不整形	外傾	167	160	153	130	25	土器破片　石棒１　礫１　黒曜石剝片１　破片１	後期前半	ピット２基と重複.	66
171	B31-h2･i2	楕円形	外傾	179	83	176	72	29				66
172	B31-i2	楕円形	外傾	94	74	78	65	35				66
173	B31-i1･i2	楕円形	内湾	106	96	81	69	61	土器破片　小型土器　石皿（欠損品）　黒曜石剝片２	中期初頭	坑底が傾斜している.	67
174	B31-i2	円形	外傾	75	69	60	49	39	土器破片	中期初頭	坑底が荒れている.	67
175	B31-i2･i3	円形	内湾	109	100	81	71	59				67
176	B31-h3	楕円形	外傾	83	69		53	25	土器破片　礫２　ピエスエスキーユ２　黒曜石剝片２		ピット１基と重複.	66
177	B31-g2･g3	隅丸方形	外傾	115	113	99	97	23	土器破片　横刃型石器１　凹石３　磨石１　礫46　ピエス１　黒曜石剝片10　石核１			65
179	B32-h5･h6	円形	直立	90	84	75	69	50	土器破片　黒曜石剝片１	中期初頭		67
180											欠番,方形柱穴列Pitgに変更.	

表６　鴨田遺跡土坑一覧表(5)

土坑	位置	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	出土遺物	時期	備考	図
181	B32-e5	円形	外傾	107	101	91	86	30	凹石１			67
182	B32-d1・d2	円形	外傾	73	66	60	52	17				68
183	B31-f8	円形	外傾	105	96	80	79	29	礫１　黒曜石剝片３　破片２		坑底が荒れている．	68
184	B31-j9	円形	外傾	64	62	46	40	34			坑底が荒れている．	68
185	C31-a9	円形	直立	62	60	50	48	39			坑底が荒れている．	68
186	C31-c6・c7	楕円形	外傾	99	83	76	66	30			坑底中央にピット１．	68
187	C31-a6	隅丸長方形	外傾	171	137	146	114	42			坑底に凹凸あり．	68
188									一括土器	中期末		68
189	C31-a4・a5	円形	外傾	71	69	52	50	29				68
190	C31-b4	円形						34				68
191	C31-a4	楕円形						37				68
192	C31-a2	円形	外傾	61	53	45	40	34			坑底が荒れている．	68
193	B31-j1	楕円形	外傾	114	95	100	83	21			坑底に凹凸あり．	69
194	B31-I3・j3	不整形	内湾	195	85	166	55	26	土器破片		坑底に凹凸あり．	69
195	B31-g1	隅丸長方形	外傾	103	72	76	54	43	礫25　ピエス・エスキーユ６　黒曜石剝片21		土坑２基と重複．	69
196	B31-g1・h1	楕円形	外傾	65	50	41	31	37				69
197	B31-g1	円形	外傾					19				69
198	B31-g3	円形	外傾	45	35	10	9	45	土器破片　礫４	中期末～後期前半		69
199												69
200	B32-d5・d6	円形	外傾					44	土器破片	中期末～後期前半		69
201	B32-d6	円形	外傾					51	黒曜石剝片２　破片１		坑底中央にピット１．	69
Ⅱ４	K45・K46	円形	内湾	54	49	28	26	31	土器破片　黒曜石剝片１	後期初頭～後期前半		70
Ⅱ５	J46	円形	内湾	60	55	28	28	42				70
Ⅱ６												70
Ⅱ７	L35	楕円形	内湾	114	96	100	85	30				70
Ⅱ８	N34	円形	外傾	45	45	27	27	38			上端掘りすぎ．	70
Ⅱ９									黒曜石剝片１			70
Ⅱ10	M33	円形	内湾	48	42	38	35	42				70
Ⅱ11	M33	円形	外傾	60	53	40	36	37				70
Ⅱ12	M31	楕円形	内湾	94	65	70	53	36				70
Ⅱ13	L29	楕円形	内湾	65	53	51	42	24			坑底が荒れている．	70
Ⅱ14												70
Ⅱ15	I29・I30	円形	内湾	89	89	74	71	27	土器破片	中期末	坑底が荒れている．	70
Ⅱ16	H28	円形	内湾	78	68	69	60	27			坑底が荒れている．	70
Ⅱ17	I27	円形	内湾	98	92	71	64	24				71
Ⅱ18	I26	隅丸長方形	外傾	92	78	76	66	32	土器破片	中期後半		71
Ⅱ19	M25	隅丸長方形	内湾	45	43	38	30	14			坑底が荒れている．	71
Ⅱ20	L25	楕円形	内湾	49	42	45	29	20				71
Ⅱ22	024・025	楕円形	内湾	109	92	100	79	29			坑底が荒れている．	71
Ⅱ24	N24	楕円形	外傾	91	82	78	70	37			坑底に凹凸あり．	71
Ⅱ25	N23	楕円形	内湾	88	72	76	65	16			坑底が傾斜している．	71
Ⅱ26												71
Ⅱ27	L23	楕円形	直立	89	76	80	70	22				71
Ⅱ29	L22	楕円形	内湾	112	67	104	54	13	土器破片	中期前半	坑底が傾斜している．	71
Ⅱ31	M22	円形	直立	58	50	49	41	29				72
Ⅱ36	I21・J21	円形	外傾	58	58	46	44	30			坑底に凹凸あり．	72

表７　鴨田遺跡土坑一覧表(6)

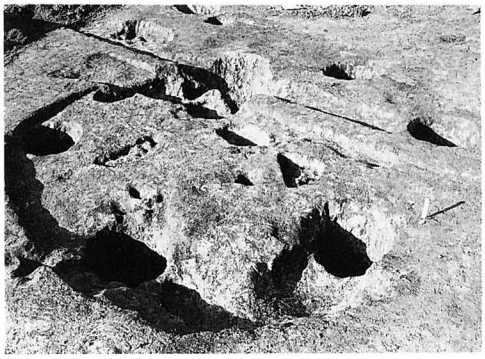
土坑	位置	平面形	断面形	平長	平短	底長	底短	深さ	出土遺物	時期	備考	図
Ⅱ41	I20	楕円形	外傾	122	95	94	75	41			坑底に凹凸あり.	72
Ⅱ43	J20	楕円形	外傾	92	75	77	66	31			ピット１基と重複.	72
Ⅱ44	H19･H20	楕円形	外傾	114	94	78	76	54				72
Ⅱ45	I19･I20	楕円形	外傾	71	58	48	41	30	一括土器　磨製石斧１	後期初頭	坑底にピト１．坑底から深さ53cm.	72
Ⅱ46	I19	楕円形	外傾	86	76	70	60	32				72
Ⅱ47	G18	円形	内湾	90	89	71	68	19				73
Ⅱ48	G17･G18	円形	直立	81	69	74	62	23				73
Ⅱ49	H10･I10	円形	外傾	100	86	89	69	29				73
Ⅱ50	H12	楕円形	外傾	152	122	146	103	51			坑底に凹凸あり.	73
Ⅱ51	G12･H12	楕円形	外傾	109	93	96	79	37	土器破片　礫２　黒曜石剝片３　破片1	中期末	坑底に凹凸あり.	73
Ⅱ52	G11･G12	楕円形	外傾	87	66	70	48	20				73
Ⅱ53	I7	楕円形	外傾	51	39	41	23	18				73
Ⅱ54	H11･H12	楕円形	直立	53	42	38	32	48				73
Ⅱ55	J9	楕円形	内湾	54	35	17	12	19				74
Ⅱ56	J9	円形	外傾	75	72	54	53	55				74
Ⅱ57	K9	楕円形	外傾	61	38	46	28	29			坑底が傾斜している.	74
Ⅱ58	K8	楕円形	内湾	82	63	48	40	47	土器破片　黒曜石剝片１	後期初頭～後期前半		74
Ⅱ59	J8	楕円形	外傾	70	50	59	41	29	黒曜石剝片１　破片１			74
Ⅱ60	H9	楕円形	外傾	78	67	66	53	40			坑底に凹凸あり.	74
Ⅱ61	K7	円形	外傾	50	47	41	35	17	土器破片	後期前半		74
Ⅱ63	I8	楕円形	外傾	49	37	35	27	21				73
Ⅱ64	H7	楕円形	外傾	60	45	45	39	20				74
Ⅱ65	I5･I6	楕円形	外傾	71	43	57	32	17				74
Ⅱ66	G4･G5	楕円形	外傾	135	121	117	105	30				74
Ⅱ67	G4	楕円形	外傾	83	66	66	56	29			坑底に凹凸あり.	75
Ⅱ69	J1	楕円形	内湾	137	108	125	96	30				75
Ⅱ70	K1	円形	外傾	115	113	101	92	29				75
Ⅱ71	M5	楕円形	直立	61	53	46	40	62	土器破片	後期初頭～後期前半		75
Ⅱ72	M3	円形	斜位	34	30	19	18	42				75

図　　版

II次　調査区東側全景　手前9号住（北東側から）

II次　10号住居趾（南側から）

II次　11号住居趾撹乱部取上げ後（南東側から）



II次　12号住居趾（南東側から）

II次　13号住居趾（南側から）

図版2

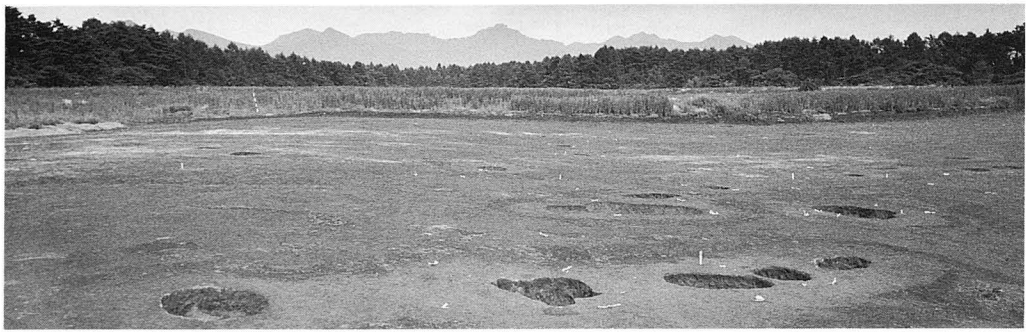
Ⅰ次　北西地区全景、方形柱穴列、竪穴を中心として（北西側から）

Ⅰ次　北西地区全景（南側から）

Ⅰ次　西地区全景　手前は14号住居趾（西側から）

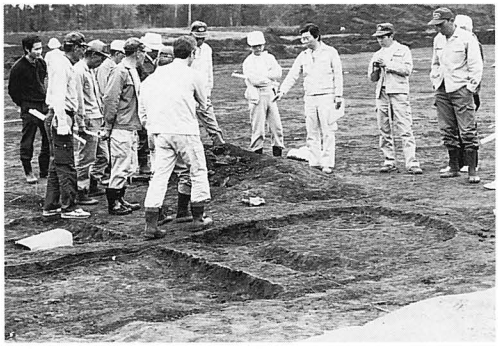
Ⅰ次　西地区全景（南東側から）

Ⅰ次　東地区全景（北東側から）



Ⅰ次　東地区全景（北西側から）

Ⅰ次　東地区発掘調査作業

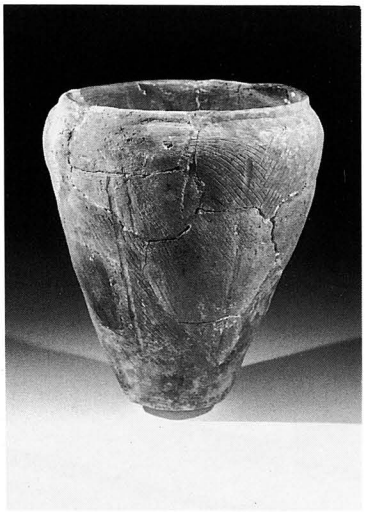


Ⅰ次　東獄4734開発委員会による発掘調査視察

Ⅱ次　9号住発掘調査作業風景

Ⅱ次　最終的には雪が舞う中で続けられた調査

II次　1号住居趾出土土器

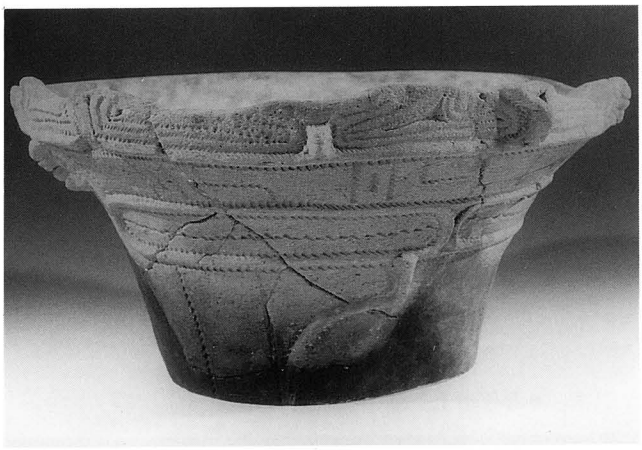


II次　2号住居趾出土土器

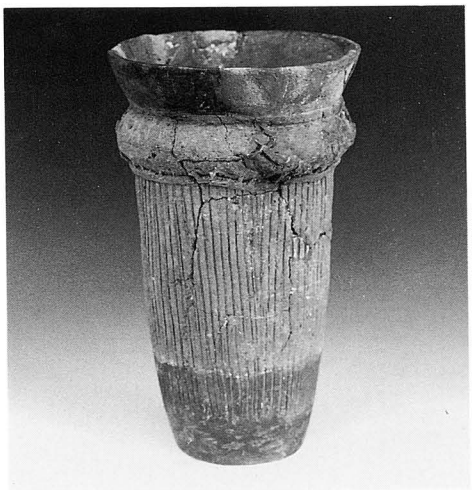
II次　3号住居趾出土土器

II次　4、7号住出土土器

II次　4号住居趾出土土器



II次　8号住居趾出土土器



II次　5号住居趾出土土器

II次　6号住居趾出土土器

図版 6

II次　9号住出土土器

II次　10号住出土土器と石器（右上）

II次　11号住居趾出土土器（左頚部、右胴下部）

II次　12号住居趾出土土器（左釣手と口縁部、右胴部の一部）

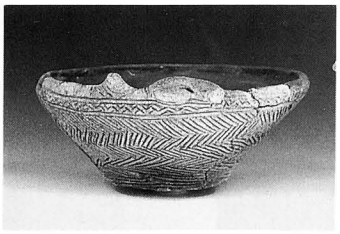
Ⅰ次　14号住居趾（南側から）

張り床面

掘り上げ面

出土遺物

Ⅰ次　163号土坑出土土器

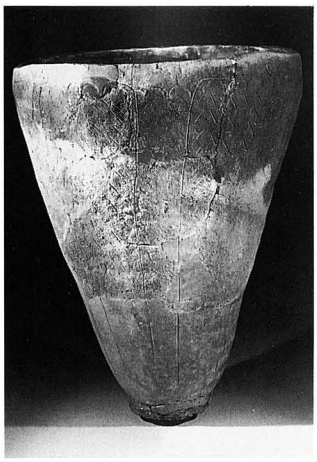


Ⅰ次　144号土坑出土土器

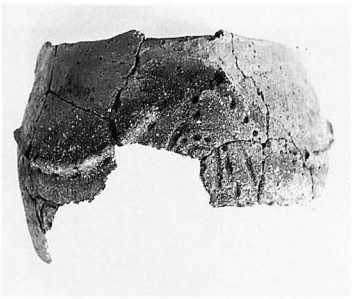
Ⅰ次　169号土坑出土土器

Ⅰ次　179号土坑出土土器

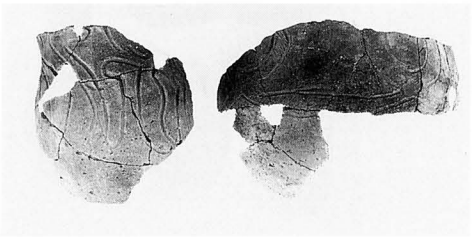
Ⅰ次　1号屋外埋甕出土土器



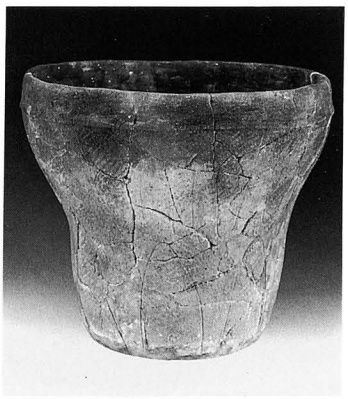
Ⅰ次　134号土坑出土土器



Ⅰ次　134号土坑出土土器



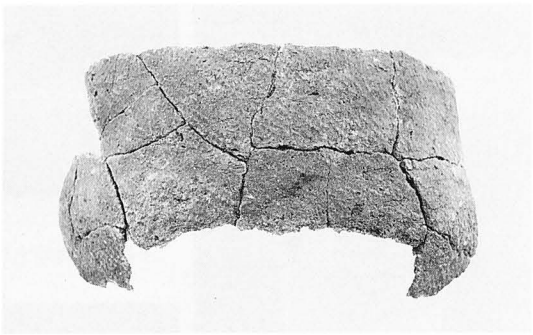
Ⅰ次　1号竪穴出土土器



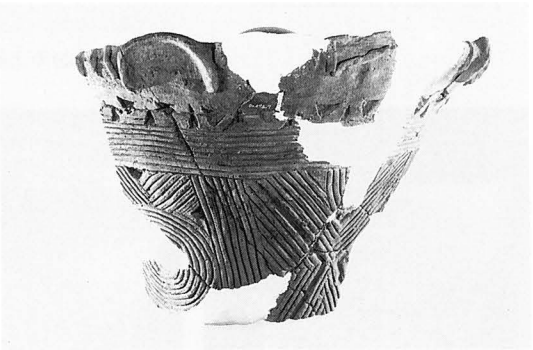
Ⅰ次　150号土坑出土土器

図版 10

Ⅰ次　79号土坑出土土器



Ⅰ次　12号土坑出土土器



Ⅰ次　29号土坑出土土器

Ⅰ次　92号土坑出土土器

Ⅱ次　9号住居趾出土石器
（下段中央と右は軽石製品）

1．新水掛遺跡調査前現況(1)

4．新水掛遺跡重機作業風景(1)

2．新水掛遺跡調査前現況(2)

5．新水掛遺跡重機作業風景(2)

3．新水掛遺跡調査前現況(3)

6．新水掛遺跡重機作業風景(3)

鴨田遺跡

「グリーンヒルズ・ヴィレッジ」
住宅団地造成工事に伴う緊急発掘調査

平成4年3月11日　印　刷
平成4年3月16日　発　行

編　集
発　行　長野県茅野市塚原2丁目6番地1号
茅野市教育委員会

印　刷　ほおずき書籍株式会社